

内裏造営関係基礎史料集

2

二〇二四年度東京大学史料編纂所一般共同研究

「中井家文書」を用いた大工組織の業務復元に関する基礎的研究」

内裏造営関係基礎史料集

2

二〇二四年度東京大学史料編纂所一般共同研究

「中井家文書」を用いた大工組織の業務復元に関する基礎的研究」

目次

例言・略解題

①安政造内裡坪取御間数等諸式覚帳 翻刻

紫宸殿（・清涼殿）

(1)造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書

(3)寛政元己酉年三月ヨリ御造営伺帳

(4)御普請方ヨリ伺帳

(5)御造営承知帳

(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣

(7)御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ヶ所付

内侍所

(1)造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書

(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣

(3)寛政元己酉年三月ヨリ御造営伺帳

(5)御造営承知帳

(7)御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ヶ所付

(4)御普請方ヨリ伺帳

常御殿

(1)造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書

(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣

(5)御造営承知帳

(3)寛政元己酉年三月ヨリ御造営伺帳

(7)御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ヶ所付

小御所

(1)造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書

(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣

(5)御造営承知帳

(3)寛政元己酉年三月ヨリ御造管伺帳 79
(7)御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ヶ所付
御学問所 80

(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書 80
(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣 81
御三間

(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書 81
(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣 81
表方雑々

(1)造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳 82
(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書 86
(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣 87

(5)御造管承知帳 90
(3)寛政元己酉年三月ヨリ御造管伺帳 90
(7)御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ヶ所付 91

参内殿対屋男居以下口向雑々
(1)造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳 93
(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書 96
(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣 98

②安政新造内裏諸備忘 翻刻 102

参内殿対屋男居以下口向雑々(承前)
(5)御造管承知帳 103
(3)寛政元己酉年三月ヨリ御造管伺帳 104

(7)御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ヶ所付 106
雑々

(1)造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳 111
(5)御造管承知帳 111
(2)天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書 112

(6)御指図御用坪取間尺丈尺之扣 113
(3)寛政元己酉年三月ヨリ御造管伺帳 114
(7)御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ヶ所付 116

例言

本書は東京大学史料編纂所二〇二四年度一般共同研究「中井家文書」を用いた大工組織の業務復元に関する基礎的研究（研究代表者・角田真弓）の成果を報告するものである。この研究は、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「京都御所造営関係文書」（江戸時代の京都大工頭中井家で作成された帳簿が大半を占める）のうち寛政度・安政度造営分を主たる対象としつつ、大工側で作成する帳簿類を相対的に検討する環境を整えることを目的として、内裏造営事業に関する基礎的情報を持つ史料の読解を進めてきた。かかる視点から、本書では宮内庁書陵部図書寮文庫が所蔵する①「安政造内裡坪取御間数等諸式覚帳」、②「安政新造内裏諸備忘」の翻刻を行うものである。

また本翻刻には、科研費・基盤研究（A）「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明」（研究代表者・海野聡）、基盤研究（B）「中近世の建築関連史料の史料学的基盤構築と高度利用手法の開発」（研究代表者・藤井恵介）、および松井角平記念財団研究助成「江戸時代後期の大工組織の業務復元に関する基礎的研究」（研究代表者・新井重行）、鹿島学術振興財団研究助成「京都御所に伝わる調度品の学際的文化史研究」（研究代表者・新井重行）による成果が含まれている。

略解題

①「安政造内裡坪取御間数等諸式覚帳」（二二〇・一一五、一冊）は袋綴の横帳で、法量は縦一三・八cm×横二〇・五cm、②「安政新造内裏諸備忘」（二二〇・一〇九、一冊）も袋綴の横帳で、法量は縦一四・一cm×横二〇・四cmである。ともに野宮家旧蔵本であり、野宮定功（二八一五〜一八八一）の筆になる。現状は①・②とも後補の渋紙表紙であり、①の内扉（旧表紙か）には「番外巻ノ内（朱書）」・「改式百八十四」・「第三十一（朱書）」・「取調中 野宮家」、②の初丁には

「定功卿記八十二」・「野宮カ（朱書）」・「改式百八十五」と記された紙片が貼られている。

両書はもと一具のものであり、書名からは分かりにくいのが、寛政度の内裏造営に関する七種の帳簿をもとに、殿舎ごとの情報を抜き出して編集したものである。筆者の野宮定功は、安政度の内裏造営において修理職奉行加勢を務めており、安政度造営の記録等も多く残している。本書は定功が、前例として参照すべき寛政度の事例を調査する目的で作成したものと考えられる。

両書に収められる帳簿は次の通り（目次にも便宜番号を付した）。

- (1) 「造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳」（天明八年八月〜寛政元年八月）
 - (2) 「天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書」（天明八年五月〜寛政元年十二月）
 - (3) 「寛政元己酉年三月ヨリ御造営伺帳」（寛政元年三月〜二年七月）
 - (4) 「御普請方ヨリ伺帳」（寛政元年三月〜二年十月）
 - (5) 「御造営承知帳」（寛政元年三月〜二年十月）
 - (6) 「御指図御用坪取間尺丈尺之扣」（天明八年六月〜八月）
 - (7) 「御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ケ所付」（年紀なし）
- 先述の通り、両書は右の帳簿から殿舎ごとに必要な情報を抜き出して作成されたものであり、その構成は、「紫宸殿（・清涼殿）」「内侍所」「常御殿」「小御所」「御学問所」「御三間」「表方雑々」「参内殿対屋男居以下口向雑々」「雑々」となっている。「清涼殿」については、内扉に項目が見えるものの、本文に単独の項目がなく、やや不審であるが、「紫宸殿」に含めているか、あるいは「清涼殿」の項目が欠落している可能性がある。なお、すべての項目に七種の帳簿の情報がある訳ではなく、また各項目の帳簿の配列順は一定でない。
- このうち(5)「御造営承知帳」の原本は、宮内庁書陵部所蔵文庫所蔵の「御造営御用承知帳」（『造内裏並遷幸一会』五一五〜一、全二点のうち）にあたり、相互に比較をすることで、本書を編集する際に漏れてしまっている情報があること、つまり各帳簿を繋ぎ合わせても、原本と同じものにはならないことが知

られる。また(3)(4)(5)は、情報を集中的に管理するために、御指図御用掛が主体となつて寛政元年三月から始めた帳簿であり、内容は相互に関係している(註間直樹編『京都御所造営録―造内裏御指図御用記』一―五、中央公論美術出版、二〇一〇―二〇一五年、新井重行「寛政度内裏造営に関する史料の検討―承知帳・伺帳を中心に―」『禁裏・公家文庫研究』第八輯、思文閣出版、二〇二二年を参照。なお(5)の原本にあたる「御造営御用承知帳」については『内裏造営関係基礎史料集』(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―二〇二四)に翻刻がある)。

(2)については、「紫宸殿(・清涼殿)」の項に「半紙、豎帳、御指図御用坪取間尺丈尺之拍卜大略同物也、可併見、奥ニアリ」と見え、(6)については同項に「この横帳、丈尺坪取等往反拔書ト大略同物也、可併見、前ニアリ」とあることから、作成時に定功は、(2)(6)を同種の帳簿と認識していたことが分かる。この二書には、「(修理職奉行加勢) 大原殿面会」「(御指図御用掛) 勢多へ相達」「(勢多より伝達)」「(御指図御用掛) 土山より表へ差上」「(棟梁) 岡島上野掾へ申渡」などの表現が共通しており、敬称の有無や、文書の動きなどから考えるに、御指図御用掛の作成したものである可能性が高いだろう。

これらの帳簿については、記載内容から知られる個別の作業の経緯、意思決定の過程、作成主体やその目的などの点でさらなる検討を要するが、寛政度の内裏造営事業の研究に、これまで使用されてこなかった情報を多く提供するものであり、既知の史料と併せて検討することで、造営事業をより立体的に理解することが可能になると期待される。

翻刻にあたっては、①「安政造内裡坪取御間敷等諸式覚帳」のうち「内侍所」の項末の(4)「御普請方伺ヨリ伺帳」は、後半の数丁が脱落し、②「安政新造内裏諸備忘」の末尾に綴じられたと考えられるので、正しく接続する位置に復元して釈文を示した。また、文字の右または左に小さな○印が付されている場合があり、抹消と判断し難いところがあったので、そのまま表示してある。

なお、②「安政新造内裏諸備忘」には、二通の書付が付属しているが、その

内容は障子の画題や画師に関するものであり、さらに文化十三年、天保七年、弘化三年の修復における画題・画師に関する書入れがあることから、寛政度の造営とは直接的な関係がないものと考え、翻刻を省略した。(新井重行)

〔凡例〕

- 一、本稿は、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵①「安政造内裡坪取御間数等諸式寛帳」(二二〇・一一五、一冊)、②「安政新造内裏諸備忘」(二二〇・一〇九、一冊)を翻刻するものである。
- 一、両者はもと一具であり、一部、原形を推定して翻字した部分がある。
- 一、翻刻は通行の方針に倣う。
- 一、朱書は『』で示す。
- 一、改行は底本のままとする。
- 一、文字は通行の字体に改め、読点および並列点を加える。
- 一、改丁の箇所には「」を付し、丁数を付す。

①「安政造内裡坪取御間数等諸式寛帳」翻刻

(外題) 安政造内裡坪取御間数等諸式寄帳 全

(内扉) 紫宸殿

清涼殿

内侍所

常御殿

小御所

御学問所

御三間

表方雑々

参内殿対屋男居以下口向雑々

雑々

(本文)

一番 造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

紫宸殿

一、梁行拾三間三尺五寸 桁行拾三間五尺五寸

東廂卷間三尺五寸 西廂卷間三尺五寸

東階隱卷間三尺五寸 宛式个所

西階隱卷間三尺五寸 宛式个所

此坪百九拾三坪五分六厘、

一、賢聖障子之所九間、

内

中央子獅々唐戸、北裏松、

獅々子口上宝来山、

東方式夕間目開戸三本目之柱江建付、

西方式夕間目開戸三本目之柱江建付、

西庇取合式夕間半之所壁内簀子取合、

部戸内前□、

但式夕間半二而北之方小間、

南北唐戸口兩脇本柱下小柱之間白壁、

南廂

部戸 九ま 内前□

東面唐戸口中高

兩脇本柱・小柱之間白壁、

東廂

簀子取合部戸式ま半、北之方小ま、

南北唐戸、西庇同断、

北廂

┌ (1才)

南側高板羽目九ま共

内唐戸口開戸口有之、

北側九ま

内

東方第一之ま唐戸本柱・小柱有之、

同第二・第三・第四部戸内前□、

同第五唐戸本柱・小柱有之、

同第六・第七・第八部戸内前□、

同第九唐戸本柱・小柱有之、

東西唐戸本柱・小柱之間白壁、

簀子四方共

幅六尺、

南階 拾八級二而壹丈八尺、

西簀子

内衙門南西側柱ト東良角トノ柱江壁仕切、

階段九級之上、簀子五尺宛ニ相成候事、

北簀子

良角柱取合廊下之間、脇戸有之、

脇戸方東外階段九級、登高欄有之、

乾之方

同断、但脇戸有之、廊下無之、

簀子同断、

南廂

東西九級之階段、九級二而中九尺縮メ、壹級毎二

四方角

壹寸宛縮メ候事、

階隱之事、柱角柱四方共、側柱ニラミ合ニ建候事、

壇上高 壹尺八寸、

但南側ニ而写之通切込有之、縁束地上方建候事、

未申九級階段之所、壇上下石階式段、

但壹段六寸宛、

乾角九級之階、同断、

巽角・良角九級之階段下并統脇戸九級階段

之下石階壹段、但六寸、

八月十八日、

一、勢田^多大判事方紫宸殿東軒廊軒出如何程有

之候哉書付出し候様申聞、則高丘殿御面会ニテ、軒出如何

程ニ致候哉御尋申上候処、樋掛り候様相成候へ者、宜候間、

凡之書付出し候様被命、則上野掾へ申付、書付左之通、

東北廊・左近陣座・土間庇、右御屋ね造合仕候へハ、

軒出壹間程ニも相成申候、土間庇縫破風廂造仕候而ハ、

自然と軒下り候故、南庇之方ニテ軒出三尺五寸程ニ

相成可申奉存候、右凡積り所ニ御座候、尤委義ハ割

方不仕候而ハ難申上候、

右勢田^多大判事へ書付遣ス、

右書付間違ニ候、書改左之通、

一、東軒廊下御屋根両流、軒出三尺五寸方四尺程

迄ニ相成申候、尤軒高二応シ、いか様共五寸・六寸之儀ハ

相成可申候、尤委義ハ割方不仕候テハ難申上候、

一、宝永出来之常御殿下、此度御造營之常御殿下、

両様坪数今晚中ニ相糺置、明朝無間違差上可申、

急々御入用之旨被仰渡候由申聞候ニ付、則岡嶋上野

┌ (1ウ)

┌ (2才)

掾へ申渡又、

一、宝永御造宮常御殿 此坪式百式十壹坪壹分五厘、

一、此度之常御殿 此坪数百八十四坪式分五厘、

指引三拾六坪九分減少二相成候、

「(2ウ)

十月廿四日、

一、紫宸殿階隱屋根、被仰出候趣二而八保方無御座候、東

西軒出壹丈余之割二相成申候処、南面八軒出壹丈六尺卜

被仰出候故、折廻り不合二付、樋相掛候義水取出来難仕候二付、

御下知奉伺候、

一、同壇上御指図朱引之通簀子御縁之下切込之処、別

絵図を以御伺申上候、

一、同東御階軒廊上り口見通之義、別紙図を以御伺申上候、

一、常御殿御ま七尺ま二付、御廊下取合之処、別絵図を以

御伺申上候、

一、紫宸殿棟包上方地迄八間壹尺八寸五分
軒先方地迄壹丈六尺六寸五分

右者元御殿間尺二而御座候、

一、左近陣座、東北廊地方棟瓦迄式丈式尺
北軒瓦方地迄壹丈式尺
南土庇軒瓦方地迄八尺五寸

一、土渡廊、小板敷、土廂地方棟瓦迄式丈式尺
軒瓦方地迄壹丈式尺

右高ク相成候瓦屋根之義二付、水取勾倍悪敷候付、出来

難仕候、板屋根二も被命付候ハ、左之通高ク相成申候、

地方棟廻上迄壹丈九尺、

右之外低メ方相考勘弁仕候へ者、此上低メ候義出来難仕、

御断申上候、

一、紫宸殿新御絵図軒高左之通程相成可申奉存候、

東西廂軒先方壇上下迄 壹丈八尺七寸、

階隱軒先方壇上下迄

壹丈七尺式寸、

「(3才)

廿六日、

一、左近陣座、東北廊、土庇

一、土渡廊、小板敷

右軒高サ式丈五尺程二相成候旨、先達テ申上候、

紫宸殿階隱シ軒下二端入候処、高サ相考可申上被仰

渡、奉承知候、紫宸殿軒側柱高サ四間壹尺三寸程二相

成申候、元御殿下者高ク相成御恰好之義如何難計

奉存候へ者、此段申上候、以上、

一、紫宸殿階隱隅を取、折廻り二相成候得ハ、隅之堅リ無御座

保方難出来旨申上候処、仕方御利害被為聞奉承知候、

左候へハ、木道具可成丈手輕仕、鉄物釣ニテ堅メ出来

仕候、併出来方恰好如何可有御座奉存候へ者、此段申上候、以上、

一、左近陣座、東北廊、土廂

一、土渡廊、小板敷

右棟高ク式丈式尺程二相成候旨申上候、

紫宸殿、階隱軒下ハ、端入候様高サ相考可申上旨

被仰渡、奉承知候、紫宸殿軒側柱高ク三間四尺

八寸程二相成申候、元御殿下ハ高ク相成御恰好之義如何

難計奉存候へ者、此段申上候、以上、

一、今日申上候書付之趣二而、此間御下ケ被成候妻飾之図

相違之義可有之哉、御尋被成候、妻飾相違之義無御座候、

一、紫宸殿破風打越別段廂付候様奉承知候二付、

流造之義申上候得者、今日申上候ハ、元御殿之通切妻破風

入母屋造り之積申上候、

十一月廿四日、

「(3ウ)

一、昨日岡嶋定右衛門へ壹寸計・式寸計之割并紫宸殿間

丈尺之義申渡候処、則左之通書付差出入、

一、棟高サ地形方棟廻上端迄六丈壹尺三寸

一、軒高サ地形方軒桁下端迄式丈三尺式寸

一、軒出端御柱中墨方東西北側三方

檜皮軒口迄壹丈四尺四寸

同南之方柱中墨方軒口壹丈七尺式寸

一、御床力高サ地形方拭板上端迄八尺九寸

一、四方御縁高ク地形方縁板上端迄七尺八寸

一、唐戸内法

一、唐戸口蹴放上端方間草下端迄六尺九寸五分

一、部戸口鴨居内法敷居上ハ方鴨居下端迄七尺五寸

一、内室化粧棟下端方御床力拭板上端迄三丈式尺壹寸

右之通、

廿五日、

一、岡嶋定右衛門江式寸計之割申付候処、出来二付、左之通差出入、

一、紫宸殿壇上四方大サ桁行三尺七寸九分四り

梁行式尺七寸壹分三厘

一、同壇上高サ壹尺八寸之積ニテ五分五厘

十二月五日、

一、紫宸殿并其外紙細工出来二付、左之通書付、

紫宸殿棟高サ地形方棟廻上端迄六丈壹尺三寸
軒高サ地形方軒桁下端迄式丈三尺式寸

軒出端御柱中墨方東西北側三方檜皮

同南ノ方柱中墨方軒口迄壹丈七尺式寸

御床力高サ地形方拭板上端迄八尺九寸

四方御縁高サ地形方縁板上端迄七尺八寸

「(4才)

唐戸内法

唐戸口蹴放上端方間草下端迄六尺九寸五分

部高鴨居内法敷い上端方鴨い下端迄七尺五寸

内室化粧棟下端方御床力拭板上端迄三丈式尺壹寸

大臣宿所棟高四丈式尺五寸
側柱式丈四尺
軒出七尺五寸

敷政門棟高壹丈八尺五寸
軒高壹丈五尺
軒出三尺五寸廊ノ方六尺五寸

床子座棟高式丈三尺五寸
側柱壹丈八尺五寸
軒出五尺五寸同柱方壹尺五寸

和徳門棟高壹丈八尺五寸
軒出四尺

官人座軒出四尺

左近陣座軒高式丈式尺

東北廊棟高右同

廻廊軒高右同

東軒廊棟高式丈
軒壹丈三尺五寸

五日、

一、日野殿・高丘殿・大原殿、勢多・土山・岡田・高嶋へ御面会ニテ

紫宸殿壹寸計紙細工建図御出被成、左之通御好

替有之候事、

一、四方九級之階段壹段ニテ壹寸宛巾縮メ可申事、

一、賢聖障子戸之処開戸可付事、

一、北之方東西ニテ階段之処折廻り三方縁板壹枚可減事、

一、南拾八級之階段六級計ぬれ候様可致事、

一、四方角階隱角木ヲ入妻折ニ可致事、

一、南御縁下束体ニテ往来相成候様縁框巾可縮事、

一、南御縁下束体ニテ往来相成候様縁框巾可縮事、

一、南御縁下束体ニテ往来相成候様縁框巾可縮事、

一、南御縁下束体ニテ往来相成候様縁框巾可縮事、

「(4ウ)

- 一、和徳門御弁方宜敷様大サ可伺事、
- 一、床子座・官人座棟真中建可申事、
- 一、東軒廊土庇之处妻飾暫扣可申事、少々思召入有之事、

廿三日、

- 一、紫宸殿・清涼殿其外以下紙細工出来二付差上、
- 西剋過、三卿、土山・岡田・松宮御面会ニテ、差上候紙細工御出し被成、御好之处直シ同様被命渡、当年月二相直シ、来春正月七日比ニ可上之旨被命、右二付左之御書付御渡し、

- 承明門柱下柱之間老丈式尺有、梓立之内可為老丈事、
- 承明門梓立可為角柱之事、
- 南殿御後戸柱可撤寄木事、
- 南殿階下・壇上之幅自廂柱至壇端老尺之事、
- 下侍南向東一間可為妻戸事、
- 神仙門廊東霽下去門柱三尺五寸許事、
- 無名門西回廊樋貫・無名門上壁之事、先相止可改懸事、
- 土渡廊屋上樋相止之可改懸事、
- 階上第一級与簀子可有差異之事、
- 東軒廊壇端可縮之事、
- 清涼殿南屋根今少可出張事、
- 為殿上前空柱江此霽也、

正月十五日、

- 一、紫宸殿南御階段十八級 高サ四寸壹分
中老尺
長三丈貳尺
- 同東西御階段九級 高六寸
中九寸
長老丈

「(5才)

- 東ノ方石段老級 高六寸
中老尺
長六尺六寸
- 西ノ方石段式級 高六寸
中老尺
長六尺六寸
- 一、清涼殿御階段三級 高六寸
中老尺
長老丈貳尺

石段 高六寸
長老丈貳尺

石橋 高六寸
中五尺
長四尺

- 一、承明門外段三級 高六寸
中老尺
長三丈九尺貳寸

内段式級 高六寸
中老尺
長三丈九尺貳寸

右者紙細工二付差上ル、

- 一、清・紫兩殿其外紙細工直シ出来共播磨を差上候、階隱雛形書付等、日野殿御面会ニテ、勢多・岡田・松宮・高嶋を差上、後剋不殘御出し被成、又々御好有之、早々相直シ候様被仰渡、直シ之处左之通書付、
- 一、承明門中間方立内法老丈、兩脇壁間老間半宛ニテ、兩脇御門明如何程、同廻廊片間無之割合候テ、老間ノ明キいか程、
- 一、南殿階隱角木真隅を出候間西流何程出候得者出来候哉并陣座差支無之候哉之事、
- 一、長橋南殿片階老段掛り候様仕直シ、尤切馬道を東へも取建候事、小階割合不当之事、
- 一、敷政門壇上之事、
- 一、清涼殿地上方簀子高サ、簀子を広縁迄、
- 一、南殿内廻り長押取付候事、但外方一段上ニテ積リ、

「(6才)

「(5ウ)

一、唐戸凶面之事、

一、同所南方側柱を軒出いか程、但南階三級ぬれ候積リ之事、右直シ出来之上、来十九日不残御参集候間、其節可

上候様、土山淡州被申聞、外二唐戸絵図壹枚可上事、

廿一日、

一、紫宸殿外側長押高サ、板敷を鴨居下迄六尺九寸計、

一、内側長押、外側長押を幅柱重ね鴨居下迄高サ七尺

五寸計、

但長押幅六寸計之積二御座候、

西正月

一、紫宸殿階隱屋根之義二付、何分真隅を隅木出候様

相考、勿論南軒之出、南階拾八級之内、拾三級軒内二

相成、五級軒外二相成候テ、軒出何程ト申儀可申上旨

被仰渡候二付、則右之趣、木子播磨江申渡候所、東

西庇軒之出候ハ、隅木真隅方出可申旨申之、敷

図二相認差出ス、寸尺如左、

南側柱真を屋根軒口迄壹丈九尺六寸余、但

拾三級迄、

御縁を屋根軒口迄壹丈三尺、

東側柱真を屋根軒口迄九尺九寸、

御縁を屋根軒口迄三尺〔卷文脱〕式寸余、

但北側、南側二同断、西側、東側二同断、

一、今日御建凶献之節、於御物置、日野殿・堤殿・大原殿・

裏松入道殿被仰渡并藤嶋但馬申聞候書留、

一、賢聖障子高サ八尺、中東西戸高サ六尺、

右戸之上明キ式尺、

障子羽目迄上下四分一替り押木式寸、

鴨居下端迄八尺三寸、

「一、下侍床方式尺四寸但此内」(○コノ行、抹消サル)

二月四日、

一、日野殿・堤殿、勢多大判事・高嶋監物御面会ニテ、紫宸

殿南北軒出之儀壹丈六尺ト申儀、御用掛り口向方申上候

儀二而も無之、最早此方を関東江御達之儀二候へ共、南北軒出

壹丈九尺二不相成候而ハ、旧風二も不叶、階隱之所角廻り兼

候二付、更ニ此度軒出壹丈九尺二相成候儀、御達シ有之候義

乍併右等之儀御達シ之節、番匠申候之由被仰遣候、左

様候節、先播磨儀二候間、差支之義ハ無之候哉、相糺可申

之由被命、依之播磨呼寄、右之趣申渡候処、明日迄御用

捨可被下之旨申聞、

一、賢聖障子中之戸并東西之戸之図、大原殿を御渡

被成、明日迄二凶面・仕様差上候様被仰渡、且書付御渡、左之通、

一、賢聖障子、高惣許八尺許、

一、中之戸明キ高サ六尺許、明広サ六尺六寸、但兩開キ、

一、同東西之戸明キ高サ六尺許、明広ク、人数壹人

分之地ヲ明キトス、縁ヘリトモニ開ク一凶、

フチヘリヲノコシ切ヌキヒラキ一凶、

以上、

二月六日、

一、紫宸殿高欄廻り高サ壹尺三寸致可申之旨并女官

階壁之方片階相止候様、裏松入道殿被命、

一、昨日之妻筋之図、岡嶋上野へ申渡、

一、御物置口三人共播磨父子其外共召連相廻ル、紫

「(6ウ)」

「(7才)」

宸殿軒出・階隱等之儀二付、色々御好有之、猶御物置直ニ為引候事、

一、敷図丈尺付ケ候事、

一、軒出壹丈六尺ニテ紙形差上候事、

一、壇之処朱塗分ケ之事、

一、樋寸法書差上候事、

一、階隱相止メ東西板庇付図壹枚差上事、

一、東西軒出之処板庇無之図壹枚差上事、

一、紙細工ニテ紫宸殿西庇拵棟付樋掛事、

右播磨へ申付出来之事、左之通書付差上、

一、紫宸殿御屋根紙小雛形之通階廻シ、軒之出

壹丈六尺ニ被仰付候得ハ、御階隱柱無之候而者

保之儀丈夫ニ御座候、

十月廿一日、

一、昨日階隱之義二付、紙ニテ折形拵見セ候処、漸々致合点、大

原殿へ土山方申上候処、御絵様御出シ被成、則上野へ見セ候処、此

義故申上候旨申聞、

右二付、紫宸殿軒高サ、東軒廊軒高サ并棟高サ、東北廊・

左近陣座軒高サ・棟高、凡書付出し候様被命候旨、土山申

聞、則上野へ申渡候処、只今其書付難出、紫宸殿地割

之者へ掛合之上可出候旨申渡、則紫宸殿妻筋内母屋

之儀不相分、妻建之処間違之様被存候二付、軒之出広ク候様

思召候、棟梁方ニ而ハ、縋破風之積ニ候得者、何分ニも是迄之長橋

廊取合破風之通可致、左近陣座棟へ階隱屋根乗候様ニ

得と致吟味候様、并土渡廊妻筋之処も致吟味候様被命

渡候旨、土山申聞、則上野へ申渡置、

東軒廊棟高サ壹丈七尺五寸
軒高サ壹丈壹尺五寸左近陣座棟高サ壹丈五尺

東北廊南軒高サ壹丈壹尺五寸
北軒高サ壹丈五尺縋軒先壇上迄壹丈七尺五寸

階隱軒先方壇上迄壹丈六尺

廿八日、

一、日野殿御面会、左近陣座・東北廊・土庇・土渡廊・小板敷、

右棟高サ式丈式尺々分御治定、但昨日御沙汰之由被仰渡、則

勢多・土山へ相達シ、書付相渡置、

十一月十八日、

一、承明門壇上高サ壹尺八寸、宜陽殿壇上高サ六寸、下侍無壇上、

一、承明門、日・月花門、廻廊、宜陽殿廻り、床子座、官人座

東北廊、左近陣座、東軒廊、敷政門、左青鎖門、宣仁門、

恭礼門、内衛門、和徳門等、

右瓦葺、

十二月五日、

一、長橋南廊、土渡廊、明義門、仙花門、無名門、右青鎖門、

神仙門、下侍・同土間等、

右檜皮葺、

一、豊岡殿御面会、左之通書付差上、

承明門、惣桁行柱真々五丈、中之間柱真々壹丈

式尺、但柱内法壹丈、凡柱壹尺積、

中脇間柱真々九尺五寸、但柱内法七尺五寸、

兩端間壹間半ニ式寸五分不足、但柱真々九尺五寸、

廻廊下拾五間三分、

右八まニ割合壹ま柱真々壹丈式尺四寸余宛、

右之通御座候、以上、

正月

播磨

「(8才)

二月一日、

一、承明門内法高サ、蹴放シ上端ヨリ鼠走下端迄、御鳳輦手昇仕候而凡壹丈四尺計、蹴放シ取放シ候而地上ヨリ壹丈四尺五寸計、

「(8ウ)

但鳥尾先ヨリ鼠走リ下端迄五寸余明キ申候、

一、承明門内法高サ、蹴放シ上端ヨリ鼠走リ下端迄、御鳳輦肩江上ケ候而高サ凡壹丈五尺五寸計、蹴放シ取放シ候而地上ヨリ壹丈六尺計、

但鳥尾先ヨリ鼠走リ下端迄五寸余明キ申候、

右書付式通、藤嶋但馬江相渡ス、後剋肩江上ケ候方

御治定、明日作事方無滞出来候哉并扉寸法并日・月

御門等御同様之旨書付差上候様申聞、則治平へ申渡ス、

一、土渡廊、小板敷、土間、明義門、仙華門、右青鎖門、無名門

三間五寸

七間式尺式寸五分

此坪式拾式坪六分、

土渡廊東明義門本柱・小柱間柱、西者無名門本柱・

小柱之間壁、内之方伏溝、石蓋有之、南之方明放シ、北側

南廊取合、東式夕間壁、壹卜間戸、

南廊東之方仙華門本柱・小柱之間夕壁、

西之方小板敷・右青鎖門、南北之方二長橋、有板式枚、

合巾五尺、

一、東北廊、左近陣座、恭礼門、内衛門、左青鎖門、

宣仁門

三間五寸

七間四尺五寸

此坪三拾五坪五分、

壇上何レも六寸之事、

東北廊東之方左青鎖門本柱・小柱之間壁、

西之方恭礼門本柱・小柱之間壁、南側五ま、東之

方小ま有、東方第一・第二・第三戸本柱・小柱有、第

四・第五壁、

北之方明放シ、壇上巾五尺、壇上東之方官人座、

西之方取合壁、西之方紫宸殿壇上江取合、

左近陣座

板敷、東之方八宣仁門壇上迄、宣仁門本柱・

小柱之間壁、南廂板敷柱外五尺、土庇巾五尺、東

之方板敷際御溝、石橋有、土庇、柱八角柱、西之方

東西壹間余、南北五尺折廻リ立葺有之、立葺

東角之柱を東之方柱迄明キ式尺、

一、東軒廊壹間三尺五寸
七間四尺五寸

此坪拾壹坪八分三厘、

壇上高六寸

四方二而柱数拾本、南北壇上出三尺宛、乾角柱

通り壇上外二空柱有之、

東之方柱外壇上二御川溝、石橋有、南北

壇上之外御川溝江空柱立、

一、敷政門廊壹間
三間五寸

此坪三坪八厘、

門廊東之方壇上六寸巾、

西之方流短ク、普通之門を短ク可造之事、

「(9ウ)

「(9ウ)

本柱・小柱之間壁、西之方壇上巾三尺、
一、官人座、床子座（壺間三尺五寸、
六間）

壇上高六寸、

東之方壺下間ニテ壁、東（西）之方同断、南側三

まニテ明放シ、壇上柱外巾三尺、北側式夕ま

ニテ壁、北壁外壇上巾三尺、

一、公卿座、次將座、宜陽殿廂、大臣宿所、

政官侍、議所共

四間半

拾貳間貳尺

此坪五拾五坪三分八厘、

壇上高何レも六寸、

公卿座

板敷、東側式夕まニ而壁、西側式夕まニ而両面折部、

南側壺下まニテ両面折部、北側壺まニテ壁、

次將座

板敷、東側八壺下まニテ壁、西側壺まニテ両面折部、

南側八式夕まニテ壁、北側三まニテ、東式夕ま両面折

部、西壺下ま唐戸、小柱有、

宜陽殿

壇上土間、東側五まニテ壁、西側明放シ、柱外

壇上巾五尺、南之方八日華門北廻廊、西側取

合ニ当ル、

大臣

東側四間明放土庇、西側四間壁、南北壺まニテ

壁、

納殿

東側式夕間遣戸、西側式夕間・南之間八壁、

北之方八戸、小柱有、

議所

東側壺下間唐戸、本柱・小柱之間壁、西側壺下ま

壁、南側式夕間ニテ両面折部、北式夕ま壁、

政官侍

壇上土間、東側明放シ、北側壺下間ニテ遣戸、

西側式夕間、北八戸、南八壁、南側壁、

一、承明門（三間五寸、
八間四尺）

此坪拾六坪五分壺厘、

三間也、壇上高壺尺八寸、方立柱内法壺丈、

御門左右壁折廻り、南北外柱之間壁、

南石壇三級、北八石段式級之外ニ御川溝、石橋有、

一、日華門（三間五寸、
三間四尺五寸）

此坪拾壺坪三分六厘、

壇上高六寸、御門柱南北壁、南北外柱東西壁、方立

内巾壺丈、壇上西下ニ御川溝、石橋有、

一、月華門（三間五寸、
三間四尺五寸）

此坪拾壺坪三分六厘、

日華門同断、

一、承明門東西脇、日華門・月華門南北脇共廻

廊

式間

長延八拾間壺尺

此坪百六拾坪三分壺厘、

（10ウ）

（10才）

壇上高六寸、真中通壁、承明門方東江四間目長梁

門有、本柱・小柱之間壁、北壇上下夕二御川溝、石橋有、

東側南方三ま目二左腋門有、本柱・小柱之間壁、西壇

上下夕二御川溝、石橋有之、内外共柱外壇上巾三尺、

承明門方西へ四ま目永安門有、本柱・小柱之間壁、壇上

北之下御川溝、石橋有之、

西側南方三ま目二右腋門有之、本柱・小柱之間壁、西
L (11才)

側八下侍南表へ側柱片蓋柱ニテ取合、

一、御輿宿梁行二行半
桁行三間半

此坪八坪七分五厘、

壇上六寸、東西三間宛、内ハメ外壁、北式間、内ハメ外壁、

南算唐戸兩開平軸、東西方立柱之脇、内ハメ外壁、

一、紫宸殿方御拝廊下へ取合御廊下

壹間半

拾八間式尺五寸

此坪式拾七坪五分八厘、

六間半之間拭板敷、東側四間之間高欄伏二壹間半遣戸、

式拾八間廊下出西側ハメ、南ハ紫宸殿北之簀子取合、

北ハ遣戸、二ま踏段有、北拾式間之間夕東側御拝廊下

取合方南へ七間、壹間メ内ハメ外カへ、夫方南壹間半ヤリ

戸二、小御所東側南之廊下取合、夫南四間半、五ま内ハメ

外壁、
西側拾三間中シキイ戸二、セウシ壹、下ハメ下カへ、紫宸殿

簀子方八間目下々道有、

九月十六日、

一、清・紫軒厚九寸定、

右之外、内侍所・常御殿、別段先達而方伺、御下知通二候哉、L (11ウ)

御有形御座候哉、其外相准候儀御座候哉、奉伺候、

右之通、棟梁岡嶋上野方御伺申上候二付、此段申上候、

廿七日、

一、土渡廊・小板敷棟高サ式丈五尺之積、

右清涼殿・南殿上屋根へ差支無之様、側柱之高サ相考

申上候様被仰渡、奉承知候、清涼殿側柱高サ四間式尺

程二相成候、元御殿卜八間数も縮り高サ相増候義二御座候

得者、御恰好之義如何難計奉存候へ共、此段申上候、

十月廿七日

岡嶋上野大掾

一、土渡廊・小板敷棟高サ式丈式尺之積り、

右清涼殿・南殿上屋根へ差支無之様、側柱之高サ

相考申上候様被仰渡、奉承知候、清涼殿側柱高サ

三間五尺六寸程二相成候、元御殿卜八間数も縮り高サ

相増候義御座候へ共、御恰好之義如何難計奉存候へ者、

此段申上候、以上、

十月廿七日

岡嶋上野大掾

一、日野殿へ、土山・松宮立合御面会、

清涼殿御屋根南流并土渡廊取合之処造様水取

紙細工を以御渡シ申上、則御好二付、右紙細工二如左折

紙二間数書付相添、土山方日野殿へ上ル、

土渡廊 棟高サ式丈式尺、

卅日、

一、日野殿、勢田(多)・高嶋兩人へ御面会二テ、

一昨廿八日二差上有之清涼殿并東北廊紙細工水

L (12才)

取之図被成御渡、土渡廊御屋根低キ分御差構

無之候間、清涼殿御屋根切組不申、土渡廊棟上へ

軒上り候様可致、左候へ者、紫宸殿取合之処ニテ通行

難成ト申儀ニ而ハ無之哉、委書付図面ニテ、今日中ニ致出

来、明早朝可申上之旨被命、右之段岡嶋上野へ申

渡候処、土渡廊屋根低ク候而者、長橋廊御通行

難相成旨申候二付、右之趣、勢多同道ニテ日野殿へ

申上候処、長橋廊ハいか様ニ低ク相成候ても不苦候間、

土渡廊屋根、清涼殿軒先大手上り候様可致之旨

被命候二付、則上野へ申渡候処、今日中難出来候旨申

聞候故、勢多へ相達、日野殿へ午剋迄ニ御断申上置、

棟梁へハ巳剋迄ト申渡、

一、紫宸殿、地方軒迄高サ并壇上高サ并階段九級

之処、壹段高サ四寸ツ、之積候哉、

十一月一日、

一、日野殿へ、土山・高嶋御面会ニテ、

昨日被仰付候清涼殿御屋根切組不仕、土渡廊棟上へ軒

先上り候様仕候へ者、清涼殿側柱三間五尺六寸程ニ相成

申候、且清涼殿側柱御有形之通ニ仕、土渡廊棟へ上候儀

者、御門内法高六尺積り故、出来難仕旨申上候処、左候ハ、

棟低メ、御門内法いか程ニ相成候哉御尋ニ付、左之通書付

差上、

式丈式尺之内五尺低メ、壹丈七尺ニ相成、

明義門・仙花門・右青鎖門・無名門、凡式尺計ニ相成

申候、

廿二日、

一、紫宸殿、東北廊、左近陣座、内衛門、恭礼・左青鎖門、

宣仁門、官人座、床子座、敷政門、敷政門廊、次將座、公卿座、

宜陽殿西庇、納殿、政官侍、東軒廊、大臣宿所、土庇、議所

等檜皮葺、和徳門ハ不相知、

一、明義門、仙花門、土渡廊――檜皮葺、其余上廊、

日・月花門、承明門等瓦葺之事、

一、階隠柱場所造改之事、

一、南殿樋式重樋ニテ、銅空柱立所之事、樋釣鉄物ニ相成候事、

一、表口ニテ清書削書改之儀、龜絵図ニ写候事、左之通、

南殿東西空柱 宜陽殿前東軒廊南北空柱

南殿北東西戸之事 陣座土庇東方空柱

階隠柱書付 南殿北東西戸柱削之事

――

――

南殿桜・橘之事

一、日野殿御面会ニテ左之通書付差上、

坪取之儀御尋ニ付申上候覺

一、廻廊御門々々取合傍軒破風ニ相成候処、坪取之

間数相除申候、尤取合片蓋柱有之候処ハ、坪数ニ

相加へ坪取仕候、

右之通、前々方坪取之任来リニ御座候、此段申上候、以上、

八月 岡嶋上野大掾

一、日野殿御面会ニテ左之通書付御渡被成、尤柱形等

図面致用意置候様被命候二付、六寸五分角ヲ丸

柱ニ而ハ甚見苦敷被存候旨申上候処、未御治定ハ無之

候間、何分ニモ図面致用意候様被命、

「(13才)

紫宸殿御柱 指渡壹尺八寸

清涼殿御柱 六寸五分四方

角柱之時、

但天井ハ無之事、

一、御奉行日野殿、勢多へ御面会ニテ左之通書付御渡、

且昨日差上候御絵図御築地少々相違之事、相改可

申之旨被仰渡候由申聞、

一、床子座南面壇上幅五尺之事、

一、南殿西面北小階前石階二級書加之事、

一一

一一

右二付、岡嶋上野掾方左之通御請書差上、

一、御絵図相直候个所七ヶ点、明日中書損相直候

様被仰出候旨奉承知候、明日中二相直、明後朝

差上可申候、右御請申上候、以上、

九月

岡嶋上野大掾

一、一昨日十九日於御物置御奉行方不殘裏松入道殿被仰

渡并非藏人藤嶋但馬方申聞候書留左之通、

一、陣座床力高壹尺壹寸計、但葛石共宜陽殿都テ

床力高サ壹尺五寸、右同断、

一、左近陣座北側東方第三ま目、崇明門取組之事、土

渡廊東方第三ま目北側、崇仁門取組之事、但崇明

門者東北廊の方へ開ク、尤崇明門・崇仁門図拝見

願事、

一、左近陣座壇上所違直之事、

一、大臣宿所土庇間違之事、

一、大臣宿所東土庇東側北第一之間南西折廻り壁付

之事、但納殿南北落之事、

一、陣座床力小口蹴込無之、框計之事、

一、紫宸殿長押并賢聖障子直シ事、追而御沙汰

有之事、

「一、清涼殿」(○コノ行、抹消サル)

二月二日、

一、豊岡殿、勢多・松宮へ御面会、

一、宜陽殿土廂但良方ニテカへ仕切、一ト間南へ寄、同西ノ方

壁付、薄墨塗ニテ朱墨ニ改、

一、紫宸殿北高廊下但當御役所扣へ通改、

右之分、関東御達ニ而相違ニ相成候間、八分計ニ而程村

壹枚ツ、ニ為引色分致し、明日差上候様被仰渡、

一、於御物置先達而差上有之候紙細工雛形御下札拝

見被仰付、御下ケ札之通、目録左之通、

一、宜陽殿西長押高七尺、

一、宜陽殿床壇上ヨリ長押上端迄一尺式寸、

一、宜陽殿西面柱之外側を壇上ノ端迄巾五尺、

一、宜陽殿東土庇遺戸ノ長押高サ七尺、

一、同土庇此四間各遺戸、

一、政官侍二間明放シ、但鴨居付其上壁、

一、東軒廊南北壇上巾柱外三尺、

一、東北廊北壇上巾柱外六尺、

一、床子座前壇上巾五尺、

一、壇上巾各柱外三尺、

一、左近陣座前葛石高サ六寸、其上二床高サ六寸、

但葛石宜陽殿壇上之高サト同断、

一、陣座北面ノカへ腰長押ナシ、

「(13ウ)

「(14才)

一、廻廊腰長押ナシ、三面トモ同断、

一、陣腋北東二間開放、鴨居アリ、上カヘ、

一、官人座三面高サ八尺許、腰板アリ、豎板ナリ、腰板ノ

上壁、尤腰板ト壁ノ間長押アリ、但外側カヘナリ、

一、床子座三面ノ壁ニ各腰長押アリ、高サ三尺五寸許、

此長押カヘヨリ出ル、下三寸五分許、

紫宸殿

一、母屋鴨居高サ下端迄八尺五寸、鴨居ノ上カヘ、

一、御膳宿長押高サ八尺五寸、但仕切板壁ノ上白土塗り、

鴨居上カヘ同断、

一、西庇長押高サ七尺五寸許、鴨居上カヘ、

一、母屋東長押高サ八尺五寸許、鴨居上カヘ、

一、東庇長押高サ八尺五寸許、鴨居上カヘ、

一、東階九級、每級中九寸、西同之

一、北庇東西簀子巾五尺、

一、敷政門・神仙門等唐戸ノ上鴨居迄八尺許、扉之

明キ壹丈、左右小カヘ、小柱アリ、唐居敷アリ、

一、明義門、仙華門、左青鎖門、右青鎖門、恭礼門、

内衛門、宣仁門、無名門、陣ノ北戸、南廊南戸、

各唐戸ノ上ノ鴨居迄高サ八尺許、扉ノアキ六尺、小柱・

小壁アリ、唐居敷アリ、

一、長楽・永安・左腋・右腋等ノ門、各戸ヒラノ上ノ鴨居迄

八尺許、唐居敷アリ、扉ノアキ一丈許、小柱・小壁アリ、（15才）

一、和徳門、唐居敷アリ、

（14ウ）

天明八年五月ヨリ丈尺坪取等往反拔書半紙、豎帳、御指図御用坪取間

尺丈尺之扣ト大略同物也、可併見奥ニアリ、

五月十五日、

一、大原殿御面会、

拾貳間四方 柱壹尺壹寸 拾四間八分

拾壹丈柱拾貳本 六丈五尺柱六本

右之通、丈并間仕訳候様被命、如左進達、

一、拾貳間四方、此丈八丈六寸、但六尺五寸間、

拾四間八分、此丈九丈六尺貳寸、

柱壹尺壹寸拾貳本分、此丈壹丈三尺貳寸、

柱壹丈、此間數拾八間九分五厘余、

柱四寸六本分、此丈六尺六寸、

六丈五尺、此間數拾壹間壹厘余、

拾貳間四方、此丈七丈八尺壹寸貳分、但六尺三寸間

拾四間八分、此丈九丈三尺貳寸四分、

九丈、此間數拾四間貳分八厘余、

七丈五尺、此間數拾壹間九分余、

十八日、

一、紫宸殿梁行拾貳間四分 桁行拾四間八分

東廂五間七分 壹間六分 西廂五間七分 壹間六分

東階隱貳間八分 壹間八分 貳个所、

此坪貳百四拾四坪七分貳厘、

右積差出候処、岡嶋上野掾へ申渡絵図面ヲ以積立

候処相違有之、如左壹通相達、尤階隱ハ難分ニ付、

（15ウ）

此書付之趣ヲ以書改、

一、紫宸殿梁行拾壹間三尺五寸
桁行拾三間五尺五寸

東廂壹間三尺五寸
五間二尺五寸 西、廂同斷、

東階隱二間五尺二寸式个所、
壹間五尺二寸式个所、西階隱同斷、
二个所、

此坪式百拾九本三分五厘、

右勢多へ相達、

「二、清涼殿梁行八間
桁行拾間半」(○コノ行、抹消サル)

一、殿上 一一一一一

一一一一一

東北廊、左近陣座、三間二尺六寸
七間五分土廂、壹間半
七間半

宣仁門、青鎖門、敷政門、三間二尺六寸
四間官人座、床子座、

壹間半
八間公卿座、次將座、宜陽殿庇、大臣宿所、政官侍、

議所、四間
拾三間半東軒廊、壹間七分
七間半日花門、三間四尺五寸五分
三間

月花門、同上、承明門、三間半
八間廻廊、二間
九十四間

此坪四百三拾八坪六分式厘、

廿三日、

一、紫宸殿梁行拾壹間三尺五寸
桁行拾三間五尺五寸

東廂壹間三尺五寸
五間式尺五寸 西廂同斷、

東階隱二間五尺二寸
壹間五尺二寸宛式个所、

西階隱右同斷、宛式个所、

東西出廂式間
五間四尺五寸五分 『東西階隱共一方宛柱印御座候、
壹方二無御座候。』

『東西出庇止此坪二相成、』

此坪百九拾六坪五分五厘、

簀子御縁長延五拾八間五尺幅六尺二而、

此坪五拾四坪七厘、

巾五尺二テ、此坪四拾五坪式分五厘、

一、明義門、仙花門、土渡廊、土間、小板敷三間五寸
七間半

此坪式拾三坪壹分、

一、東軒廊壹間三尺五寸
七間半

此坪拾壹坪五分五厘、

一、東北廊、左近陣座、三間五寸
七間半土廂壹間三尺五寸
七間半

此坪三拾四坪六分五厘、

一、敷政門廊壹間二尺壹寸
三間五寸 『宣仁門・青鎖門・東北廊・左近陣座
入口三テ屋根無之様相見へ申候、宣仁門・
敷政門計、別坪取仕候様、御繪図相見へ
申候。』

此坪四坪六厘、

一、官人座、床子座壹間三尺五寸
八間

此坪拾式坪三分式厘、

一、公卿座、次將座、宜陽殿庇、大臣宿所、政官侍、

議所四間
拾拾間壹尺

此坪四拾八坪六分、

一、日花門三間五寸
三間四尺五寸

此坪拾壹坪三分六厘、

一、月花門同斷、

此坪同斷、

一、承明門三間五寸
七間四尺五寸

此坪式拾三坪六分八厘、

一、廻廊梁行二間
桁行九拾二間

坪数合三百九拾八坪四分三厘、

一一一一

一一一一

廿三日、

一、官人座床子座壹間半
八間

一、宣仁門、青鎖門、敷政門三間式尺六寸
四間

「(16ウ)

「(17才)

一、東北廊、左近陣座三間二尺六寸七間半

一、土廂老間半七間半

一、東出廂之事

一、出廂之柱 『空柱書上候事、』

一、東軒廊老間七分七間半

一、日花門三間四尺五寸五分三間

一、日花門南壇上

一、壁長押アリ『塀二改』

一、脇戸之事 『柱事訳書付札、』

一、西北簀子階脇戸之事

一、承明門三間半八間

一、南殿西出庇事

一、切馬道長橋幅五尺

一一一

一一一

一、月花門壇上事

一、明義門、仙花門、土渡廊、土庇、小板敷三間式尺六寸七間式尺六寸

一、公卿座以下議所迄四間拾三間半

一、廻廊二間九十四間

右相糺候様申聞、則上野へ申渡、絵図相直しし上外増減

坪数之書付式通上、

六月三日、

一、八分計ニテ壹丈五尺割・壹丈割・六尺割・五尺割計引

寸法取之、来明日可差上旨申出、岡嶋へ申渡、八日ニ差上、

廿一日、

一、紫宸殿梁行拾壹間三尺五寸桁行拾三間五尺五寸

東西庇老間三尺五寸五間二尺五寸宛式个所、

東西階隱二間五尺二寸老間五尺二寸宛式个所、

此坪百九拾六坪五分五厘、

簀子御縁長延五拾八間五尺、

中六尺ニテ此坪五拾四坪七分、

廿六日、

一、長四間中壹尺此坪六分、

議所之内老間半老間半

此坪式坪式分五厘、

廻廊之内式間老間此坪三分、

七月十六日、

一、廻廊

承明門兩脇拾八間宛之所、拾八間半ツ、仕候、

日花門・月花門南拾八間宛之所、

拾八間式尺三寸七分余宛二仕候、

月花門北拾五間之所、拾四間半二仕候、

月花門北三間五尺、

月花門・日花門南北四間之所、

三間四尺五寸宛二仕置候、

右之通二而廻廊九拾式間二相成候、

承明門方立内法壹丈二相成候二付、廻廊九拾壹間二相成候事、

一、日花門・月花門南北四間、

一、公卿座・次將座・大臣宿所・宜陽殿庇・政官侍・議所等

南北拾式間式尺、

右之通、御絵図二相見へ申候、廻廊長延九拾二間之

右之通、御絵図二相見へ申候、廻廊長延九拾二間之

「(17ウ)

「(18才)

積り仕候得ハ、月花門北ノ方ニ而五間五尺ニ可相成処、
三間五尺程ニ相見候、廻廊間数減少之分ニ御座候哉、

十二日、

一、紫宸殿正面、承明門中之ま見通しニ割付候様、紫宸殿東左近陣座下取合之所明キ七尺程、西明義門取合之所明キ式尺程ニ相見へ申候、承明門両脇片間ニ取合可申哉、又者廻廊間数相増可申哉之事、

右前落ニ付記之、

十六日、

一、承明門方立柱内法いか程有之候哉、御鳳輦之通り候様相成候様、絵図ニ而可申上旨被仰出、勢多伝達、

一、廻廊壇上柱外溝筋雨落ニ相成候様被仰出、壇上柱外之中・犬走り巾被仰出候様仕度、併御流壺間之所へ軒先五尺余も出候而、御保子悪敷御座候得者如何之旨、棟梁申聞候ニ付、今一応伺可然旨、兩人へ達し置、

一、被仰出ニ付、勢多方伝達如左、

承明、日・月花門ハ方立内法壹丈、外ノ御門ハ柱内法壹丈、

紫宸殿・清涼殿御格子、内上ケ、

但格子外是迄之通り組格子、内ハ横計、公卿座南

方格子式々増、

公卿座・次将座・渡所格子、外上ケ、

但南面組格子、

長橋御指図之通仕立、

「(18ウ)

床子座前計壇上五尺、其余三尺積り、

御殿御門々々等妻筋、

右御手本之通彩色いつ比出来候哉、日限可申上旨ニ付、

其段上野掾へ申渡、

十七日、

一、承明門、日・月御門方立柱〔本〕柱へ引付、其余廻廊之御門ハ方立内壹丈ニ而、小脇壹尺五寸ツ、明キ候ニ付、小壁付候様「(19才)仕候哉、岡嶋申出、其段申達、

小壁拵煮塗御治定、

一、相殿廻廊并小図差上置候処、日花門並之壇上ニ仕候図ニ直し候様、尤軒出ニ付、御保ノ為ハ柱増之義ハ追而被仰出候積、

壇上三尺、溝石壹尺、溝中二尺、

日花門ハ壇上方溝迄式尺五寸、議所壇上方溝迄式尺、

廿四日、

一、廻廊下御築地曲之所、角卜角下ケヌキ合之所廻廊壺間北へ入候義如何、

廿六日、

定御修理方方如左書付出、

一、紫宸殿東御踏段新規釣庇取置仮建物三間式間

廿八日、

一、新御絵図之内左近陣座方壇上迄明キ三尺内石段壹尺、

一、西ノ土渡廊方壇上迄ノ明キ五尺内石壇二尺、但西へ被寄候ニ付、西式々まハ壹丈、東方三まハ割間之由、

一、承明門、日・月花門、先達而御図面ニ而廻廊取合御

片蓋柱有之候得共、此度片蓋柱被相止、廻廊屋根居之形、内々絵巻物ヲ以御談有之、

一、西廻廊北行当片蓋柱有之外間方広候二付、御

不審申上候処、思召有之候よし乍併不審掛

紙二而相伺候様被仰渡、

三日、

一、紫宸殿西段上る土渡廊迄五尺、土渡廊三間九尺二寸

五分、ま同西式々ま壹丈ツ、

『右之通宜候、』

一、廻廊西北之方壹丈八尺、

『同断、』

一、月花門・南北廻廊取合明五尺、

『同断、』

一、承明門東西廻廊壹ノ間九尺七寸五分ツ、

『同断、』

一、日花門柱真々壹丈壹尺、方立内明九尺、承明門同断、

兩脇壹間ツ、南方廻廊之明五尺、

『廻廊明キ宜候、方立内法ハ何れも壹丈二候間、割合可伺事、』

一、議所方日花門迄三丈、

『右之割御絵図通ニテ南北破風取建出来哉、相考絵図ニテ

可伺事、』

一、官人座方議所迄之間拾壹丈、

一、紫宸殿東壇上る左近陣座明三尺、

一、御築地喰違候処ト廻廊南ツラト毛抜合之処、廻廊

五尺計延相見へ申候、

『廻廊ハ此方方上り候、六分計宜候、延ちゞミ無之積リニ候間、

」(19ウ)

相糺可伺是非、毛抜合ニ相成積被仰渡、』

右、土山方表へ差上候処、朱書之通被仰出、

五日、

一、昨日廻廊毛抜合之義ニ付、御築地南北間数并廻廊

延ちゞミ之義、彼是日野殿へ御掛合之上、今日も御面

会、日野殿御了簡二而、如左間数小絵図并書付進達ス、

南門敷居方承明門真迄拾四間壹尺五寸、承明門真方

紫宸殿後迄四拾壹間三尺、紫宸殿後方対屋下

家迄百式拾三間五尺式寸五分、

一一

一一

一、御築地御有形内法間数

南北百六拾六間

右此度廻廊ト御築地ト毛抜合ニ相成候得者、先達而

六分計之割合トハ四尺七寸五分不足ニ相成申候二付、此段

申上候、

八月 岡嶋上野掾

右之通御治定之旨被仰出、土山伝達、

八日、

一、次将座・公卿座・宜陽殿庇前軒廊南北壇上三尺

之所、五尺ニ御治定、

右掛紙ニテ伺之事、

一、相殿柱三本増式々ま壹丈ツ、兩脇五尺ツ、掛紙ニテ

伺之事、

一、壇上巾五尺、但葛石一尺

左近陣座之所ニ而葛石五寸ニ相成可申事、

」(20ウ)

」(20才)

一、溝石橋中立二為引候事、

一、政官侍西ノ方之間、土間二候哉、板敷候哉、

『可為板敷事、』

廿四日、

一、宜陽殿、陣座、軒廊、床子座、日・月花門其外体用

可致所ハ、其趣ヲ以増減書付可差上、体用不致新

規之分ハ、其趣ヲ以別段坪取書付、明日可上旨被命、

廿六日、

一、廻廊御門々々取合傍軒破風二相成候処、坪取之間

数相除申候、尤取合片蓋柱有之候所ハ、坪数二相加り

坪取仕候、

右之通、前々方坪取之仕来り二御座候、此段申上候、以上、

八月 岡嶋上野掾

一、南階段巾巻尺宛二而、合拾八段巻丈八尺二可致事、

且左近桜・右近橘階段之下之段与見合、南殿東西御縁

之角之見合二書入可申、清涼殿東庭竹台書入

可申之旨、委ハ御絵図二而被仰渡、

一、左近桜・右近橘御場所并竹台之図差上候処、

桜・橘共御場所違ハ有之一一

一、日野殿御面会、如左書付上、勢多・土山へ相達、尤書付

御渡し、柱形等図面致用意置候様被命候二付、六寸

五分角、丸柱二而ハ甚見苦敷被存候旨申上候処、未御

治定ハ無之候旨、何分ニも図面仕置候様被仰渡、

紫宸殿御柱指渡巻尺八寸、

十六日、

一、床子座南面壇上巾五尺之事、

一、南殿西面北小階前石橋二級書加候事、

十月廿日、

一、清・紫両殿御門々々妻筋之内、紫宸殿階隱北ノ方

東面共水取悪敷候二付、致折屋根二、下二而仮粧屋根

仕、階隱柱ヲ北ノ壁際へ寄度旨、絵図二而上野申出、

勢多・土山へ掛合候処、一向不合点、先此義ハ跡へ廻し、妻

筋清書上ケ、追而可申旨申聞、其旨上野へ申聞候処、

地割仕候二付、此義伺不相濟候而者、清書難仕候旨申

聞、右二付色々申、漸々致合点、土山方上野殿へ申上候

処、一函御合点不參地割之義不申付候、何分ニも御絵

様内々御出し被成候間、是二而弥水取不相成哉、棟梁

相糺候様被命候旨、土山申聞、其段上野へ申渡、

一、昨日階隱之義二付、紙二而折形拵見候処、承知仕、大原殿へ

申上候処、御絵様御出し、則上野へ見七候処、此義故申

上候旨申聞、并階隱折屋根下仮粧屋根仕候旨申

上候処、吟味候処、仮粧屋根難仕旨申、右二付、紫宸殿

軒高サ、東軒廊軒高サ・棟高サ、東北廊・左近陣

座軒高サ・棟高サ、凡書付出し候様被命候旨、土山伝達、

上野へ申渡候処、只今書付難出、紫宸殿地割之者へ

掛合之上可出旨申渡、後剋紫宸殿妻筋内母屋

之義、不相成妻建候処、間違之様被存候二付、軒之出広ク

候様思召候、棟梁方二而者繩破風之積二存候、何分ニも

是迄之長橋廊取合破合之通可致、左近陣座

棟へ階隱屋根乘候様二得卜致吟味候様、并土渡廊

妻筋之処も致吟味候様被仰渡候旨、土山伝達、上野へ

申渡、

「(21才)

「(21ウ)

東軒廊棟高サ壹丈七尺五寸
軒高サ壹丈壹尺五寸

左近陣座 棟高サ貳丈五尺

東北廊南軒高サ壹丈壹尺五寸
北軒高サ壹丈五尺

縫軒先壇上迄 壹丈七尺五寸

階隱軒先壇上迄 壹丈六尺

廿二日、

一、紫宸殿階隱高サ壹丈六尺、外壇上高サ壹丈七尺二寸

之棟高サ二仕候得者、別紙朱書之通ニ相成候、右間尺二而

間口割方出来兼可申哉奉存候、依之別紙絵図割替

入御覽候、左候得者、妻流ニ而重サ壹丈五尺程ニ御座候

得者、階隱軒樋相掛リ申候、

一、東軒廊軒高サ壹尺五寸程下ケ、朱書之通り仕候得

者、軒樋相掛リ可申哉奉存候、右之通、東西共妻屋根ニ

相成候様仕度、此段申上候、

追而如左書付土山へ相渡、

廿四日、

一、紫宸殿階隱屋根、被仰出候趣ニ而者、保方無御座候、

東西軒出壹丈余之割ニ相成申候処、南面ハ軒出壹丈

六尺ト被仰出候故、折廻リ不合ニ付、樋相掛リ候義、水取

出来難仕候ニ付、御下知奉伺候、

一、同壇上御指図朱引之通簀子御縁下切込之処、別

絵図ヲ以御伺申上候、

一、同東御階軒廊上り口見通し之義、別絵図ヲ以御

伺申上候、

一、「常御殿御ま七尺まニ付、御廊下取合之所別絵図ヲ

以御伺申上候、」(○コノ二行、抹消サル)

「(22才)

一、紫宸殿棟包上方地迄八間壹尺八寸五分
軒先方地迄壹丈六尺六寸五分

一、軒廊棟包上方地迄二丈壹尺二寸
軒先方地迄九尺一寸

右者元御殿間尺ニ而御座候、

一、新御絵図紫宸殿・清涼殿高サ之義被仰付候

得者、屋根取申上候故、未何れ共相定不申候義ニ付、

御下知之上、相考可申上候、

一、左近陣座、東北廊

地方棟包迄二丈二尺、

北軒瓦方地迄壹丈二尺、

南土庇軒瓦方地迄八尺五寸、

一、土渡廊、小板敷、土庇

地方棟瓦迄二丈二尺、

軒瓦方地迄一丈二尺、

右高サニ相成候瓦屋根之義ニ付、水取高倍悪敷候

ニ付出来難仕候、板屋根ニ而も被仰付候ハ、左之通高サ

相成申候、

地方棟瓦上迄壹丈九尺、

右之外低メ方相考勘弁仕候へ者、此上低メ之義出来

難仕、御断申上候、

十月

右書付式通、雛形壹、絵図三枚、土山へ相渡、

一、紫宸殿新御絵図軒高左之通程ニ相成可申奉存候、

東西庇軒先方壇上下迄壹丈八尺七寸、

階隱軒先方壇上下迄壹丈七尺二寸、

一、紫宸殿側柱高サ三間ト申上候義御尋被成候、是八元

御殿之柱間數ニ而御座候、尤此度東西庇階隱軒高

「(22ウ)

申上候者、御指図梁行・桁行間敷之割方ヲ以申上候
義二御座候、此段申上候、

十月

- 一、左近陣座、東北廊、土庇
- 二、土渡廊、小板敷、土庇

右屋根棟、紫宸殿軒下へ端入不申候段申上奉
恐入候、右御屋根軒下へ端入候義、紫宸殿高サ之
義、猶相糺、明後朝申上候様可仕候、以上、

十月

岡嶋上野掾

廿五日、

- 一、左近陣座、東北廊、土庇
- 一、土渡廊、小板敷、土間庇

右屋根棟、紫宸殿軒下へ端入不申候段申上奉
恐入候、右二付、段々被仰渡候趣奉承知候、何分二も
右廊屋根、紫宸殿軒下階隠之屋根下へ端入候
様、紫宸殿軒高積り上、明廿六日午剋迄可申上、
尤定法不拘御保方如何可有御座哉奉存候へ者、
何分二も高サ可申上候、以上、

十月廿五日

岡嶋上野掾

廿六日、

- 一、左近陣座、東北廊、土庇
- 一、土渡廊、小板敷

右棟高サ式丈五尺程二相成候旨、先達申上候、
紫宸殿階隠軒下へ端入候様、高サ相考可申旨
被仰渡、奉承知候、

紫宸殿軒側柱高サ四間壹尺三寸程二相成申候、

「(23才)

元御殿与ハ高ク相成、御恰好之義如何難計奉存候
得者、此段申上候、以上、

十月廿六日

岡嶋上野掾

一、紫宸殿階隠隅ヲ以取折廻リ二相成候へハ、隅之堅リ
無御座候、保方難出来旨申上候処、仕形御利害被為聞
奉承知候、左候得ハ、木道具可成丈ケ手輕ク仕、鉄物
釣二而堅メ出来仕候、併出来方恰好如何可有御座候
哉奉存候へ者、此段申上候、以上、

十月廿六日

岡嶋上野掾

- 一、左近陣座、東北廊、土庇
- 一、土渡廊、小板敷

右棟高サ式丈式尺程二相成候旨申上候、紫宸殿階隠
軒下へ端入候処、高サ相考可申上旨被仰渡奉承
知候、紫宸殿軒側柱高サ三間四尺八寸程二相成申
候、元御殿下ハ高ク相成、御恰好之義如何難計奉
存候得者、此段申上候、以上、

十月廿六日

岡嶋上野掾

- 一、日野殿御面会、

左近陣座、東北廊、土廂
土渡廊、小板敷

右棟高サ式丈式尺之方御治定、尤昨日御沙汰之旨
被命、書付ハ此方を差上候伺書ニ御下知御書加へ御渡、
御入用も有之候ハ、御乞も可有之旨被命、則勢多・土山へ
相達書付渡置、

晦日、

一、紫宸殿地方軒迄高サ并壇上高サ階段九級之所

「(23ウ)

「(24才)

壹段高サ四寸宛之積り候哉、

十一月十八日、

一、承明門壇上高サ壹尺八寸、宜陽殿壇上高サ六寸、

下侍無壇上、

一、敷政門并神仙門棟高サ同様之事、

一、昨日但馬へ如左書付相達、

一、紫宸殿壇上廻廊并承明門并議所・左近陣座・

大臣宿所・次將座惣而右之通壇上高サ何程二候哉

之事、

廿日、

一、廻廊棟高サ壹丈五尺、側柱壹間五尺五寸、

廿三日、

一、石橋巾三尺、長四尺二而八御筵道構難相成、中四尺之事、

左候得八四角二相成候故、長五尺二可致事、

一、紫宸殿・東北廊・左近陣座・内衛門・恭礼門・左青

鎖門・宣仁門・官人座・床子座・敷政門廊・次將座・

公卿座・宜陽殿西廂・納殿・政官侍・東軒廊・大臣宿所・

土庇・議所等檜皮葺、和徳門ハ不相分、

┌ (24ウ)

一、豊岡殿、土山・松宮・高嶋御面会、

明義門、仙花門、土渡廊、南廊、無名門、右青鎖門、

下侍、神仙門廊、軒廊

右檜皮葺、

其余廻廊、日・月花門、承明門等

右瓦葺、

但但馬立会御達し、外但馬方如左申達、

一、階隠柱場所違改之事、

一、南殿樋二重樋二而銅空柱立所之事、

樋釣鉄物二相成候事、

廿四日、

一、昨日岡嶋定右衛門へ、壹寸計・貳寸計之割并紫宸殿

間丈尺之義申渡候処、則左之通書付出、

一、棟高サ地形方棟包上端迄六丈壹尺三寸、

一、軒高サ地形方軒桁下端迄貳丈三尺二寸、

一、軒出端御柱中墨方東西北側三方檜皮、軒口迄壹丈

四尺四寸、

同南方御柱中墨方折口迄壹丈七尺貳寸、

一、御床高サ地形方拭板上端迄八尺九寸、

一、四方御縁高地形方縁板上端迄七尺八寸、

一、唐戸内法

一、唐戸口蹴放上端方間草下端迄六尺九寸五分、

一、部戸口鴨居内法敷居上端方鴨居下端迄七尺

五寸、

一、内室仮粧棟下端方御床力拭板上端迄三丈貳尺壹寸、

右之通也、

岡嶋定右衛門方貳寸計割出来、如左差出、

一、南殿壇上四方大サ、桁行三尺七寸九分四厘、梁行

貳尺七寸壹分三厘、

一、同壇上高サ、壹尺八寸之積り二而五分五厘、

五日、

一、紫宸殿并其外紙細工出来二付、如左書付高丘殿・

豊岡殿へ、勢多・岡田・高嶋御面会進達、

紫宸殿

┌ (25才)

棟高地形を棟包迄六丈壹尺三寸、上端迄軒高地形を

軒桁下端迄三丈三寸二寸、軒出端御柱中墨を東西

北側三方檜皮軒口迄壹丈四尺四寸、同南方柱中墨を

軒口迄壹丈七尺三寸、

御床高地形を拭板上端迄八尺九寸、

御縁四方高地形を縁板上端迄七尺八寸、

唐戸内法

唐戸口蹴放上端を間草下端迄六尺九寸五分、

蔀戸口鴨居内法敷居上端を鴨居下端迄七尺

五寸、

内室仮粧棟下端を御床拭板上端迄三丈二尺一寸、

大臣宿所 棟高 四丈貳尺五寸

側柱 貳丈四尺

軒出 七尺五寸

敷政門 棟高 壹丈六尺

軒高 壹丈五尺

床子座 棟高 三丈

側柱 貳丈三尺五寸

軒出 六尺五寸

官人座 軒出 四尺

左近陣座 棟高 貳丈貳尺

東北廊 棟高 同上

廻廊 棟高 同上

東軒廊 棟高 二丈

軒 壹丈三尺五寸

右二付

(アキマ、)

ㄥ (25ウ)

一、承明門、日・月花門、廻廊、宜陽殿廻り床子座、官人座、

東北廊、左近陣座、東軒廊、敷政門、左青鎖門、宣

仁門、恭礼門、内衛門、和徳門等瓦葺、

一、長橋南廊・土渡廊・明義門・仙花門――等檜皮葺、

別二日野殿・高丘殿・大原殿、勢多・岡田・高嶋御面会二而、

紫宸殿壹寸計紙細工建図御出し被成、如左御好

替之旨被仰達、

一、四方九級之階段壹段二而、壹寸宛巾縮又可申事、

一、賢聖障子戸之所開戸可付事、

一、北ノ方東西二而階段之所折廻り三方縁板壹枚可

減事、

一、南拾八級之階段六級計ぬれ候様可致事、

一、四方角階隱角木ヲ入妻折二可致事、

一、南御縁下束帯二而往来相成候様、縁框巾可縮事、

一、和徳門御弁方宜様大サ可伺事、

一、床子座・官人座棟真中建可申事、

一、東軒廊土庇之处妻筋暫扣可申事、

少々思召人有之事、

廿三日、

一、承明門柱ト柱之間壹丈貳尺有、梓立之内可為壹丈事、

一、承明門梓立可為角柱之事、

一、南殿御後戸柱可拵寄木事、

一、南殿階下・壇上之中自庇柱至壇端壹尺之事、

一一

一一

一、階上第一級ト簀子可有差異之事、

ㄥ (26才)

一、東軒廊壇端可縮事、

一一

一一

右紙細工建図御出し二而、土山・岡田・松宮へ、日野殿・大

原殿・豊岡殿御面会、如左被命、外二口述二而、縁束
┌ (26ウ)

御柱毎二可入事、右正月七日比二献上之事、陣座二其

迄差置度旨申上候処、其段御許容有之、

廿六日、

一、日野殿御面会、承明門方立柱内法壹丈二仕候得ハ、

本柱内法二而壹丈貳尺二相成候得共、御扉口三个所二

いたし候故、片間二も難相成候故、両脇二而三尺ツ、縮候

旨申上、則入御覽候処、宜敷被被仰渡、

天明九年正月十五日、

一、清・紫其外共并階隱雛形等不残差上候二付、如左書付上、

紫宸殿南御階段拾八級 高四寸壹分

巾壹尺

長三丈二尺

同東西御階段九級

高六寸

巾九寸

東方石段壹級

長壹丈

高六寸

西方石段二級

巾壹尺

長六尺六寸

承明門外段三級

高六寸

巾壹尺

内式級

長三丈九尺二寸

高六寸

外二木子播磨書付如左、

一、日野殿、勢多・修理職三人御面会、不残建図御出し、又々

御好有之、早々相直し可差上旨被仰渡、个所如左、

一、承明門中間方立壹丈、

兩脇壁間壹間半宛二而、兩脇御門明キ如何程、同廻

廊片間無之割合二而、壹トまノ明キ如何程、

一、南御階隱角木真隅を出候而、南流何程出候得者出

来候哉并陣座差支無之哉之事、

一、長橋南殿片階へ壹段掛り候様仕直し、尤切馬道より

東へも取建候事、

一、小階割不当之事、

一、敷政門壇上之事、

一、南殿内廻り長押取付候事、但外方一段上二而之積り、

一、唐戸図面之事、

一、同所南方側柱を軒出如何程、但南階三級ぬれ候積之事、

右直し出来之上、来九日不残御参集候間、其節可上候

様被仰渡、土山伝達、

一、豊岡殿御面会、如左書付進達、

承明門惣桁柱真々五丈、

中之間柱真々壹丈貳尺、但柱内法壹丈凡柱壹尺

┌ (27才)

積り、

中脇間柱真々九尺五寸、但柱内法七尺五寸、

両端間柱間半二式寸五分不足、

但柱真々九尺五寸、

廻廊拾五間三步、

右廻廊八ま二割合壹ま柱真々壹丈貳尺四寸余ツ、

右之通御座候、
播磨

十九日、

一、陣座葛石共壹尺五寸計、

一、宜陽殿都而壹尺五寸、葛石とも、

『左近陣座北側東の第三ま目北側崇仁門取組之事、』

一、崇明門東北廊の方へ開ケ、

一、「崇明門、崇仁門」(○コノ行、抹消サル)

一、床子座腰長押之事、

『陣座床小口蹴込無之、榧計之事、』

一、紫宸殿長押并賢聖障子直之事、

追而御沙汰有之事、

『大臣宿所東土庇東側第一ま南面折廻り壁付之事、』

一、承明門内法高サ之事、東寺慶賀門之通二候得者宜候

間、明後廿一日見分二罷越候様被命、

但御鳳輦差支候二付、

廿一日、

一、去十九日被仰渡候東寺慶賀門高サ寸尺見改、今日

岡田行向、播磨召連、則寸尺如左、

一、承明門桁行八間四尺、此丈柱真々五丈六尺、

中之間・腰之間共柱真々壹丈貳尺ツ、

「(27ウ)

方立内法壹丈ツ、但柱太サ壹尺積り、

両端間柱真々壹丈、

柱内法九尺ツ、

播磨方出、

右高サ方立内法二順候ハ、高サ壹丈計、右高サ二而ハ

御鳳輦御差支可相成哉奉存候、御差支無御座高サ

二而ハ壹丈五・六尺ト奉存候、但右高サ二而も建方出来仕候

様奉存候、併御恰好如何ト奉存候、

右御門左右廻廊一方拾四間半四尺ツ、此丈九丈八尺貳寸

五分、

右平均八ま二割、壹ま二付柱真々壹丈貳尺二寸八分ツ、

慶賀門見分仕寸尺相改候処、方立内法壹丈二尺八寸、

高サ鼠走り下ろ蹴放下石居迄

壹丈九寸、但蹴放取放し、

一、紫宸殿外側長押高サ、板敷方鴨居下迄八尺九寸計、

内側長押、外側長押方幅柱重ね鴨居下迄高サ七尺

五寸計、

但長押巾六寸計之積二御座候、

一、紫宸殿階隱屋根之義二付、何分真隅方隅木出候様

相考、勿論南軒之出南階八級之内拾三級軒内二

相成、五級軒外二相成候而、軒之出何程ト申義可申上旨被

仰渡候二付、則右之趣木子播磨へ申渡候処、東西庇軒之

出候ハ、隅木真隅方出可申旨申之、敷図二相認差出

寸尺如左、

南側柱真方屋根軒口迄壹丈九尺六寸余、

「東側柱真方」(○コノ字、抹消サル) 但拾三級迄、

御縁方屋根軒口迄壹丈三尺、

「(28才)

「(28ウ)

東側柱真方屋根軒口迄九尺九寸、

御縁方屋根軒口迄壹丈三尺貳寸余、

但北側南側二同断、

西側東側二同断、

一、賢聖障子 高サ八尺

中東西戸 // 六尺

右之上明キ貳尺、

障子羽目込上下四分一替り押木二寸、鴨居下端迄八尺三寸、

一、納殿西側北ノ方唐戸付候事、

廿二日、

一、御鳳輦行事官立舎寸尺取、

御鳳輦 高サ鳥尾先方御輦下脚迄壹丈五寸、

右今朝行事官方明ケ渡候二付、寸尺相改候処、右之通二

御座候、

二月一日、

一、承明門内法高サ、蹴放上端方鼠走り下端迄、御鳳

輦手昇二仕候而凡壹丈四尺計、蹴放取放候而地上方

壹丈四尺五寸計、

但鳥尾先方鼠走り下端迄五寸余明キ申候、

一、承明門内法高サ、蹴放上端方鼠走り下端迄、御鳳輦

肩へ上ケ候而高サ壹丈五尺五寸計、蹴放取放し候而地

上方壹丈六尺計、但鳥尾先方鼠走り下端迄五寸余明キ申候、

後則肩へ上ケ候方御治定、明日作事方無滞出来候哉、

并扉寸法并日・月花門等御同様之旨書付差上候様申聞、

則其段木子治兵衛へ申渡、

二日、

「(29才)

一、承明門内法高サ、蹴放上端方鼠走り下端迄、御鳳輦

肩へ上ケ候而高サ凡壹丈四尺九寸計、蹴放取放候而

石居方高サ壹丈五尺五寸計、

但鳥尾先方鼠走り下端迄五寸余明キ申候、

右高サ二被仰付候而も作事方無滞出来可仕奉存候

得共、惣体御恰好之義ハ不宜奉存候、

扉式枚開二仕候得者、

横五尺三寸計、

竖壹丈五尺壹寸計、

日・月花門御同様二御座候、

一、日野殿御面会、承明門中明高サ二恰好宜様二為積

書付上候様被命、如左進達、

中之間恰好仕候得ハ、方立内法壹丈五尺計、脇之間七尺

五寸ツ、二相成候、右二而八中之間恰好宜相成候得共、脇之間

恰好如何二奉存候、

中之間 片横八尺計、

、竖壹丈五尺四寸計、

脇之間 横四尺、

竖同断、

右之通差上候処、方立内法壹丈二いたし、高サ御鳳輦

肩昇之積二而、紙二而雛形差上候様被命、則拵一応入御

覽、翌日勢多へ相渡、

片扉 横巾五尺二寸、

竖壹丈五尺壹寸、

一、豊岡殿、勢多・松宮御面会、

一、宜陽殿土廂 『但良方二而壁仕切卷下ま南へ寄、同西ノ方壁付薄墨塗ヲ
朱墨二改、』

「(29ウ)

一

一

一、紫宸殿北高廊下

右之分、関東へ御達し下相違ニ相成候間、八分計ニ而程村ニ
杵枚ツ、為引色分いたし、明日上候様被命、則四日ニ上ル、

四日、

一、日野殿、勢多・松宮御面会、

諸御門之図杵紙御出し、古形ニ候間、右之趣ニ而、

一、右之図杵枚『内法高サ八尺計、戸釣内法六尺計、唐厨敷有之』

一、敷政門・神仙門図杵枚『内法高サ八尺、戸釣内法杵丈、小壁外柱方柱内法式丈』

一、唐戸ニ小壁有之図杵枚

一、同所小壁無之図杵枚

右四枚為引差上候様被命、

一、賢聖障子中之戸并東西之戸之図大原殿方御渡、明日

迄二図面仕候様被命、且書付御渡如左、

一、賢聖障子、高惣体八尺計、

一、中之戸明キ高サ六尺計、明広サ六尺六寸、但し両開キ、

一、同東西戸明キ六尺計、明広サ人形杵人分之地ヲ明キ

トス、縁ヘリトモニ開ク、杵図、

フチヘリヲノコシ切ヌキ

開一図、

以上、

此内障子襲木 式寸計、

同縁 二寸計、

柱中墨方中墨ニ至リ杵丈程ノ縁リ杵丈、シカル時ハ杵丈

之内杵丈ヲ減ス、又柱寄式寸計、左右各合四寸、

如此時ハ賢聖障子中八寸六尺計、又此内襲木ヘリ等ヲ

除キ八尺式寸計、如此時ハ人形杵人分之地式尺五分ニナル中ノ

戸上襲木ヘリ等ヲ除キ可書、龜所杵尺六寸計、

但母屋長押高サ八尺五寸計、

上下羽目木上下合凡五寸計、

中戸図杵枚、東戸図杵枚、

右治兵衛へ申渡、

十日ニ堤殿御渡、賢聖障子、長サ八尺四寸計、『二寸ニ改』厚サ式寸計

五日、

一、於御物置紙細工仮雛形差上候寸法書、

階隱屋根端ト両軒口ト合候得者、又二尺余下リ、

右都合四尺余下リ候而も軒廊等屋根差支不申候へ者、階

隱屋根軒出延候ハ、保如何ニ御座候、

東西廂軒板屋根四尺付下し、軒廊等取合差支不

申候、然共軒樋底方ニテ下リ申候故、内ニ投板ヲ入トユ水

請仕候ハ、出来可仕候、

南軒之出外側柱方杵丈六尺、

『南流西ノ角、』

此軒口方階隱屋根迄六尺計ヨル、

『西流南ノ方、』

此屋根ヨリ階隱屋根下リ凡二尺余、

庇屋根入側ヨリ軒口迄杵丈六尺、

但軒口ト御縁鼻ト合、

一、紫宸殿外側長押高サ鴨居迄七尺五寸、内側鴨居

迄八尺五寸、右杵尺違ニ御座候、長押巾凡六寸計ト奉存候、

左候へ者、長押違候間、四寸計明キ候様奉存候、

」(30ウ)

六日、

一、紫宸殿高欄廻り高サ壹尺三寸二致し可申之旨

一、紫宸殿軒出階隱等之義色々御好有之、於御物置直二

一、紫宸殿軒出階隱等之義色々御好有之、於御物置直二

為引候事、

一、紫宸殿御屋根紙細工小雛形之通り隅廻し軒之出

壹丈六尺二被仰付候へハ、御階隱柱無之候而も保候義

丈夫二御座候、

十日、

一、日野殿御面会、如左書付被成御渡、有無可申上旨被命、

未定之分

一、宣仁門以下門ノ上ノ小壁ノ上ノ長押ノ上可為壁哉否之事、

一、宜陽殿西土庇上長押高下寸法并長押ノ上可為壁哉否之事、

『上長押壇上ノ長押下端迄壹丈二尺計、長押ノ上壁下奉存候、』(31才)

一、政官侍、陣腋、床子座、官人座、下侍、西軒廊

以上可有上長押歟、并其長押ノ高下寸法并長押之上

可為壁哉否之事、

『以上長押可有御座与奉存候、高サ凡右同断、』

一、三面廻廊可有上ノ長押歟、其高サ寸法并長押ノ上

壁有無之事、

『上ノ長押可有御座下奉存候、壇上ノ長押下端迄壹丈計、

長押ノ上壁下奉存候、』

一、軒廊、東北廊、西南廊

右可有上ノ長押歟、其高下寸法并其長押ノ上壁有之

事、

『右同断、』

右二付、朱書之通り木子治兵衛書付出、

十一日、

一、木子治兵衛如左書付出、豊岡殿へ御相談申上候処、朱書之

通被仰出、

賢聖障子下ノハメ木高サ之事、二寸ノ内、三分カキ

『自然御疊被入候節ハ疊二而寸法被減候事、』

同長押迄高サ八尺五寸二而ハ、先達而長押違寸法トハ鴨

居柱低ク候事、

惣体唐戸長押内法七尺九寸ト被仰出候得共、先達而紫

宸殿外側高サ鴨居内法七尺九寸、是二而ハ鴨居柱低ク候事、

『右之六分以來長押内法二御治定、』

唐戸口皆之柱壹尺一寸ト御座候、賢聖障子之柱ハ壹尺ト

御座候、

『壹尺壹寸二被改候事、』

一、表方如左書付御出、堤殿、

賢聖障子柱ノ中墨方柱ノ中墨ニ至リ壹丈、柱ノ徑リ

壹尺壹寸、然時ハ壹丈ノ内壹尺壹寸ヲ減、又柱寄式寸

計、左右合四寸計ヲ又減し、合壹尺五寸計ヲ減スレハ障

子之中八尺五寸計、

片戸障子巾八尺五寸、此内押木左右合四寸、縁左右合四寸

除、残七尺七寸ナル時ハ、人形老人分ノ地壹尺九寸式分五厘、

老間二四人ツ、之積、

右老人分ノ地二押木ヘリ等ヲ加テ片戸ノ巾トスル時ハ式尺

三寸式分五厘、

賢聖障子表裏トモ絹張、表賢聖像上二色紙形、裏唐花・尾長鳥ヘリ青地

唐錦表裏共、

』(31ウ)

フチ木黒漆壹枚、別ニ四角ニ金銅ノ脇金アリ、又脇金ノ
間ニ鋳九ツヲ打、同金銅ナリ、右金物打様如昆明池障子、
中戸両開キ、フチ木トモ北へ開ク、

東西片戸、東ノ戸ハ西ノ柱へ寄ル、番ヒアリ東、
西ノ戸ハ東ノ柱ニ寄、番ヒ在西、

各フチ木トモ北へ開ク、何モ掛金アリ、金銅、

十二日、

一、拾間半ヲ九ツ割老間トス、柱図径リ六寸五分、柱寄アリ、此
寸法、

右九ツニ割ハ柱真ヨリ真迄七尺五寸八分余、

但六尺五寸間、

柱六寸五分、柱寄セ見付壹寸、見込八分計、長押五寸、

長押下端ヲ鴨居上迄壹尺計、鴨居三寸掛才八分、

敷居二寸四分、

絹襖高サ六尺、壹枚巾三尺四寸六分計、

板敷上端ヲ長押下端迄七尺六寸、

一、壹丈之割柱真々壹丈二而、柱内法九尺三寸五分、

但柱太サ六寸五分計、

柱寄^{壹寸}_{八分}、御絹襖巾四尺六寸七分計、

十四日、

一、御柱太サ六寸五分之時、敷居中六寸五分、御襖縁八分、溝八分

半式筋、^{四分半}_{又五分}、兩方樋バ、た式寸壹分ツ、

御柱太サ六寸時、敷居中六寸、御襖縁八分、溝八分半ツ、

あ七四分半、樋バた壹寸九分余宛、

右日野殿へ差上候処、御焼失^(テキマ)、

一、賢聖障子獅々^子狛犬左右何れニ候哉、書付上候様大原殿

被命、東方口開キ、西ノ方角有之様覺居在候、併委書
留無御座候二付、書付難上旨申上置、

一、日野殿如左書付御渡、図面為引差上候様被命、

長樂・永安・左腋・右腋等之門

廻廊之間之通扉之体、日・月花門之通り、

和徳門代

寸法可申出事、^{方立}唐屋敷、^{小柱}小壁ナシ、

扉之体同上、貫木アリ、

右二付左之通、和徳門代扉之図為引寸法書差上、

冠木下端ヲ唐居敷迄高八尺、

十九日、

一、日野殿・大原殿御面会、如左図御渡し、下図拵相伺候上御治

定被仰渡、次第清書・御扣共二通差上可申、且御書付御渡

被成候也、

右青鎖門・左青鎖門 壹枚

和徳門図 壹枚 長樂・永安・左腋・右腋門之図 壹枚

日・月花門柱円径壹尺五寸之図 壹枚 崇明門壹丈

ま之門図 一枚――且御書付左之通、

承明門冠木之上小壁式尺計、

日・月花門冠木之上小壁壹尺五寸計、

紫宸殿

壹丈五尺ま格子図 寸法付、

壹丈ま格子図 寸法付、

五尺ま格子図 寸法付、

東階図 西階准之故略図、

西片階 東片階准之故略図、脇戸図

「(32ウ)

宜陽殿

小半部 上壹枚壹尺計ニシテ折ル、ワノ下二枚、二枚ノ内上ノ方ヒロク、下ノ方セバシ、

陣前小橋圖

承明門 柱田徑壹尺五寸、

日・月花門 同上、

崇明門 右圖寸法可書、柱ノ徑九寸、

和徳門 右圖寸法可書、

宣仁門・左青鎖門・内衙門・恭礼門等圖 柱徑九寸、

右何れも寸法可注事、

廿三日、

一、高丘殿方御柱壹尺五寸、角丸、

六寸五分、角丸、壹尺壹寸、丸、雛形上、

十月十五日、

一、絵圖方治兵衛如左御造營方承合有之旨申出、則

書付丹後ヲ以及掛合、

陣座南貫之事、

東軒廊下議所北長押同様高サ之事、

床子座腰長押出三寸柱方之事、

陣座添障子之事、

右伺候処存不申候ハ、其返答不申之旨、丹後申聞、

其段申渡、

十二月廿日、

一、土山方内衙門添障子圖壹枚相達し、写差上不申、

播磨へ申付、木形拵可上候旨被仰渡候、右添障子角

金物打、角金物之間へ鉾九本ツ、為打候様被仰渡之旨

申聞、表方如左書付被出、

「(33才)

押木ト有之ハ塗縁二候、

塗縁見付壹寸五分、見込壹寸、尤四方トモ同し、

豎五尺壹寸、横五尺七寸、トモニ塗縁ヲ合テノ寸法、

右寄障子寸尺之内ニ而、五分程挟木へ仕入レノツモリ、

尤ハメニ取ハツシ自由ナルツモリ、

廿二日、

一、左近陣座寄障子之義、丹後ヲ以掛合候処、木形明後朝

出来之積、其節方立式寸ニ而ハ狭木保子悪敷候ハ、

其段書付ヲ以可申上旨申聞、

寛政元_{己酉}年三月ヨリ

御造營伺帳

一、紫宸殿

軒高サ 式丈貳尺五寸

壇上 壹尺八寸加

式丈四尺壹寸

東軒廊・左近陣座棟高サ 式丈貳尺

右高サヲ以見合候得者、差支無御座候様奉存候、

右之通、木子播磨方書付取之候ニ付、此段申上候、

三月五日

一、縫破風御有形、元御殿・紫宸殿御拜屋根縫破風ニ而

御座候、則雛形書付差上候、

三月五日

一、御縁巾絵圖_{六尺拾四枚割、六尺六枚割、} 式枚、

一一一

右差上申候、

- 一、春日若宮神主祐定記書拔簾之儀相糺候処、望月徳助^ノ書付差出、則別紙差上申候、

三月七日

- 一、東軒廊・左近陣座高サ式丈式尺、尤地上ヨリ高サ二付壇上置土共右之内二御座候、紫宸殿高サ式丈四尺壹寸、此内式丈式尺引之残り式尺壹寸之処、樋掛廻し・水垂等凡出来可仕奉存候、

右之通、木子播磨^ノ書付取之候二付、此段申上候、

- 一、廻廊北端柱中墨^ノ宜陽殿南柱中墨迄

五尺計、

- 一、日・月花門南北廻廊柱中墨迄 五尺斗

- 一、承明門左右廻廊柱中墨迄 三尺八寸斗

- 一、惣廻廊柱ま南側同断

壹丈式尺式寸八分斗

但右者先達而柱ま割合被仰付候通八ま二割合申候

寸尺二御座候、

- 一、同東西側同断

壹丈三尺斗

右之通、木子播磨^ノ書付差出候二付、此段申上候、

- 一、紫宸殿軒出四方共壹丈六尺之雛形 壹

- 一、紫宸殿屋根軒之出四方共壹丈六尺宛

右之通二仕候得者、樋掛廻之義差支無御座候、

但南軒之出計長ク仕候而者樋掛廻シ出来不仕候、

「(34才)

一一一

- 一、紫宸殿屋根南流軒之出壹丈六尺、東西北軒之出壹丈二

仕候而者、南軒樋屋根無之候而ハ出来不仕候、勿論樋掛

廻シも不仕候二付、此義御断奉申上候、右二付、御雛形差上申候、

右之通、木子播磨^ノ書付取之、則別紙差上申候、

- 一、長榮 右殿門
永安 左殿門

下地書付

柱真々 壹丈式尺式寸八分

方立内法 壹丈四寸

扉巾 五尺五寸

冠木下端ヨリ唐居敷上端迄 八尺

直し書付

柱真々 壹丈三尺

方立内法 壹丈壹尺壹寸

扉巾 五尺八寸余

鼠走上端^ノ唐居敷上端迄 八尺

廻廊柱間 壹丈三尺

右割ま二被仰付柱間壹丈式尺式寸八分

右如元壹丈三尺

右書付木子播磨^ノ取之差上申候、

三月十五日

- 一、昨日差上候紫宸殿御屋根雛形壹間二付九ふ之割二相

当り申候、

但七拾歩一程之割二御座候、

右之通、別紙木子播磨差出候二付差上申候、

「(34ウ)

「(35才)

三月十六日

一、紫宸殿御屋根御雛形之通二而者、大材無御座候而者

出来難仕旨、御普請方御申立御座候趣奉承知候、

御屋根保方之儀銘々仕方存知寄可有御座候義二御座候

得者、是迄粗御有形之仕方を以御好通御雛形出来仕候

儀二御座候得共、於御普請方右大材無御座候而者不出来

之段於私申上方無御座候二付、此段御答奉申上候、以上、

三月廿一日

木子播磨大掾

一、紫宸殿

軒高サ板敷方軒桁上端迄 壹丈七尺五寸斗

同地上方軒桁上端迄 二丈六尺五寸斗

内室母屋桁高サ板敷方桁上端迄 二丈三尺斗

同地上方桁上端迄 三丈三尺斗

同棟高サ板敷方桁上端迄 三丈四尺斗

同地上方桁上端迄 四丈三尺斗

右者御普請方相廻り候升形絵図ヲ以相改候丈尺二御

座候、

元御殿

軒高サ板敷方桁上端迄 凡壹丈六尺五寸計

地上方桁上端迄 凡貳丈貳尺五寸計

母屋桁板敷方桁上端迄 凡貳丈三尺計

同地上方桁上端迄 凡貳丈九尺計

棟高サ板敷方桁上端迄 凡三丈壹尺計

同地上方桁上端迄 凡三丈七尺計

一、一昨日被仰出候紫宸殿東西縫破風被止、縫破風程之丈尺二而

日隠被立候儀、木子播磨相糺候処、不出来之旨二付、則御図

面二朱書付札二而申上候、

三月廿八日

一、武刃方相伺候御殿向床高低図二元御殿卜相違覚悟

罷在候分、凡図面二付札仕差上返上仕候、

四月四日

一、承門門石橋十分一之図

壹枚

一、紫宸殿階隠柱八寸八分之雛形

壹

右出来、差上申候、

四月五日

一、御殿向惣御建物床力高違元、

御殿之振合ヲ以木子播磨方付札為致差上申候一一

一、紫宸殿御屋根形二樋掛出来二付差上候、且釣方之義

書面計二而者難分候故、修理職より御普請方へ内々

承合候処、別紙絵図二枚差越候二付、相添差上申候、

四月廿四日

一、紫宸殿御格子寸法書御渡、重サ之義何程と申義木

子播磨へ申渡候処、右重サ之儀者彼是木品等積り合候

二付、急々難申上旨申聞、日数十日計茂御猶予被成下候

様仕度、左候而も重サ凡之義二御座候旨申聞候、依而此段

延引御断申上候、組子絵図壹枚四ツ折壹通返上仕候、

五月八日

一、昨日紫宸殿木形拜見仕候二付、木子播磨覚悟之儀

申上候、如左、

東西御階登り高欄上之取付、左右方高欄鼻出有之、

右内法明キ三尺五寸計有之、右左右之出無之、登り

「(35ウ)

「(36才)

高欄之上取付折廻り二仕候而如何二御座候事、

妻戸口平軸構二仕有之、右御好之通二重長押付

二而者無御座候事、

簀子之上切目長押八寸、同半長押四寸、合壹尺

貳寸、簀子ろ板敷迄上り申候、右御好通六寸之切目

長押二而者高サ相違仕候事、

外側部戸之所惣体敷い御座候、御好通敷居無之、

勿論元御殿も敷居無御座候事、

南面御縁下壇上巾広ク今壹尺計縮メ候而可

然哉奉存候事、

南面登り高欄通り束之間へ切束入候而可然奉存候事、

御雛形高欄高サ貳尺五寸計御座候、御好通ろハ壹尺

余高サ相違仕候事、

御床力下風窓、元御殿者見透シ無之様、内ろ板当テ

御座候事、

隅隠屋根迄之所、破風屋根下ろ相分り可然哉、奉

存候事、

掖戸笠木長押ろ余程下り御座候、御絵図二ハ長

押上迄ハ笠木上端同様二御座候事、

右之通、別紙書付差上申候、

五月十日

一、紫宸殿御唐戸図御治定二付、引改候様被仰出候処、掛

紙之通小壁三寸、小柱六寸五分二相成候得者御恰好并

塗立も宜候旨、木子播磨申出候二付、此段申上候、

五月十一日

御雛形

一、部戸之所、敷居・鴨居・方立有、

右上下横共四方之内法江釣有之、

元御殿敷居無之、鴨居も部戸ろ外二有之、長押下二

釣り勿論、方立戸之当り候処部戸ろ外二有之、方立

大サ貳寸四分計、

一、東西御縁北壁之所、簀子板上二よせ敷居二而も可有之

哉二奉存候、

右之通、別紙差上申候、

五月十四日

一、紫宸殿

簀子板 厚サ 壹寸

釘覆形 壹ツ

右板厚之儀、厚ク候而者釘下江通薄ク保チ不宜、大釘

打候得者割出板へ疵付候二付、壹寸二仕候事、

右武辺ろ相伺候通、簀子板壹寸二而危ク無之哉之

趣御尋奉承知候、壹寸二而危クハ御座有間敷候へ共、

御見付薄ク候而如何奉存候、今少々木口計二而も厚

候ハ、宜敷ト奉存候、

但御有来簀子板厚貳寸六分、

六月

一、御格子戸重目ヲ以何人掛二而上ケヲロシ相成候哉、相糺候

様被仰渡、承知仕、則相糺候処、日用之体之もの二御座候

得者、五・六人計相掛り、其余ハ人体二寄拾人ろ拾式・三人

計も掛り可申ト奉存候、勿論回禄已前之通御構等之

支之節取片付之御場所も無御座哉奉存候二付、此段申上置候、尤重目書付返上仕候、

六月十一日

- 一、紫宸殿簀子板釘覆形壹、修理職二而申付出来二付差上、并御普請方御取寄セ之釘覆形壹、是又返上仕候、

六月十二日

- 一、紫宸殿高欄高サ壹尺七寸之積繪図出来二付差上申候、

六月十三日

- 一、紫宸殿高欄高サ式尺式寸絵形写出来二付差上申候、

六月十七日

- 一、大部戸人数少候而手輕上候様仕候へ者、御殿内室二万力車壹つ釣り候而、苧繩二而引上候へ者、凡人数四・五人計二而上り候様ト奉存候、部戸重目三拾貳貫九百五拾匁計御座候へ共、上ノ方釣り御座候故、重目半分程相掛り候ト奉存候、

六月

木子播磨大掾

- 一、紫宸殿御柱向礎十分一木形出来并右二相添絵図面壹枚出来二付差上申候、尤御普請方相廻り候礎木形返上仕候、

六月廿日

- 一、紫宸殿礎木形

- 右御付札之通御達し二相成候二付、木子相糺候様被仰付相糺候処、御付札之通二而宜候旨申聞候、仍此段申上候、
- 一、承明門、日・月花門、廻廊等御普請方伺三拾分一

「(37ウ)」

木形丈尺寸取書寄帳面一冊、木子播磨方差出二付、則別帳差上申候、并左之通書付差出候二付、是又申上候、御門々横内法高サ共先達而御好通凡相当仕候様奉存候、但長樂・永安・左右腋、右四角所唐居敷無御座候、扉軸受付物二仕有之候、惣体御門冠木下壁無之、同所長押等相見へ不申候、

六月廿九日

- 一、宜陽殿廻り部戸内上ケニ御座候哉、外上ケニ御座候哉、『外上ケ也、』

同部戸上老尺計跡貳枚、都合三枚折ニ相成候哉、

『尤三枚折、其次広シ、其次ハ狭シ、角カラ黒戸之廊才部戸可作、』

宣仁門・左青鎖門可作、

宣仁門・左青鎖門・和徳門・敷政門等扉東表ニ御座候哉、

座候哉、

『宣仁門・左青鎖門東へ可開、

和徳門・敷政門西へ可開、』

閏六月三日

木子播磨掾

- 一、御普請方相廻り候月花門雛形北妻破風掛魚六葉之丸座・菊座・樽鉾共、何方ニ而取落候哉見へ不申候二付、有形之通木形拵取付仕、明日差上可申候、何分此段御断申上候、

『令承知則仕足可申付也、』

閏六月七日

- 一、承明門、日・月花妻方見付之図施分仕二枚出来二付差上申候、尤壇上之義、則図面二付札ニ而申上候、

閏六月十日

「(38才)」

一、月花門木形樽鎮繕直し出来仕候二付、今日返上仕候、
且妻筋之図是又返上仕候、

一、内衙門、左近陣座板敷上端を鼠走り下端マテ

七尺六寸計、但長押下端迄ハ
七尺八寸計

同方立内法六尺計、

右内衙門小柱内法・板敷を鴨居迄之内法寸法等

木子相糺申候処、右之通申出候、仍申上候、并立起図差上候、

十月廿七日

一、清涼殿・紫宸殿、御花之時ハ御殿卜庭上卜二御畳

三百拾帖余入申候、或者御幸之御時ハ四百六拾帖余入

申候、此外年中両御殿御構之節、右之御畳操合申候、

且又御修法之節ハ別ニ護摩畳卜申絹赤二重縁之

御畳三拾六帖入申候、

西十月

御畳方

一、紫宸殿御能之時ハ御入用御畳一

一

万燈御覽之時ハ御入用御畳一

一

西十月

御畳方

一、清・紫両殿御張紙之分、御畳数付札仕二枚共返上、

并右御畳数寄書、

紫宸殿南表西へ折廻御畳数

合百拾七帖、織高麗二重縁、

御同所方御廊下段迄御畳数

合六拾四帖半、右同断、

東庇御畳、拾六帖半、右同断、

「(39才)」

十一月七日

一、紫宸殿・清涼殿、

色紙形各有泥画

土佐土佐守

土佐左近将監

土佐虎若丸

一

右之通被仰渡候処、則請書差出候二付差上申候、

五月十七日

一、陣寄障子御下絵一卷
土佐左近将監

右養由装束之義二付、御付札之趣相糺、則掛紙仕、

入御覽奉伺候旨差出候二付、差上申候、

七月廿三日

『七廿四答、掛紙下絵之通御治定、』

御普請方ヨリ伺帳

一、承明門、日華門、月華門、廻廊

右惣体丹塗之御治定ニ御座候処、屋根仮粧裏板者

胡粉塗二仕、惣垂木木口之分黄土塗ニ可仕候哉之段

棟梁共相伺事、

右御付水原撰津守方伺候様差越候二付奉伺候、

三月 勢多大判事

土山淡路守

『伺之通、』

「(39ウ)」

一、廻廊貫入所伺絵図 壹枚

右御付水原撰津守方伺候様差越候ニ付奉伺候、

三月五日 勢多

土山

『図面

付札朱書之通被仰出、

但廻廊長押上小壁舟肘木之図壹枚被仰出、

尤此一紙雖非同之義統之事故被出之、

『図面之通被仰出候事、』

右三月十日付札出来ニ付、舟肘木之別図共式通被出扣ニ書

写、即日水原殿へ返遣又、

一、紫宸殿良内衛門際
乾明義門際御簀子巾壹尺

相減并樽幅之義ニ付伺絵図

右御付水原撰津守方伺候様差越候ニ付奉伺候、

三月六日 同人

『図面付札朱書之通被仰出、

但鉦釘数治定之上、今一応可申上事、』

一、紫宸殿・清涼殿、此度簀子鉦打ニ御座候、鉦壹本ニ而者

保方悪敷候ハ、式本打ニ仕、裏銚掛候而も不苦旨ニ御座候

得共、右之通仕立候得者、御縁裏見苦敷御座候ニ付、釣

銚ハ相止メ、鉦四本打ニ可仕候哉、又者、御縁裏天井張り可

申候哉、天井ニ仕候而も、右簀子ト天井之間四寸程明キ御座候

間、上より之見付ニハ敢而拘リ申間敷候間、此段相伺候事、」(40才)

三月

書面之趣相伺候事、

『伺之通鉦四本打也、裏天井有之間敷事、』

一、御殿々々板敷張縁一々相伺候覚悟ニ候哉、御用掛へ

可相尋様、水原撰津守へ可申達候事、

右之通御書付御渡、承知仕、則水原撰津守へ書付相

達し候、

四月二日

右即日水原撰州へ相達又、其後広橋殿撰津守へ

御面会之義有之、右板敷張縁御好之分、御書付被出候

様被申上、御承知之旨、撰州被申聞、

一、板敷

紫宸殿母屋四面
庇 南北張

宜陽殿 東西張

左近衛座 東西張

一一

右之通御書付御渡、承知仕、則水原撰津守へ書付相達又、

四月三日

一、紫宸殿格子雛形、此間相伺候者、組子明キ三寸八・九分

有之候間、此度者組子明キ三寸方ニ致し、組子巾壹寸

二・三分ニ致し、巾壹尺豎二尺斗ニ組立可伺候様、武辺へ

可申達事、

但裏之横サンモ右表之組子ノ明ニ准し可申事、

一、先達而伺有之候承明門、日・月華門、廻廊等

丹・胡粉・黄土塗塗分之仕様、屋根裏垂木万端

彩色候而可伺候事、

右両条武辺へ可申通、水原撰津守へ可申達事、

四月卅日

」(40ウ)

一、仮大部 壹枚横壹丈三尺九寸
高八尺

木地重目

凡式拾貳貫七百目、

両面隅鉄物・間夕鉄物生菱三鍔、同座共、

此重目

凡六貫八百貳拾目程、

漆塗・胡粉塗共、此重目

凡貳百八拾目程、

都合重目凡貳拾九貫八百目程、

右水原撰津守方書付差越候二付、別紙差上申候、

四月晦日

兩人

一、紫宸殿北御廊下南取合

一一

一一

右箇所之分、御有来之通唐破風出来之積、

『伺之通、』

一、紫宸殿

一一

一一

右之御場所壁之処、板壁上塗白土塗仕、其外之御建物之

分壁之所者下地壁白土塗ニ可仕候哉、委方板壁ニ仕候而者木からし(41才)

等も行届兼、追而割レ出候義も難計奉存候間、此段

及御掛合候事、

西五月

『五月十五日可為御有来之通、』

此儀於禁中竹難用ニ付壁下地竹依有差支、

右之通被仰出、』

一、内室仮粧屋根裏繁垂木

右者軒之桁方内惣体仮粧屋根裏造ニ仕候ヲ内

室卜唱申候、則此度紫宸殿内室造ニ御座候、御掛合

ニ付此段御達申候事、

西五月

一、御好大部 壹枚横壹丈三尺九寸
高八尺

但堅子厚サ壹寸、横子表厚サ七分、

裏厚サ壹寸、釣金四ツ宛之積、

木地重目

凡式拾四貫九百七拾目程、

両面隅鉄物・間夕鉄物生菱四鍔、同座共、此重目

凡七貫七百目程、

漆塗・胡粉塗共、此重目

凡式百八拾目程、

都合重目凡三拾貳貫九百五拾目程、

一、先達而入御覽候、仮大部 壹枚横壹丈三尺九寸
高八尺

木地重目 凡式拾貳貫七百目、

五月廿三日

一、紫宸殿一一

一一

右之御場所壁之処板壁ニ致し、上塗白土塗仕候、其

外八壁之処下地壁白土塗ニ可仕哉之段、先達而御掛合申候

処、御有来之通可仕旨、尤重立候所ハ竹難被用、右之通

御差図有之旨、御付札御座候二付、右之式个所之外、御涼

所・御黒戸・御湯殿・参内殿之壁之分ハ板壁上塗

┌ (41ウ)

白土壁仕、此外之御場所者、都而壁之所者下地壁白
土塗ニ可仕候哉、既ニ御有形ニも御拝廊下向其外御外
廻り并内玄闕より御勝手向壁之分不殘間渡竹
入下地壁ニ而御座候、殊ニ紫宸殿御床下犬防其外
所々御勝手向之御間并部屋々々等間渡竹入下地
壁之仕様ニ宝永度書留ニも相見へ申候間、旁書面
之通相成候様仕度、猶又御掛合申候事、

西五月

『伺之通、』

一、紫宸殿簀子板釘覆形

右板厚之義、厚ク候而者釘下之通薄ク保子不宜、大釘
打候得者割出板ニ疵付候ニ付、壹寸ニ仕候事、

六月三日

『十五日釘覆形被出付札之通、』

左之簀子板ニ付札朱書、

一、板厚サ伺之通一寸、但見付一枚御有来二寸六分候間、是ニ相准厚サ
今一応可伺事、

一、釘覆形追而可申達事、

一、メンノ幅可為壹分、』

一、禁裏御殿向御金物之儀、紫・清兩殿、廻廊等此度

鉄かな物之積、先達而御差図之趣相心得罷在候、其

外御間向之内ニも御差図有之候御場所も御座候へ共、

此度之御造営惣而御仕様木品等迄專御省略之御

旨被答在候儀ニ付、評議仕、常御殿・小御所其外重キ

御間向之義者、回祿已前之通仕、其外之御間向部屋々々

未々ニ至り而者、御好等も有御座間敷義、其上此度紫・

清兩殿共依旧儀鉄かな物之積被仰出候上者、未々之
御間減金かな物ニ而者、右之所も齟齬可仕候間、向々差
略仕并御屋根破風廻り共御かな物有之候御場所、是
迄減金之分一体雨当り強御座候間、減金ニ而者都而
鑄出申候間、漆箔ニ仕候得者、格別箔つや保子も宜、其
上御入用之所も減候方御座候ニ付、此度漆箔ニ仕可然奉
存、右等差略仕候趣を以、別紙絵図面へ付札仕相伺
申候、付札之趣ニ而御詳最御座候様仕度候、此段御伺
有之候様、別紙絵図面相添御達申候、以上、

西六月

一、紫宸殿御床拭板、葎之所者鋪居無之旨、左候得者拭

板者半長押卜平等ニ可仕候哉、御下ケ之絵図ニ而者唐
戸之所計半長押御座候間、葎之所者半長押無之、
切目長押卜拭板平等ニ仕候得者、唐戸口之所半長押

たけ高ク罷成申候、
『十五日、切目長押者拭板平等、』

一、母屋之間者四面共二長押下内法八尺五寸二仕、庇方母屋之
」(42ウ)

繫キ虹梁相止、内側之通長押化粧貫入壁ニ相成候得者、

庇長押卜成イ違ニ相成候、心得ニ罷在候、

『十五日、此儀追而可被仰出、』

六月廿二日、伺之通、』

一、南面簀子縁下壇上壹尺内へ入、葛石繰居候而道幅

広ク仕候様、御付札ニ御座候、右之通相成候而者、御柱石地形

堅ク不申、葛石同下之豎石共柱石へくりかき居候而ハ

保不宜候間、御木形通之壇上ニ而被差置候様仕度候、

『十五日、此義追而可被仰出、』

六月廿二日、於保方不宜者可為木形之通、』

一、四面共外側内法長押者賢聖御障子之所之長押

下端ヲ外側長押上端ニ仕候様御付札ニ御座候、左候へ者、

外側部之所并唐戸口共長押御木形方低ク罷成申候、

『十五日、伺之通、』

一、御高欄高サ式尺寸之割合ニ御座候処、高サ壹尺式寸ト

御付札ニ御座候、余り低罷成見苦敷可有御座候、木細ニ仕候而

者御柱壹尺壹寸、御軒垂木三寸四分ニ、四寸ニ而惣体大造

之御作り之所へ木細成高欄取付候而者、甚御恰好不宜

候間、式尺式寸之高サニ可被仰付候哉、

『十五日、高サ可為式尺式寸、凶被返下、』

一、御軒三重目飛縁垂木繁極ニ仕候様御付札ニ御座候、

三重目軒口木数多相掛り候而者、軒先荷重ニ罷成、

御保方も宜無御座候間、御木形之通ニ可被仰付候哉、

『十五日、木形付ケ札通可為繁垂木、』

一、南階ノ下鋪石ニ不及、但第一級之下計鋪石可有、此鋪石平

地迄平頭ニ可仕旨、御付札ニ御座候、一級之下敷石平地迄

平頭ニ而者、階一級之木平地江至候も同様ニ相成無間も

朽腐可有御座候、取替候ニも下毛之階ニ候間六ヶ敷、幾度も

取替候様相成候而者、不益之儀ニ御座候間、右之敷石平地方

少し上ケ候様可仕候哉、又者下毛一級石階ニ可仕候哉、

六月三日

『十五日、敷石平地方少し上候義不苦候、

但石口不可出、木階ノ木口ト敷石ノ石口トヒトシカルヘシ、

尚以図面可伺、』

一、紫宸殿簀子縁見付之耳板厚サ式寸之積り

御座候事、

右書付水原撰津守差越候ニ付、此段申上候、

『可為伺之通、』

一、承明門、日花門、月花門

軒高サ壹丈九尺四寸、但石口方軒桁上迄屋根高倍

壹尺ニ付平均六寸五分之割合ニ而、棟方軒口迄壹丈三尺

四寸余之高倍ニ相成申候、

一、廻廊軒高サ壹丈壹尺、但石口方軒桁上迄屋根高

倍壹尺ニ付平均六寸之割合ニ而、棟方軒口迄七尺式寸

高倍ニ相成申候、

六月廿九日

一、洪引光明丹御塗本 壹

一、光明丹御塗本 壹

一、胡粉御塗本 壹

承明門、日・月花門、廻廊等、丹塗手本為致候処、洪引

二而者色合悪敷、其上平之処ニ而者手本通二者出来可

仕候へ共、隅々木ニ至り候而ハ洪引届兼、色合むら出可申候、又

再篇洪引候へ者、兀等も出可申候間、旁洪引不申候方差而

手ニも付不申候間、洪不引方ニ被仰付可然奉存候、則塗

手本三枚掛御目申候、

閏六月三日

『伺之通洪不引方御治定、胡粉塗方是又伺之通、』

一、承明門壇上端石垣之図 壹枚

七月六日

『七十答、図面付札之通、』

右可上旨ニ付水原撰津守へ申達、差越候ニ付差上申候、

「(43才)

「(43ウ)

寶子釘頭覆三ツ爪鉄物 壹ツ

紫宸殿・清涼殿寶子釘頭覆三ツ爪鉄物仕本、先達而

御下ケ有之候、右仕本通二而者、拙者共茂至極御保も宜可有

御座与存罷在候、然ル処、御下ケ之仕本通り二而者、爪丈ケ穴

くつろぎ出来、都而御保方不宜候間、最初此方差出候

三爪鉄物二仕打立候節、爪へ塩ケ付取付候方御保宜旨棟

梁共申聞候、右之通、御保方職分之ものを申立候義二付、前

書之趣二取計可申候哉、猶又最初差出候三爪釘頭覆

鉄物差進、此段御掛合申候事、

七月

『八三、伺之通、』

一、紫宸殿付札上張絹地御絵、賢聖・蓬萊山・狛犬、大和松、極彩色之積、裏絹地二而御絵無之積、相心得罷在候、

此度表裏共絹張、

一一

一一

右者先達而伺置候処、未御差図無御座候、尤下ケ札不仕候分者

相分り候へ共、其外難相分个所猶又相伺申候、此節御沙汰

御座候様仕度奉存候、積り方二差支御出来方にも拘り候

義二御座候間、早々御差図御座候様仕度候事、

七月

一、紫宸殿大節之義、当五月上旬組子明キ三寸方二

致、組子幅壹寸二・三分二致、長式尺位組立差出候積

御差図二付、其節絵図面ヲ以相伺候処、猶又豎子・横子

寸法御好有之、右割合二而、釣金・坪金等取付候貫目

事付、其砌差出置申候、然処、豎子等寸法御好之通

仕候得者、豎子框面ヲ同様二相成、大節之義二而、豎子

框江仕付之所、漆塗目切出来可仕候間、框ハ厚サ式寸四分二

仕候得者、仮令漆塗目切等出来候共、目立子申聞敷

旨、棟梁共申聞候、右之通二相仕立可申哉、左候得者、小節

之義も大節之趣を以取計可申候、此段猶又御掛合申候

事、

八月十九日

『八月廿日答、可為伺之通、』

一、清・紫兩殿御疊用意如何致覚悟候哉之段、御達御

座候、然処、右兩殿之義者、先達而御下ケ之御差図二

拭板印二而、其上雛形二も御節有之候个所之者、敷居

可取旨、御付札有之、尤夜御殿者御間境敷居も有之候

得共、御絵図面拭板敷之色分之内有之、其外ハ絵図

面之通、敷居無之、拭板平等二有之候間、御疊止メ無之候

二付、御疊敷入ハ無之積相心得罷在候得者、若御疊可敷

入義御座候ハ、其个所々御差図御座候様仕度候、且御

簾掛渡之个所書付可差出旨、是又御達二付取調、則

絵図面朱引之个所々御簾掛渡之積相心得罷在候、則

別紙絵図面二枚相添、御掛合申候事、

十月

一、去十月十四日御普請方内御書付之内御疊之義

御達御書付如左、

一一一

一一

紫宸殿御間内惣御疊数

織高麗二重縁

合百九十七帖

「(44才)

「(44ウ)

外半帖二帖

十一月七日

一、清涼殿尋常御用

一一

一一

一

於紫宸殿者、御階花御覽、其外御修法并臨時色々御構之節、右御畳数必御入用候事、

一一

一一

右之通御書付御渡、落手承知仕候、水原撰津守へ相達可申候、

十一月十三日

兩人

一、公卿座・大臣宿所・左近陣座・東軒廊等并神仙門・

下侍其外共先達而御達有之候起繪図之通相心得、

尤仕形相分り兼候个所等、朱書付札之通相仕立候様

可仕候、則起繪図二通致返進候二付、此段御達申候事、

十一月

『十二朔答、

各可為付札之通、』

一、賢聖障子御繪様、御差図二北面花鳥と有之候廻り

御縁寸法其外共表之通二有之候哉、但縁者無之積

相心得可申候哉、且右御障子建合披キ等、睨と相分兼候

二付、別紙図面へ付札いたし、為念此段御掛合申事、

二月

『二ノ廿答、

別紙図面之通、』

一、賢聖障子回禄以前ハ一一

一一

一一

二月

一、賢聖障子・昆明池障子共御縁地、先達而唐錦之

御本相下り候処、其後御繪様御差図書之内、右御障子

之所二縁軟錦と有之候へ共、最早相下り候唐錦之積

相心得罷在候、

二月

『三六答、

軟錦・唐錦同物也、』

一、紫宸殿

一一

一一

一一

右个所々葎戸釣鉄物、別紙繪図面之形二相仕立候

積御座候、尤長短大サ之義者、个所々葎大サ准相仕立

申候、形之義為念御掛合申事、

三月

『三十八答、

繪図伺之通、』

一、承明門・廻廊并右へ付ケ候御門々共、惣体丹塗、尤闕・唐

唐居敷者白木之積、先達而御差図有之候、然処、闕・唐

居敷計白木二而者御見付キ宜かる間敷候間、右闕・唐

居敷共丹塗二相成可然哉二存候、

「(45才)

「(45ウ)

『廿三日答、』

闕・唐居鋪共丹塗二而者御差支有之候間、可為差凶之通、』

- 一、承明門、日・月花門、廻廊柱上毛下毛丸二付候様、先達而御差凶御座候、然処、承明門、日・月花門并長梁門・永安門・左掖門・右掖門共扉釣之柱者唐居敷取付候
- 二付、下之方ハ丸ミ付候而者御見付不宜、都而唐居敷取付候柱者下之方丸ミ付不申候旨、棟梁共申聞候間、右之趣二取計候心得二御座候、

三月廿二日

『廿三日答、』

可為伺之通、』

- 一、紫宸殿兩妻虹梁与前包之間臺股御彫物之義、御元形者東之妻松二鷹、西之妻柏松鷹之由、書留有之候へ共、此度者右臺股御彫物二も及申間敷哉二存候、此段御掛合申候事、

四月廿四日

『即日答、』

以別紙答凶壱通相達、凶可有返上、』

- 一、紫・清兩殿破風口之事、無彫物候、先達御治定、松平和泉守へ相達候、破風之凶写為念相達候、
- 右御書付御渡、落手承知仕候、即日水原撰津守へ相達申候、

四月廿四日

- 一、紫・清兩殿妻筋之凶面式枚御下被成候二付、一覽仕候処、右凶面之趣二而者、懸魚二御居紋者無之、右兩殿者、專旧儀二被復候御事之由御座候間、御差凶之趣二

取計可申儀者勿論之義二御座候処、妻筋等之義二

おみてハ御見付并其筋職方へ仕方茂可有御座事二付、棟梁共相糺候処、破風前之懸魚、猪目懸魚之分者御居紋取付候義、普通之義二而、其外御内廻り虹梁上之雲板二茂、是以御居紋付候義与相心得罷在候間、今般紫・清兩殿兩妻之懸魚并雲板江も菊之御居紋取付候旨、棟梁共申立候二付、拙者共致評議候処、旧儀ヲ以、夫々御好御差凶も有之候事故、御差凶之凶面二御居紋無之上者、御居紋為相省可申哉二奉存候得共、棟梁共其職法ヲ相守、手数も相懸ケ、夫々御居紋も取付、其所者最早出来も致候義二御座候間、強而旧儀之御差障二も不相成候事二候ハ、取付候御居紋者出来姿之通二而被相有候義者、相成

』(46ウ)

』(46才)

- 一、御殿向御屋根所々獅子口三ツ頭・足元共、別紙凶面之通可致旨、先達而伺相濟候、然処、於紫・清兩殿者御下妻筋之凶二有之候、獅子口之形二いたし候義二御座候哉、先達而伺濟之獅子口形与者致相違候二付、為念右伺濟之凶面并御達之凶面共、都合三枚差進申候間、否被仰聞候様致度候、

四月

『兩殿簀子鉦』(○外レタル朱書付箋アリ、意ヲ以テココニ掲ケ)

- 一、紫・清兩殿簀子縁鉦四本打之積、先達而伺相濟候処、折廻りとめ之所、鉦打方別紙凶面之通二而可然候哉、則凶面相添、此段及御掛合候事、

五月

『五月十二日答、

伺之通図被返下、』

一、東軒廊西妻長押上、先達而相下り候起絵図二者吹

抜之積御座候得共、左候而八本瓦葺之義二而御持保二も
相拘り候間、右長押上壁二相成可然旨、棟梁共申出候、

「一、西渡廊」(○コノ行、抹消サル)

『五月十九日答、

各伺之通、図返却、』

「一、賢聖障子、昆明池御障子、絹襖添障子等色紙形

色目・寸法・員数等追而御治定可被仰出旨御達有之、」

(○右ノ二行、抹消サル)

一、紫宸殿御翠簾掛ヶ候个所之義、先達而職分之者相

糺候処、図面を以伺相濟候、然処、東西南北御庇御部内

上ヶ之義二御座候間、御翠簾之義者、御庇廻り唐戸口之

外者、外掛ヶ之積相心得可申候哉、是又図面差進、猶又

御掛合申候事、

六月

『六五答、伺之通被差越候図相改返却、別以書付相達候、』

一、紫宸殿翠簾懸様

廂四面共外掛、

妻戸何モ内掛、

一一

一一

一一

右御書付式通御渡シ、落手承知仕候、水原撰津守へ

相達申候、

六月五日

一、折部外拳

公卿座、議所、次將座

右之个所格子内揚二図シ相達候歟、無覺東候、外揚二候
間、今一応為念達候、

一一

一

右水原撰津守へ可達、

六月十七日

一、紫宸殿北御縁東西妻戸高サ之義、先達而御下ヶ

有之候、絵図面通二而者、長押上端と笠木上端と同様二

相成候、其上北御廊下取付之所、軒桁・肘木・長押・同釘

隠等二差支、妻戸高八尺七寸二者難出来候間、七尺五寸二

可仕候、尤西開二致候而者、北御廊下通り御差支二相成可

申候間、東御階之方へ開キ、登り高欄へ開キ留取付候様

可仕候、西上り口妻戸も右同様七尺五寸二仕可然候、一休

紫宸殿御部口長押下高七尺八寸二御座候得者、妻

戸高七尺五寸二相成候方、御恰好も宜可有御座哉卜存候、

則図面相添、此段御掛合申候事、

六月

『六廿三答、伺之通、』

一、清涼殿東側方紫宸殿廻廊廻り溝筋之両側

葛石上之幅壹尺之積、最初御差図も有之候二付、右之

通取計可申義者勿論之義二御座候、然処、右溝筋者

間長二而夥敷石数二有之、石幅揃兼申候、其上此節二

「(47ウ)

至候而者、石切出之場所も奥深二相成、切出も不容易、
彼是手間取候二付、致評議候処、葛石幅狭相成候而も
持保・水流行等二相拘り候義者無之候間、右葛石上
幅六寸之積相仕立候様致度候、左候得者、御場所
御撰取二も相成候付、旁此段御掛合申候事、

六月

『七五答、』

右無抛子細候間被相宥、各伺之通、可為六寸、但東軒廊与

左近陣座之間溝公卿座ノ前ナリ、東方葛石ハ差支有之間、如最初
」(48才)

可為老尺、依之溝幅ハ此所計一尺六寸二相成候、』

一、紫宸殿北御縁良之高廊下東方高欄西之方板

羽目御治定、先達而申達候通二付、但西之方板羽目二

上連子可有之、更御沙汰有之候、上連子図相達候、尚又

寸尺等之義以図面可有伺事、

右御書付并絵図壹枚御渡、落手承知仕候、水原撰

津守へ相達可申候、

六月廿九日

土山

一、紫・清兩殿高欄鉄物打方之図相達候、此図者以旧図

書付候、猶當時欄干二打立候図并寸尺等書付候图中

有伺候、尤此図可有返上事、

七月十九日

一、紫・清兩殿高欄鉄物打方之図御達相成、尤當時

欄干二打立候図并寸尺等書付候図相伺候之様、御

達有之候、然処、右鉄物打方之義、御下図面通二而者、

御持保不宜、其上宝永度之趣ヲ以兩殿高欄鉄物

打方之義者、別紙図面之通打立候積仕組申候

義二付、此節模様相替候而者、彼是手後二罷成候間、
旁御達し申候図面之通打立候様致度候、尤鉄物寸
法等付札いたし差進申候、且此間御達之図面致返
却、此段御懸合申候事、

七月

一、於紫宸殿前庭可有地鎮、尤一个日之義候、陰陽寮

勤仕候、先内々為心得相達置候事、

七月廿四日

一、紫宸殿御唐戸、先達而御下ケ図面之趣二而者惣

体蝶番鉄物式枚釣二有之候、然処、式枚釣二而者御

保不宜候二付、蝶番三枚釣二致可然旨、棟梁共申出候、

御持保相拘候義二付、右之通取計候様可致候哉、

則御下ケ図面へ掛絵図いたし差進、為念此段

御懸合申候、

七月

『八五答、伺之通図被返下、』

一、紫宸殿御庭御用二可相成橘之義、献納人有之候間、

見分もの差進、相糺候上、木根之義別紙絵図面

いたし差進候間、御調之上、右之内御取極被仰聞候

様致度、此段及御掛合候事、

八月

橘木振絵図帳壹冊添、

『八五答、』

第一番宜候、併被植候時義等追而可申達候、此樹先

可有用意、桜之樹も有之候ハ、勝手二可有伺候、十二

番之内第一番二被御治定候、帳面返却候、』

」(48ウ)

一、紫・清兩殿高欄御金物、此間御指図之通取計候

義者勿論之義ニ御座候、然処、高欄鼻先之処刀鉄物

無之候而者、鼻先相保不申候旨、棟梁共申出候間、御

持保ニ相拘り候義ニ付、右鉄物取付候積御座候、則

別紙図面指進、此段御掛合申候事、

『八五答、伺之通、』

一、紫宸殿南庭へ被植候橘植付時之義、追而御達

可被成旨、先達而被仰聞候、然処、此節時節も宜候間、

植付候様取計可申哉、左候ハ、橘取寄候上、追而植付

日限之義、御達可申候否被仰聞候様致度、此段御掛合

申候事、

八月

『九二答、桜・橘共植付之義、同時ニ可相伺候、仍不及沙汰候、』

一、紫宸殿御庭御用ニ可相成桜之義、見分之もの差

遣し相糺候上、木振之義、別紙図面いたし差進候間、

御伺之上、右之内御取極被仰聞候様致度、此段及御掛

合候事、

九月

書面掛合之趣、別紙桜木振絵図帳相添相伺候事、

一一

一一

『九十四答、御入用依無之返却候、』

一、御階桜当時御敷地ニ有之候桜被用候、尤木振

図面之通ニ候、且被植候日限、前広ニ可相伺事、

右之通、御造営方へ可申達、水原撰津守へ可達事、

一、紫宸殿・清涼殿母舎与庇之間壁代掛候釘図、

追而可相達候、

一一一

一一一

九月十四日

一、紫・清兩殿色紙形之図一一一

一一

一、紫宸殿南庭へ被植候橘植付時之義、先達而御

掛合申候処、桜・橘共植付之義、同時可相伺旨、御達有之

候、然ル処、桜之義者御鋪地ニ有之候桜可被用旨、御達

有之候ニ付、来廿二日桜・橘共、同時ニ植付候様取計可

申哉、左候ハ、当日辰剋立会之者御差出被成候様致度

候、尤右桜植替前日根廻致置候積候間、御文庫番

人へ御申渡有之候様致度、此段御掛合申候事、

九月十八日

『九廿答、日限追而自是可有御沙汰事、』

一、部突揚棒、番所已下刀掛

右二条之内、刀掛之義者、宝永之度も御造営方ニ

而者不致出来候間、此度も御造営方ニ而者不致出来

心得ニ御座候、勿論、部突揚棒之義者、御造営

方ニ而出来之積取計可申候事、

右之通、御普請方方返答申越候ニ付可申上旨、水原

撰津守方差越候ニ付、此段申上候、

九月廿日

一、御階桜・橘植付候日限来月七日巳剋御治定候、

右植付前日根廻し可有沙汰候、尤奉行清閑寺頭弁

被仰出候、右植付之節立会人体名前治定之上、

「(49ウ)

「(50才)

尚又可申達候事、

九月廿五日

一、来七日御階桜・橘被植候二付、参向官人交名別紙兩通相達候事、

十月四日

被植南殿桜 左近衛府 将監 渡辺甲斐守 供園

将曹 三上駿河守 秦常斐

府生 鳥山左府生 源吉文

番長代 調子左府生 下毛野武里

被植南殿橘 右近衛府 将監 平田出納 職厚

将曹 水口右将曹 身人部長清

府生 水口右府生 身人部清起

番長代 土山右府生 秦武維

右御書付御渡、落手承知仕、水原撰津守へ相達申候、

十月四日

一、来七日南殿御階桜・橘被植節参勤、

清閑寺頭弁

新藏人

山科但馬守

別紙之通、御造営方へ可達、水原撰津守へ可達候事、

十月五日

一、紫宸殿南庭へ被植候御階桜・橘植付日限、来ル

七日巳剋御治定二付、明六日桜根廻し致させ候之間、此段

御達申候事、

十月五日

書面掛合候趣、相伺候事、

『即日答、承知候、』

一、紫宸殿・清涼殿色紙形之図一一一

一一一

一、紫・清兩殿御入り个所名目付図面式枚

右水原撰津守右差上候様差越候二付、差上申候、

十月八日

一、紫宸殿・清涼殿色紙色目一一一

一一一

十月

一、紫宸殿・清涼殿母舎与廂之間、懸壁代耳金打

方之図、先達而御達有之候二付、打方之義ハ御差図之

通取計可申候へ共、右耳金打候个所之義ハ、別紙図面朱

引之場所へ打方為致可申候哉、為念図面式枚差進、

此段御掛合申候事、

十月

『十月廿三日答、伺之通、図返却、』

一、被復旧儀所々

内侍所壇 承明門 廻廊 長樂門

永安門 左右掖門 敷政門 左右青鑲門

崇明門 恭礼門 内衙門 仙華門

明義門 和徳門代 南殿壇 四面樋空柱

南東北廊 陣座寄障子 官人座

宜陽殿大臣宿所 次将座 議所

納殿 露台代 一一一

一一一

一一一

」(51才)

造形被復旧儀所々

南殿丈尺并屋形階隅廂 格子内揚

賢聖障子 桜・橘植立丈尺 日・月華門

軒廊 宜陽殿公卿座 陣座

床子座 長橋 無名門 神仙門

一一

右折紙三通御渡、落手仕、則水原掾津守へ相達申候、

十月廿六日

御造営承知帳

一、南殿御屋根葺合隅二而段を付候而形可伺事、

雛形軒出丈尺付被出、

尤隅之処垂木包候積り之事、

但隅木ハ不及包事、

右之通被仰渡承知仕候、明日差上可申候、以上、

三月二日

一、紫宸殿

軒高サ式丈式尺三寸、外二壇上壹尺八寸加へ、惣軒

高地方式丈四尺壹寸二相成申候、

此軒口へ陣座、東軒廊、等之棟入候哉否之事、

右之通被仰渡承知仕候、木子播磨へ相糺、明日可申上候、

三月四日

一、縫破風是迄之紫宸殿二有之候哉、縫破風与者、如何

「(51ウ)

之処ヲ申候哉之事、

右之通被仰渡承知仕候、相糺可申候、

三月五日

一、南殿簀子幅六尺之所江明キ三分引十四枚板ならへ候得者、板幅何寸二相成候哉、以雛形可申上事、

但六枚之板巾も書付可上事、

外二小絵図 壹枚

右之通被仰渡承知仕候、

三月七日

一、廻廊・宜陽殿南作合間数柱中墨より

中墨迄何尺、

日・月華門南北柱間何寸、承明門左右同断、

惣廻廊柱間同断、下侍南柱間何尺何寸と申儀

書付可上候事、

右之通被仰渡承知仕候、猶相糺可申上候、

三月七日

一、紫宸殿軒口ト左近陣座東軒廊棟入候哉否之事、

先達而相糺候処、差支無之旨ニ候得共、樋之下ノ置土

等も有之事故、右を除候而も差支無之哉否之事、

三月七日

右之通被仰渡承知仕候、相糺可申候、

一、紫宸殿御屋根軒出南之通ニ東西北同様ニ出、軒廊

入候而樋掛り候哉之事、

右之通被仰渡承知仕候、

三月七日

一、紫宸殿御屋根欄ニいたし、南面軒之出壹丈六尺、東西

「(52才)

北軒之出、淮南面候間、同様ニいたし、角庇付候、雛形可上事、

但南北桁階隱之上之柱ニ不続様可致事、

東西桁計ニ而舟肘木可入事、

尤雛形大サ東西尺計ニいたし可上事、

右之通被仰渡承知仕候、来十五日ニ差上可申候、

三月十一日

一、長梁 右脇門 左脇門窓枚御出シ被成、廻廊割間相止メ、

最初之通、御門丈尺書改之事、

右之通被仰渡承知仕候、

三月十五日

一、武辺方相伺候起凶被出、東西縋破風被止候而、縋破風程之丈尺ニ而日隱被立候而も、何之御差支無之可相成義候哉、木子播磨相糺可申上事、

三月廿六日

(貼紙)
一、武辺方伺書老通

右樋釣鉄物三重目飛縁垂木へ取付、小釣鉄物打、

四隅之釣鉄物者、階隱屋根垂木無之候ニ付、裏板へ

上ケ打二仕、茅負見付ニ小釣鉄物打候様可仕候哉、

一、紫宸殿屋根形壺ツ被出、武辺方伺候掛樋書付之

趣ヲ以雛形いたし可上事、

右之通被仰渡承知仕、来廿四日差上可申候、

四月廿日

一、紫宸殿北御廊下南取合

一一

一一

右个所之分御有来之通唐破風出来之積、

五月六日

武家ヨリ伺候格子寸法

南殿 一丈五尺間

縦 七尺九寸五分

横 一丈四尺一寸四分

鼻ノ出トモハナノ出左右ニテ三寸六分也、

カマチ

左右見付 二寸四分余

同 見込 一寸八分余

上下見付 二寸五分余

同 見込 一寸八分余

竪ノ子

見付 九分余

見込 八分

横ノ子

見付 一寸

見込 二分余

子ノ間

ヨコ 三寸八分余

タテ 三寸七分余

上下ノカマチ

左右ノ出各一寸八分

裏サン

見付 九分余

見込 六分余

┌ (53才)

└ (52ウ)

サントサンノ間

三寸六分許

或ハ三寸六分、或ハ三寸八分、

或ハ三寸九分、

紫宸殿格子

一丈五尺間

横 壹丈三寸九分

竪 七尺九寸五分

横サン厚サ七分
中一寸三分

竪子厚一寸
中一寸三分

板厚サ 相応何程、

金物ヒシ 四所

ツリ金 四所

右之外寸法図之通ニテ重サ何程ト申儀、木子播磨へ

可相尋事、

一、武家方申上候金物重サ六貫八百廿目

漆塗・胡粉塗共 二百八拾目

都合重サ 廿九貫八百目

木地重サ 廿二貫七百目

右式紙・図壹枚御出、落手仕、明朝迄相糺候様承知仕候、

五月七日

一、升形雄垂木出先御好有之、柱小口丸ミ付候様被仰

渡承知仕、来廿日差上可申候、

五月十七日

一、紫宸殿二丈間唐戸裏表一枚

同一丈間唐戸裏表一枚

右清書、金物付合セメ之所、色付之図之通ニ可引、尤一丈

間も折妻ニ可改事、

彩色候而可上事、

五月十八日

右之通被仰渡承知仕候、

一、升組木形被出、尾垂木之先御好之通相改可上、右御

手本一紙御渡、承知落手仕候、出来日限明日可申上候、

○「五月廿八日」脱ナラン

一、紫宸殿高欄高サ壹尺七寸之積ニテ、木大サ割ヲ以

繪図面可上旨、被仰渡承知仕候、猶跡方出来次第可上候、

六月十二日

一、紫宸殿高欄高サ式尺式寸、御普請方方伺候絵形

壹枚御出し、写可上之旨、被仰渡承知仕候、

六月十五日

一、紫宸殿礎木形

右御出し御達しニ相成候、御付札通ニ而宜哉否、返答

明日辰剋可申之旨、 『付札

化粧礎可為此形之通、保方之義ハ

為不露顕之所之間、宜有取計、』

六月廿二日

一、承明門、日・月華門等破風口壁通虹梁上悉ク白壁ニ

致、虹梁・蛙股等仮粧ニ出し候積、絵図面引立可上、尤

木品之分、丹塗・白壁之処・胡粉塗等仕分ケ、裏表ヲ両面引

二可上旨、依之木形式御下ケ、且妻筋図も御下ケ、落手

承知仕候、 一一一

閏六月五日

「(53ウ)

「(54才)

一、今朝差上候建起図式共御下ケニ而、左之通被仰渡、

陣座

一、床ノ高サ一尺三寸、

一、土廂南桁之下ニ柱貫一通リ有ヘシ、其柱貫高サ

陣座長押ト同シ、此処吹又キ、

一、土廂東一間西柱ヨリ陣座東一間西柱ニ至リ柱貫ヲ

入ルヘシ、尤(アキマ、)

一、板敷東ノ方長辺タリ、宣仁門之西壇端ノ葛石ニ

一寸計カ、ル程ニ板敷アルヘシ、

一、立部此図八尺トミユ、今一尺減シメ七尺ニ作ルヘシ、
┌ (54ウ)

一、土廂西吹又キ、桁梁ノ上下共、

宜陽殿

一、公卿座、次将ノ座、議所、大臣宿所、西ノ土廂ノ東北

并納殿、陣腋ノ南西等地覆貫アルヘシ、又床ノ高サ

一尺二寸、壁ノ下ヨセシキアルヘシ、

一、妻戸何モ折戸妻折也、

床子座

一、腰板ナシ、腰長押ハアルベシ、

敷政門

一、折戸ニ作妻折定木ナシ、クハンヌキアリ、

右壘通、

┌

┌

┌

右之通被仰渡承知仕候、┌

閏六月廿二日

一、議所南側地覆貫アルヘシ、

一、東方土廂上長押、上官侍上長押、一樣ニ可作、陣

腋上長押、東北同断、

一、敷政門廊軒桁渡様、床子座南面西一間ノ東

柱ヨリ陣腋北長押ノ上ニ柱貫ヲ入テ、此貫江可渡

桁、

一、床子座腰長押壁外へ出三寸許ト可書付、

一、和徳門関貫木関貫東方ニ可有関貫、

一、陣座土廂上長押・陣座南面長押、付紙之通ニ

可作、立部同付長押可作之、

一、床子座・官人座等上長押高サ、次将座上長押

高サ可為同様、

┌

┌

右之通被仰渡承知仕候、┌┌

七月八日

一、床子図 三枚

右被出、足四方共貫ヲ入可上、尤高メニ可入之、先此図ニ

右堺引立、上下寸法書付可上事、

八月十日

右之通被仰渡、絵図御渡承知仕候、┌┌

一、内衙門小柱内法・板敷カ鴨居迄内法寸法等、

木子相糺可申上旨、被仰渡承知仕候、┌┌┌

十月廿六日

一、紫・清両殿高欄鉄物打方之図御達し相成、尤当

時高欄ニ打立候図并寸尺等書付候図相伺候之様、御

┌ (55才)

達有之候、然処、鉄物打方之義者、先達而方御沙汰も

無之事故、通例之打方之積相心得仕組申候得共、

未残打立候義も無之候間、御好之通取計可申候、

尤地覆間夕鉄物之義者、御差図之通鉄物無

之候而者、御持保不宜候二付、右間夕鉄物取付候様

可仕候、右二付、別段高欄鉄物打立候伺図面者差

出不申候、則御下之鉄物打方図面写取、寸法其

外致付札返却いたし、此段及御答候事、

七月

『可為付札之通、』

御達有之候御図面御造営方向、付札如左、

紫宸殿

一、擬宝珠鉄物 高サ壹尺三寸
差渡六寸

一、地覆間夕鉄物 長壹尺
中五寸二分

一、平桁はゐ 差渡式寸五分

一、笹鉄物 長サ七寸
中二寸

紫宸殿階段御差図通登高欄計二而

袖高欄者無之相仕立申候并清涼殿一一

一一

尤高欄鉄物打方者、兩段共同様二可仕候、

右者修理職奉行衆方水原撰津守へ御直談相

濟候二付、為心得為見被下、承知仕候、

七月廿六日

一、紫宸殿北高廊下吹貫之義二付、御掛合相濟

御図面為心得為見被下、落手仕一一

十月廿三日

「(55ウ)

六番

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

この横帳
丈尺坪取等往反抜書ト大略
同物也、可併見、前ニアリ、

一、紫宸殿 梁行九間
桁行拾貳間五尺 御拜 式間式尺五寸
式間四尺六寸 西廂 壹間五尺

此坪百三拾坪式分三厘、

一、軒廊 式間半
六間半 陣座 梁行式間半
桁行四間半 孔雀間 壹間五尺五寸
壹間五尺五寸 宜陽殿

梁行三間 日花門 梁行式間壹寸
桁行六間 腋 式間七寸
式間三尺三寸 相殿 梁
行式間式尺三寸

壹間五尺三寸 月花門 梁行式間壹寸
桁行式間式尺三寸 腋 式間七寸
式間三尺三寸

此坪七拾式坪、

一、御鳳輦舎 梁行式間壹尺
桁行三間壹尺五寸

此坪六坪九分四厘、

六月二日、

一、御本殿御縁高サ御尋二付、中井主水方尋遣し候処、如左書付出、

覚

一、紫宸殿 御縁石口方御縁上端迄高四尺九寸、
外二壹尺四寸相増、御敷居上迄之高二相成、

一一

右之通御座候、以上、

十三日、

一、紫宸殿妻破風筋金物、御殿之筋莊嚴二而御座候

得者、別段略式之筋金物之仕形無御座候、

又者、金物無之形二御座候哉、御好次第之儀与奉存候、

一、狐格子・獅子口者、御殿造之御作法二相覚罷在候、

尤寺社方杯二茂仕候得共、既二寛文中已來、寺社

方御法度作事条目之内二も御座候而、由緒有之歟、

「(56ウ)

「(56才)

又者、先規之例ニ引当、從公儀寺社方江御免之

儀茂御座候、是又豎板横まいら打候作事、何方ニ而

茂勝手次第二仕立候、輕キ作事ニ御座候処、御所ニ

御用ひ者、恐多様ニ奉存候、併御好おいてハ格別之儀ニ

御座候得共、職方ニ而輕重之訳合茂御座候間、此段申上候、

右勢多へ相達ス、尤岡嶋上野豫方差出ス、

十九日、

一、紫宸殿梁行九間
桁行拾貳間五尺・西庇梁行壹間五尺
桁行五間軒出茅負外

迄壹丈貳尺五寸、

一、御拜梁行貳間貳尺五寸
桁行貳間四尺六寸軒出茅負外迄六尺、倚軒出端

五尺七寸、

右之通御座候、

一、紫宸殿妻破風造方地割被仰付差上申候、往古御

殿貳重虹梁ニ御造立有之候処、相糺申上候様被仰渡候、年

古キ儀ニ而難相知御座候、右之儀、此度者御有形方梁間

広ク相成、母屋桁相増候得者、貳重虹梁ニ相成取組不

仕候而者、堅メ方恰合等茂不宜候、依之以絵図申上候儀ニ

御座候、

右書付上野方出候ニ付、大判事へ相渡ス、

七月九日、

一、紫宸殿地方棟包上迄高八間壹尺八寸五分

中之間東西柱内法三丈三尺七寸
南北三丈壹尺貳寸

前之側東西柱内法拾貳間三尺七寸
南北壹丈壹尺七寸

後之側東西柱内法拾間三尺七寸
南北壹丈壹尺七寸

東入側柱内法南北四間五尺貳寸
東西壹丈壹尺七寸

柱指渡壹尺三寸敷居鴨居壹尺二寸

右之通御座候、以上、但宝永之御取建、

一、日花門・月花門南北四間

一、公卿座・次將座・大臣宿所・宜陽殿庇・政官侍・議所

等南北拾貳間貳尺

右之通御絵図ニ相見江申候、廻廊長延九拾貳間之積

仕候得者、月花門北之方ニ而、五間五尺ニ可相成処、三間

五尺程ニ相見江廻廊間數減少之方ニ御座候、

十二日、

一、紫宸殿 東南西三方折廻、葺拾七口、上部高四尺三寸、
下部高三尺四寸、

八月七日、

一、紫宸殿北御廊下御殿江取付之処、拭板被相定、

一、御輿宿・議所与之間貳間程御座候、廻廊西江寄候、御絵

図ニ御座候、元之通貳間程明ケ引立可申哉、寄七候、不及其候、

右御伺申上候事、

八日、

一、廻廊内溝水上何れ方高倍付、落口何れニ御座候哉、并伏

溝个所々、

右御伺申上候事、

一、紫宸殿 東西廂 同階隱

一

一

一

右之分檜皮葺御座候哉、

一、承明門 一、廻廊 一、日花門 一、月花門

一、紫宸殿、東北廊、左近陣座 一、東軒廊

一、次將座、公卿、大臣宿所、宜陽殿廂、政官侍、議所

一 (57ウ)

- 一、左青鎖門、宣仁門、恭礼門、内衙門
- 一、敷政門 一、官人座、床子座
- 一、和徳門

一一

右之分瓦葺二御座候哉、

御屋根御柱御床御天井御門々廻廊个所付

- 一、紫宸殿 同北取合御廊下

右御屋根檜皮葺、

- 一、御輿宿

東軒廊

左近陣座

東北廊

官人座

床子座

次将座

公卿座

大臣宿所

廻廊

右御屋根瓦葺

御柱分

- 一、紫宸殿

┌ (58才)

左近陣座

土廂

東北廊

官人座

床子座

次将座

公卿座

大臣宿所

東軒廊

御輿宿

紫宸殿北取合廊下

右檜御柱

平地ヨリ板敷上端迄寸法

- 一、紫宸殿

但壇上ヨリ上七尺式寸、

御縁高サ 七尺八寸

但壇上ヨリ上六尺、

壇上高サ 壹尺八寸

拾八間御廊下 三尺八寸六分

北御所南御廊下 三尺

同西御廊下 七尺八寸

- 一、日・月華門

一、壇上高サ六寸門出柱外を式尺式寸、

一、桁行柱真々式丈四尺

一、梁行同式丈

一、方立横内法壹丈

一、高サ蹴放上方鼠走り下迄壹丈四尺九寸

┌ (58ウ)

一、蹴放シ高サ壹尺、上八六寸五分

┌ (59才)

一、鼠走り六寸五分四方

一、破風巾壹尺八寸、厚サ四寸

一、唐居敷居厚八寸五分、巾貳尺六寸

一、裏甲出七寸、厚サ四寸

一、方立巾六寸、厚貳寸

一、茅負七寸四分

一、外側壇上上る柱貫下迄壹丈五尺五寸

一、垂木大サ高サ四寸五分、下八三寸

一、丸柱太サ壹尺五寸

一、壇上る軒瓦迄高サ三丈七寸、外二獅_子口高サ三尺、巾三尺七寸

一、柱貫大サ壹尺貳寸、下八五寸

一、軒桁高サ壇上る桁外角迄壹丈九尺

一、腰長押下る壇上迄六尺、腰長押大サ九寸柱つらる出貳寸

一、傍軒柱真る破風外迄七尺三寸

出貳寸

一、軒之出柱真る茅負外迄一丈三寸

一、地覆大サ高サ壹尺、上八五寸

一、扉かまち四寸四方

一、柱貫下非貫之間壹尺六寸

一、扉長サ壹丈五尺六寸、巾五尺五寸

非貫大サ八寸

一、扉定木高サ五寸五分、厚貳寸

一、非貫と腰長押之間六尺

一、承明門

一、中側冠木高サ九寸、巾壹尺九寸、長サ鼻之出

一、桁行中三ま柱真々壹丈三尺宛

柱外つらる貳尺四寸

但西壹ま壹丈貳尺八寸有之、

一、妻虹梁高サ壹尺四寸、下八壹尺壹寸

一、兩端間八尺八寸宛

一、大斗大サ壹尺五寸、高サ八寸

一、横方立内法壹丈貳寸宛

一、舟肘木長サ五尺、高サ六寸五分、下八六寸

但西之ま壹丈、

一、軒桁高サ壹尺貳寸、下八九寸五分

一、壇上高サ内外共壹尺貳寸宛

一、二重虹梁高サ壹尺、下八七寸

右之外寸法日・月花門二同之、

一、同下舟肘木五寸四方

一、長樂、永安、右掖、左掖

一、同外九寸五分、高サ六寸

┌ (59ウ)

一、横内法九尺四寸

一、母屋桁高サ九寸五分、下八八寸

一、高サ内法七尺六寸

一、棟桁下八壹尺

但蹴放シ上る鼠走り下迄、

一、扱首束長サ壹尺四寸、大サ壹尺

一、蹴放シ高サ五寸、上八四寸

扱首棹五寸四方

一、鼠走三寸五分四方

┌ (60才)

一、角小柱五寸四方、但別方立無之、

一、小壁八寸

一、冠木高サ七寸、巾壹尺五寸

長サ柱つらゝ壹尺壹寸出、

一、板扉厚サ貳寸

扉巾四尺八寸

扉長サ七尺九寸

定木巾四寸

一、扉下軸請長サ壹尺六寸、巾四寸、厚サ三寸

但有軸請木有之、

唐居敷居無之、

一、廻廊

一、柱ま壹丈三尺宛

一、梁行貳間

一、日花門方北式夕ま柱ま壹丈宛

廻廊と門々間柱ま五尺宛

但日華門北廻廊方北之間四尺壹寸、

一、高サ壇上方柱貫下迄八尺四寸

柱貫大サ九寸五分、厚サ三寸

一、柱貫方桁下迄小壁高サ壹尺

此間束大サ五寸四方

一、大斗大サ九寸、高サ六寸

一、舟肘木高サ五寸五分、厚サ四寸

一、丸柱大サ差渡シ九寸

一、軒桁大サ高サ五寸五分、下八五寸五分

一、虹梁高サ壹尺壹寸五分、厚七寸五分

┌ (60ウ)

一、軒桁外角方壇上迄高サ壹丈八寸

一、壇上方棟瓦迄高サ壹丈七尺

外二獅子々口高サ一尺七寸、巾壹尺九寸、

一、破風巾九寸、厚サ三寸

一、垂木大サ高サ貳寸八分、下八貳寸

一、傍軒出柱真方破風外迄貳尺六寸

一、軒之出柱真方茅負外迄四尺八寸

一、茅負大サ五寸四方

一、裏甲出六寸、厚貳寸五分

一、廻廊取合之所笠木壁高サ壹丈

一、中側惣体地覆高サ六寸

一、壇上柱付方出貳尺五寸余

御門々横内法高サ共、先達而御好通凡

相当仕候様奉存候、

但長梁・永安・左右掖、右四个所唐居敷居無

御座候、扉軸請付物二仕有之候、

惣体御門冠木下壁無之、同所長押等相見得

不申候、

承明門、日・月華門共、壇上柱外方出貳尺

貳寸計御座候、御好通柱外方三尺二付八寸

計出不足仕候、廻廊壇上柱外方出貳尺五寸

計御座候、御好通柱外ヨリ三尺二付五寸計

不足仕候様奉存候、惣体壇上出御伺通御門・

廻廊ト毛柱真方出三尺之積与奉存候、

┌ (61才)

(〇六十二丁表ヨリ六十三丁裏マデ、空)

┌ (61ウ)

内侍所

一番 造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

一、内侍所梁行四間半
桁行七間半

此坪三拾三坪七分五厘、

壇上高壹尺八寸

内陣東側三ま内ハメ外壁、南北壹下ま内ハメ外壁、

外陣西側三ま北方第一・第二之ま両面葺戸、第三之ま両面

葺戸式枚、南側壹下ま両面遺戸式、北側ハ唐戸平軸、

何レ茂拭板敷、

上段 式拾式帖半

東側壹下まニテ両面遺戸四、障子式、西側ハ式タまニテ両

面遺戸式、障子一、南側式タまニテ東壹下まハ両面遺戸

式、障子壹、西ハ唐戸平軸、落縁高欄有、東落縁外ニ

清走り有之、西高欄下ニ南北五間、東西式間、八垣有之、

南之方唐戸通り九級之階段有、左右階隠シ角柱有、

壇上方石階三級有、北ハ内陣ト外陣ト間之通ニ妻戸

有、外陣方北御羽車館取合江階段六級有、

御羽車館式間半

取合式間四尺八寸七分
式間半

此坪五坪六分式厘、

御羽車館

東南北三方ハメ、西ハ式タまニテ戸式枚宛、

取合

┌ (64才)

内室東ハ御羽車館、西ハ高欄掛ケハツシ、南方外陣与

之六級之階段、北ハ戸式カケハツシ、高欄外ニ雲階

有之事、

一、内侍所方紫宸殿江御廊下式間半
三拾式間壹尺六寸式分

此坪四拾八坪三分七厘、

南側東方第一之間ハ御羽車館前取合当第拾式

ま目下二下々道有之、第十八・十九之間和徳ニ取合第

式拾六間ノ下々下々道有之、何レ茂中敷居戸式、障

子壹、下ハメ下壁、

一、内侍所東取合式間半
三間

此坪七坪五分、

一、同刀自部屋五間
拾壹間東指出式間
三間同式間
四間

南指出式間
五間半清湯殿式間
三間半雪隠通縁式間
三間半

次湯殿式間
三間雪隠通縁式間
三間半

此坪八拾七坪七分五厘、

一、同南座敷三間半
四間半北指出式間
三間北取合式間
式間

玄関式間
三間半雪隠小用所式間
三尺五寸腰掛式間
式間

雪隠三尺五寸
三尺五寸共

此坪式拾七坪八厘、

一、同台所土間共五間
五間半水棚庇式間
三間半北指出式間
三間

西押入庇式間
四間侍部屋男部屋式間
四間下湯殿式間
式間半

柴部屋式間半
三間

此坪五拾式坪式分五厘、

一、清御藏式間
三間問庇式間
式間半

北雜藏式間
三間半問庇式間
式間半宛式个十所

南雜藏式間
三間問庇式間
八尺

┌ (64ウ)

此坪式拾壹坪壹分壹厘、

此坪壹坪八分三厘、

一、内侍所方紫宸殿江廊下壹間 式拾貳間長橋廊下貳間 六間式尺五寸

此坪四拾五坪九分、

一、内侍所東取合貳間半 三間

此坪七坪五分、

一、同刀自部屋梁行五間 桁行拾間半北庇間半 長延拾貳間南廂壹間 五間半

同指出貳間 貳間半東指出貳間 四間同壹間半 貳間清湯殿貳間半 貳間

三口雪隱壹間 貳間 三間通道壹間 三間

此坪八拾八坪、

一、同南座敷次之間共三間半 四間半同北取合貳間 貳間半

押入廂壹間半 貳間玄関壹間半 貳間石之間壹間 貳間

雪隱四尺 腰掛 壹間 雪隱 三尺五寸 四尺 五尺

此坪式拾九坪五厘、

一、同台所五間半 五間水棚廂間半 三間侍部屋男部屋 壹間半 三間

湯殿雪隱四尺 壹間半物置貳間 三間下湯殿壹間 貳間雪隱三尺五寸 四尺

此坪四拾貳坪式分四厘、

一、同清藏貳間 三間半間庇壹間半 貳間式个所

雜藏貳間 三間 間庇 八尺 壹間

此坪拾五坪式分三厘、

同日、

一、御本殿御縁高廿御尋二付、中井主水方尋遣候処、如左書付出、

覚

一、内侍所 御縁高廿方二而石口方上端迄高七尺六寸五分、

外二壹尺式寸壹分相増御敷居上迄之高二相成、

1

右之通御座候、以上、

┌ (66才)

丈尺坪取等往反拔書

七月十七日、

一、内侍所刀自部屋南東土戸之所、是迄七間半之所

此度高堀迄二而八四間二相成候、高堀無之、藏迄二仕候

得者、六間二相成候事、

廿四日、

一、勢多方如左書付伝達、上野掾へ相渡、

内侍所東四間計空地有之候処、六間半明二相

成候義如何、

天明九四月十五日、

一、但馬面会二而、内侍所上之間畳尺并敷入相糺

候様申聞候二付、則大針助之丞手代喜兵衛相糺候処、

六尺三寸間二而東西敷入二御座候旨申聞、其段丹後へ

相達ス、

┌ (65才)

六番 御指図御用坪取間尺丈尺之扣

六月二日、

一、内侍所梁行四間 桁行七間

此坪式拾八坪、

一、御羽車置所四尺 三間

九日、

一、内侍所御縁巾六尺五寸、高欄内法五尺九寸、

右相糺候処、岡嶋申出、

廿五日、

一、内侍所東四間半計空地有之候処、六間半明キ二相成候義如何、

此儀御藏前通明キ少ク、御往反御差支之儀可有之候旨、

絵図差上候節、御断候様二付、六間半明二相成候義二

御座候、

八月八日、

一、内侍所

一

右之分檜皮葺御座候哉、

一、内侍所刀自部屋并御本殿取合

同南座敷玄関

右之分式分木賊葺二御座候哉、

御造営窺帳

一、内侍所切目縁之儀、播磨相糺候処、小口縁之義二御座候、

厚之儀二付書付等所持罷在候旨申聞候、依之此段申上候、

三月十六日

一、唐破風義二付、御普請方伺書面拝見仕候処、此度者

少々御模様替二付、唐破風出来不仕候趣二御座候内、

内侍所東方取合御有形唐破風御座候処、御間内二付

「(66ウ)

不出来之趣二御座候、

御本殿ト取合相分り候様唐破風御出来方可有御座

哉二奉存候、其余伺書面之通御有形二相准相違無

御座奉存候、依之別紙伺書面返上仕候、

五月七日

一、御普請方伺候

内侍所已下御殿向板壁白土塗、其余下地壁白土壁(塗)

之義、右伺候、御殿向之外二も御有形板壁白土壁(塗)之

御場所も有之候哉、相糺可申旨、承知仕候、修理職方木

子播磨等彼是相考候へ共、御有形板壁・下地壁之義

委敷覚悟不仕候二付、此段申上候、

五月十三日

一、御殿向板壁之義相糺候処、御床力上計二而御床力下二板壁ハ

無御座候、都而竹下地壁二而御座候、既二御有形天神妻戸

下々壁度々損二付、御表方御繕被仰渡候故、竹下地壁二

相違無御座候、

五月廿八日

一、内侍所上之段取合中之間江御段違私江被仰付候八分

計御指図、表二而者御段違之義無御座候、此度武辺方

伺候御絵図拝見被仰付候処、此義私取敢不申候二付、

御様子不奉存候、依此段申上候、

六月三日

岡嶋上野大掾

一、内侍所中ノ間方上之段江取付之処、北之御縁南へ通し

段を付置何程敷候哉、絵図を以申上候様、昨日被仰

渡、木子江申付候処、右図面出来二付、差上申候、且昨日

御渡有之候、武辺方伺出候唐破風紙形図返上仕候、

「(67才)

六月

- 一、内侍所元御殿上長押を下半長押上迄高サ内法七尺四分二御座候、右高サを以御唐戸口高サ押計候処、高サ内法六尺一寸計二御座候様奉存候、

但長押高サ之義、留書御座候得共、御唐戸口高サ内

法之儀者、留書無御座候、尤此度桁行・梁行共相

延候二付、御普請方を御伺通寸尺之趣可然御座候、

木子播磨大掾

一、是迄

内侍所木造始并御庭式法之節、惣官向并御定式

御出入方之もの何れ茂罷出着座仕候、此度造内裏木

造――

一、内侍所御肌衣掛并御燈籠釣所之図 壹枚

右写出来二付差上申候、

「(67ウ)

一、北間五ヶ間西北等之方中連子之事、

一、清走り今一ツ如有来取付之事、

一、中ノ間十八帖南ノ縁巾如有来五尺之事、

一、茶所南廻リ縁巾如有来四尺之事、

一、八帖間乾隅縁ヒラキ之事、

一、湯殿板間之処・同所西縁北方八帖敷・西縁北方等段可有之事、

一、湯殿敷石北入口之事、

一、板敷北四帖間・板間・湯殿等已東ハ各有来段下二候事、

右之通被仰渡承知仕候、出来次第差上可申候、

四月九日

一、内侍所内外陣・上段等御有来と先達而御達有

之候、新図と御間畳数相違二付、中井六分堺旧図

之通引改可申事、

尤取合間を刀自部屋迄、准間敷二西へ可寄事、

右之通被仰渡、絵図御渡、落手承知仕候、――

四月十五日

一、内侍所御敷図引改之通御治定、今日武辺へ御達事、

――

四月廿四日

一、内侍所御地面

町堀有之趣、右日限行事官行向候間、日限相知

次第行事官可申通事、

尤右之義行事官へ申通候節可相届候事、

四月卅日

一、内侍所北御廊下取合

「(68才)

御造営承知帳

一、内侍所東方雜蔵二个所有来御構之中有之候間、

今度御構外江出候てハメリ悪敷差支候事共依有之、

如掛紙図改候事、

一、異隅井戸所改之事、

一、同東南南方高塀有来之通取建之事、

一、走之外井是迄有来候間、今度同可堀事、

一、但有来之図面座敷之前二有之井、先年此所二改候事、

一、五帖物置東如有来上ケマト可有事、

11

1

右个所之分御有来之通唐破風出来之積、

一、内侍所東取合

11

右内侍所東取合、御有形落縁通左右妻戸構有之、

取合御廊下二而壹段下り有之、御本殿御屋根下へ

かゝミ有之候間、唐破風有之候処、此度者御本殿取合

御間内二相成、御本殿へ取付申候間、唐破風二者出来

不仕候、

11

11

1

右式通御下々、落手承知仕候、相糺明日可申上候、

五月六日

一、内侍所已下五个所

右之御場所壁之所、板壁上塗白土塗、其外御建物

御有来板壁上塗白土塗之処、令吟味可申上事、

五月十日

一、内侍所饅頭形被略候、為心得申渡候事、

六月朔日

一、内侍所一字之絵図壹枚并

御本殿江取合之間唐破風付之図壹枚共御出、右取

合之間七帖半之処、拾帖之間二いたし、夫方惣而東へ

間半通御建物ヲ寄候積掛紙可仕、外二紙新二御

見分能引立候様被仰渡承知仕候、1

「(68ウ)

六月八日

一、内侍所御本殿取合之辺御治定二付、武辺へ御達

之図之通、御扣之方式通相改可上旨、被仰渡承知仕候、

六月十二日

一、来十八日申剋後、内侍所御本殿見分之事、

行事官肥後守

多村隼太

右之外刀自三人罷越候、此段為心得被仰渡承知仕候、

一、来十八日申剋後、修理職兩人内侍所御本殿へ可行向事、

五月十四日

御屋根御柱御床11个所付

御屋根之分

一、内侍所并拾八間廊下

右檜皮葺

一、内侍所之取合中之間勝手向

右御屋根式分木賊葺

一、内侍所清藏

右御屋根瓦葺

一、内侍所并拾八間廊下

右檜御柱

一、「檜」内侍所取合中之間勝手向

右榎御柱

平地ヨリ板敷上端迄寸法

「(69ウ)

一、内侍所内陣壹丈壹寸三分

但壇上ヨリ上八尺八寸三分、

同縁高サ 九尺四寸八分

但東西北共、壇上ヨリ上七尺六寸八分、

上段 九尺七寸式分

同断七尺九寸式分、

同御縁高サ 八尺八寸三分

但西南共、同断七尺三分、

取合中之間
次之間刀自部屋 五尺壹寸

勝手向 三尺五寸

壇上高サ 壹尺八寸

一、内侍所

内陣 折上小組 中『○』折上小組

外陣 格天井小組 中『○』格天井小組

取合 棹縁 修『○』屋根裏

次間 平縁 修『○』棹縁

中 平縁

茶所 平縁 中『○』平縁

囲炉裏 平縁 中『○』棹縁

湯殿 屋根裏直打 中『○』平縁

同板間 屋根裏直打 中『○』平縁

一、内侍所長廊下

棹縁 修『○』化粧屋根裏

中 内室

御普請方ヨリ伺帳

一、御殿々々板敷張様一々相伺候覚悟二候哉、御用掛へ

可相尋積、水原撰津守へ可申達事、

右之通御書付御渡承知仕、則水原撰津守へ書付

相達し候、

四月二日

右即日水原撰津守へ相達又、其後広橋殿撰津

守へ御面会之義有之、右板敷張様御好之分

御書付被出候様被申上、御承知二候旨、撰州被申聞、

一、板敷

内侍所内々陣 東西張

一一

一一

右之通御書付御渡承知仕、則水原撰津守へ書付

相達し候、

四月三日

一、内侍所北御廊下取合

一一

一一

右个所之分御有来之通唐破風出来之積、

『伺之通、』

一、内侍所東長橋廊東面

右内侍所東取合、御有形落縁通左右妻戸構有之、

取合御廊下二而老段下り有之、御屋根本殿御屋根之下江

かゝミ有之候間、唐破風有之候処、此度者御本殿取合御間

内二相成、御本殿へ取付申候間、唐破風二八出来不仕候、

┌ (70才)

┌ (70ウ)

『内侍所東取合元來東西簀子連続之所二候、後々被敷

畳御間内二相見候得共、元來本殿取合之所二候間、唐破

風無之候而八御差支有之候間、御有來之通可有唐破

風候、其余个所可為伺之通、』

西五月

書面掛合之趣相伺候事、

一、内侍所上之段 化粧屋根裏

右御有形之通、繁垂木之積、

一一

一一

西五月

一、内侍所

一一

一一

右之御場所壁之処、板壁上塗白土塗仕、其外之御建

物之分壁之所者、下地壁白土塗二可仕候哉、悉く板壁二

仕候而者、木からし等も行届兼、追而割し出候義も難

計奉存候間、此段及御掛合事、

西五月

『五月十五日、可為御有來之通、

此儀於禁中竹難用二付、壁下地竹依有差支、

右之通被仰出、』

一、内侍所一一

一一

右之御場所壁之処、板壁二致し、上塗白土塗仕候、其

外八壁之処下地壁白土塗二可仕哉之段、先達而御掛合

「(71才)

申候処、御有來之通可仕旨、尤重立候所八竹難被用、

右之通御差図有之旨、御付札御座候二付、右之式个所

之外、御涼所・御黒戸・御湯殿・参内殿之壁之分八

板壁上塗白土塗仕、此外之御場所者、都而壁之所者

下地壁白土塗二可仕哉、既二御有形にも御拝廊下

向其外御外廻り并内玄関より御勝手向壁之

分不殘間渡竹入下地壁二而御座候、殊二紫宸殿

御床下犬防其外所々御勝手向之御間并部屋々々

等間渡竹入下地壁之仕様二、宝永度書留二も相見

申候間、旁書面之通相成候様仕度、猶又御掛合申候事、

西五月

『六月朔日、伺之通、』

一、内侍所取合之間、御元形者御廊下形子二而御座候間、

唐破風取付宜候得共、此度者右取付之処、

御本殿御縁類も無之、御本殿へ直二取付御間内二相成、

御廊下二而者無御座候間、唐破風可取付筋二者無之

候得共、御好ミ之義二御座候二付、先紙形二仕掛御目申候

得共、右之通二御座候間、此度者被相止候方可然卜奉存候

事、

書面之趣相伺候事、

右水原摂津守方伺候様差越候二付、建図壹枚相添

奉伺候、

六月二日

『六月十二日、図面差返し候、

内侍所取合之間、東之方縁類無之、階段二致し有之候得共、」(72才)

如此二て八南北共妻戸より往来難相成候、先達而相達候通、

「(71ウ)

元來東西簀子連続之所候、旁此所踏段ニハ難相成候間、縁
類取付候、本殿ト差別依可有之、唐破風有之義勿論

二候、是又取合之間、殿ノ東拾帖方狭ク相成候てハ御差支有
之候間、図面之通中間江間半広メニ相成候、尤是迄者

段無之、段違ニ而ハ、御塞之節鎖り御差支有之候ニ付、此段
之上図面之通マイラ戸可有之候、且南方縁一間半引延ニ
相成候、都而可為新図之通候事、

一、明後十六日ハ内侍所丁堀取掛り候旨、水原撰津守方
申聞候ニ付、此段申上候、尤先達而御下知之通、行事宜行向
之義申達候、

六月十四日

一、内侍所内法高サ之儀、御元形寸法得ト相分兼候得共、

回禄以前ハ御恰好方低キ趣ニ御座候、此度御軒高ク相成、其
上桁行・梁行共御元形方相増候間、右相准候得者、上

長押ト下長押之間高サ内法七尺四寸八分二仕、御唐戸口
之所者、楣下端より蹴放上端迄、全て明キ六尺五寸

四分二仕、其外内法者右ニ相准候得者、御恰好宜可有御座
旨、棟梁共申聞候間、右之通取計候積ニ御座候得共、格別
御場所柄故、為念此段御達申候事、

六月

『六月廿二日、可為伺之通、』

一、内侍所御本殿際東之方井戸、此節堀方為致候処、

中途方差水致し候、然ル処、右井戸小井側石垣上
切摺合之積ニ御座候得共、側石垣ニ而者差水留り兼
可申候間、桶側井戸ニ致候方可然旨、職分之者申出候、
右之通、桶側之積可仕候哉、此段御掛合申候事、

「(72ウ)

六月

『六月廿四日、

此儀職分之者今一応相糺可有伺哉之事、』

一、内侍所御本殿際東之方井戸輪之義ニ付御掛合申候処、今一
応職分之者相糺候様、御付札御座候ニ付、猶又相糺候処、差水
致候所迄檜小井段々入、夫方上之方ハ石垣上切摺合セ、裏

込随分念入築立申候得者、差水等仕間敷旨、職分之者
申聞候、尤昨日御談之通、南之方ハ寄七候而も、小間半程之違
故、指水之義同様ニ可有御座旨、是又職分之者申聞候間、前
書之通小井段々入候方ニ御取計可申哉、右之通相済不申候
得者、中之間南之方ハ寄堀候方外致方無御座候、依之又々
御掛合申候事、

六月

『六月十九日

小井段々ニ入候而者、桶側ニ可相似寄候、本殿際東方井者、
仮令別二中ノ間南方ハ新ニ被堀井候而も難相止之子細有
之候条、先本殿際東方井石垣可被申付候、漆喰等ニ而
相固候而も差水有之候ハ、此井者非常御手当御用ニも
相成候間、其假差置、別二中ノ間南方ニ而新井可有
之事、』

「(73才)

一、内侍所取合之間、御屋根唐破風取付候ニ付、最初之柱

形ト者相違仕候ニ付、取合之間者御本殿木口縁取付左右妻
戸構小柱共御柱形別紙絵図面朱墨之通取建候
積御座候、尤妻戸構之所起絵図ニ仕、本紙御柱形絵
図面江付掛御目候、格別之御場所ニ付、為念御達置申
候事、

西七月

『七ノ十、伺之通、』

- 一、瓦菊御紋ひなたかけ御有形之个所、左之通御座候、御文庫楽器蔵

内侍所雜蔵共鬼板之分菊御紋ひなた二而――

――

右之外御有形相知不申事

右水原播磨守る差越候二付、差上申候、

八月六日

- 一、内侍所御床力下風窓之義御元形四个所有之由、尤

内忝个所者出入相成候様錠前付候趣二付、此度も御同

様四个所取付内北之方忝个所ハ錠前付二いたし候積

御座候、為念絵図面相添此段御懸合申候事、

十月

『十月十六日答、伺之通、』

- 一、内侍所御屋根軒厚之義、御有形之通可仕旨、先達而

御達有之候二付、此度忝尺九寸五分二葺立申候、然ル処、御

同所階隠軒厚之義ハ、八寸之積葺立候ハ、可然候哉、

」(73ウ)

此段御掛合申候事、

十月

『十月廿三答、伺之通、』

- 一、禁裏常御殿――

全文見常御殿分、

――

内侍所東取合木口縁南北忝个所

御妻戸笠木上

御同所北側木口縁

御妻戸笠木上

――

――

右之个所之御杉戸上御妻戸上共竹之節、御差図

二者無之候得共、御場所柄之義二有之、御見付二も相拘候

二付、竹之節擲取付候様可仕候哉、此段御懸合申候事、

十一月

『十一月十三答、』

各伺之通、竹節擲取付可有之候、』

- 一、禁裏御殿御廊下向之内中敷居个所、

内侍所方北江小御所迄廊下東側、全文見常御殿分、

『御有形之通、四尺中敷居』

- 一、禁裏小御所――全文見小御所部、

『小御所取付御廊下・十八間廊下等、是又御有形之通、

畳被拵候義有之候、為念達置候事、』

」(74才)

- 一、小御所取合廊下方内侍所北廊下へ出御縁之所

開戸并手摺等先達而御敷図書落候、仍更此小図

掛紙之通可有御造立事、

右御造営方へ可申達旨、水原撰津守へ可申通事、

十一月十五日

- 一、先達而

禁裏御殿向其外御柱木品御屋根向等取調為御

掛合候処、其砌夫々御差図有之候間、右御指図之趣を以

取計候義者勿論之義二御座候、然ル内侍所勝

手向之義、最初之御差図通二而ハ、御本殿檜皮

葺之御造り合故、勝手向屋根二分木賊葺之

積相伺候処、其後御好二而勝手向御本殿ト御造り合相止ミ、別段御軒下へ唐破風建ニ相成候二付、猶又評議仕候処、御勝手向之義ニも有之、其上外ニ

御場所御省略ニ被准候得者、取合之間以下者

屋根迄柿葺ニ御省略御座候様仕度、猶又此段

御懸合申候事、

十一月

『十二廿五答、

可為伺之通、但唐破風之所ハ檜皮葺取合間、本屋

根ハ伺之通柿葺、』

「(74ウ)

(○以下、②『安政新造内裡諸備』ノ三丁表ヨリ三四丁表ニ接続ス、便宜コ、ニ翻字ス)

一、内侍所御内々陣御肌衣掛并御燈籠釣鉄物、前々

取付候由、棟梁共申聞候、此度も右之品取付候義ニ

御座候哉、左候得者、右ノ所別紙御天井図へ起シ

絵図致し、掛御目候間、右絵図面之御場所へ

取付候而可然候哉、則図面相添、此段御懸合申候

事、

十一月

『十一月廿五日、

以別紙四ツ折答図被留置、』

一、御肌衣掛・御燈籠釣所之義者、殊嚴重之御場

所ニ候間、白川少将御場所檢分之節可被申由ニ候、

仍行向之事、伝奏衆へ達置候事、

一、御燈籠釣候鑲ハ可被設置候、御燈籠釣金ハ

流例行事官調進ニ候、不及設候事、

右御造營方へ可申達、水原撰津守へ可申達事、

」

十一月廿五日

一、内侍所勝手向之義、上柿葺之積相伺候処、伺之通

上柿葺ニ仕、尤唐破風之所者檜皮葺ニ可仕旨、

御差図ニ御座候、然ル処唐破風屋根南流者、取

合勝手之方共同様之流ニ相成候間、平屋根之内

ニ而檜皮・柿ト葺繼之所、殊之外見苦敷、其上

御元形も唐破風檜皮葺ニ而者無之候間、破風前計

檜皮葺ニ而者、至而御見付不宜候間、唐破風共

上柿葺之方可然存候、猶又御懸合申候事、

十二月

一、内侍所御本殿・小御所・常御殿御障子御元形

猿類障子ニ有之候趣ニ付、右御場所之分者猿類

障子之積相心得罷在候、右ニ付組子木形仕立為念

掛御目申候、此木形之通ニ而可然候哉、御懸合申候

事、

十二月

『十二月七日答、

伺之通、雛形返却候也、』

一、内侍所北之方御庭境御築地建方、御差図之趣ヲ以

地割為致候処、御同所御清蔵并雜蔵共御築地

間々間半ニ相成候間、御築地軒先雨敲ニ而右御蔵

之御持保不宜候ニ付、別紙図面掛紙図之通、北之

方へ御築地四尺程寄取建候様仕度候、尤掛絵図ニ

「(②32才)

も印シ候通り、御庭松壹本、御築地へ相障候二付、此節

御植替有之候様致度候、且御池庭南之方八間御文

庫、此度北之方引直之御地所、御差図通二而者、御

泉水逃水埋樋之通り迄へ相掛候二付、左候而者、若

埋垣浚等之節も差支可申候間、右御文庫御差図

通方二間北へ寄并御築地穴門之義者、御元形之所へ

取付候得者、埋樋吐口二相当り、浚之節差支有之

間敷候間、掛絵図之通御元形之所へ取付可然存候、

則図面相添、此段御懸合申候事、

十二月十一日

『伺之通、』

一、内侍所北御境之御築地、此度御指図通方四尺程

北へ寄七築立二相成候処、御庭之松壹本障二相成候

由、右松植替之義者、其辺二而勝手次第於御

普請方植替有之候様奉行衆被命候事、

十二月十六日

一、

一一一

内侍所勝手手炉縁之義、御元形木地縁之由二有

之候間、此度木地之積相心得罷在候、右之段御懸合

申候事、

正月

一、

内侍所御通廊下下々道 式个所

右之个所々御用筋有之、石壇等御取払相成候二付、

扣土二而者御差支二相成候趣御達二付、右之分八鋪之

所者栗石二而平ラニ築立、左右并前後踏段共石
垣之積取計申候、

一一

一一

戌二月

『二廿一答、伺之通、』

一、内侍所勝手南座鋪

右之御場所天井板木心宜敷杉板相用可申与

存候、為念御達申候、尤其外天井板板相用之義

者、先達而御懸合済之通相心得罷在候事、

二月

『二月廿八日答、伺之通、』

一、内侍所東取合北之樽縁方御本殿御縁へ上り段之

所、御縁上より唐破風軒口迄四尺五寸程二相成候間、

左候而八通行難相成候二付、別紙図面掛紙朱引

之通御縁小口幅三尺五寸二横卷尺程切込候而上り

段取付候様可致候哉、及御掛合候事、

四月

『十五日答、』

可為図面之通、』

一、内侍所御内々陣御肌衣掛木口逆輪金物

毛彫、別紙図面兩様之内何れ之方可致候哉、

為念絵図相添御掛合申候事、

六月

一、内侍所雲橋上り口御羽車簾懸ケ之上并南門四

脚唐門等、御有形銅網張之鳥防有之候、今度

」(233才)

出来無之様子ニ相見へ候、右御有形通出来可然候ハ、
是又前同様可取計事、

右水原撰津守心得之旨ニ而申聞候ニ付、此段申上候、

九月廿日

一、内侍所上ノ段方外陣へ取付丰境最初之御差図

(○以上、挿入)

「(2) 33ウ」

「(2) 34才」

常御殿

一番 造内裏坪取御間敷御建具御絵様諸式寄帳

八月十八日、

一、日野殿土山淡路守へ御面会ニテ――

将又宝永出来之常御殿卜此度御造営之御常御

殿下兩様坪数、今晚中ニ相糺置、明朝無間違差上

可申、急々御入用之旨被仰渡候由申聞候ニ付、則岡

嶋上野掾へ申渡又、

一、宝永御造営常御殿 此坪式百貳拾壹坪壹分五厘、

一、此度之常御殿 此坪数百八拾四坪貳分五厘、

指引三拾六坪九分減少ニ相成候、

右之通御座候、以上、

十月廿七日、

一、常御殿御ま七尺ま二付、御廊下取合之処、別絵図を以

御伺申上候、

二月四日、

一、先月十五日議奏衆方御渡被成候所司代伺之个条二付、

御治定等被仰出候、帳面ニ致下ケ札左之通書付差添

返上之事、

一、御造営御殿・諸建物御屋根分ケ、宝永之度御造

営之節振方、先達而棟梁方書付取之候旨申上

置候処、御沙汰も無御座候、此度御造営之内、紫宸

殿・清涼殿廻之御屋根之儀ハ、粗承知も仕候得共、

其余御殿末々之御建物等屋根分ケ、武辺へ御達シ

方御様子承知仕度候、

一、常御殿七尺ま之御割合ニ付、御廊下取付之様子

御絵図并御指図御絵面と相違之段申上置候、

御治定之御様子承知仕度候、

八月廿五日、

一、日野殿御面会、清涼殿・常御殿此度御造営御指図

御柱間六尺五寸間ニ御座候哉之事、右伝奏衆方申出候事、

一、日野殿御面会ニテ常御殿柱間之儀被仰付候、御畳

七尺間ニ御座候哉、六尺間ニ候哉、御尋申上候処、七尺間之

由被仰渡、尤関東江も御達有之候由被命、御絵図

ニハ差支不申候哉之旨被仰候ニ付、御絵図ニハ差支も

無御座候得共、御取建之節拾間ニテ五尺宛延候由

申上、

一、常御殿柱間取・同坪取等七尺間を以坪取可致之旨、

日野殿被命、

一、日野殿御面会ニテ、宝永度之常御殿・清涼殿

七尺間ニ候哉之旨御尋、此度書上ケ宝永度之坪数

七尺間ニテ坪取仕候、此度之儀ハ六尺五寸間之積リニ

御座候由申上候処、左候ハ、其趣を以坪数書付相改候

様被命、

一、日野殿御面会、左之通上候、

「(75才)」

「(75ウ)」

小御所北・常御殿西江折廻り御廊下、梁行

壹間半二御座候処、再応相改候得共如何間

違候哉、壹間二書立坪取仕候処、坪数相違仕候

段、不調法恐入奉存候、此間方差上置候坪数書

改差上候様仕度候間、右書付札御下ケ被下候

様仕度、此段奉願候、以上、

八月廿七日

岡嶋上野大掾

一、小御所

一一

一一

一一

一、同南廊下口

一一

同北常御殿西江折廻り御廊下

壹間半
四拾貳間半

同所方常御殿東江折廻り御廊下

壹間半
三拾間半

此坪百貳拾九坪、

同常御殿西江折廻り御廊下

東側南之方壹間半杉戸ニテ小御所北庇取合、次二

貳拾貳間之間タ中シキイ戸貳、障子壹、下ハメ下カへ、

次二壹間半ヤリ戸ニテ常御所東江折廻り廊下江取

合、次二八間半目ニテ東江折廻り北之方ニテ壹間半ま

有、残七ま共中シキイ戸貳、障子壹、下ハメ下カへ、

西側三拾四間半、南之方貳間ノハメ、次二壹間之所ヤリ

戸貳、次七間半間タハメ、次二壹間半ヤリ戸四、水鳥間二

┌ (76才)

取合、次二貳間半遣戸四、八景之間取合、次二壹間半之処

遣戸北縁座敷取合、次五間半中敷居戸貳、セウシ壹、

次二壹間半ハメ、次二遣戸貳、御献之間二取合、御献間方間

半北東西ニヤリ戸貳枚立、遣戸方北江拾間ノ間タ九まニテ

ハメ、夫方東江折廻り、南側九間ノ内壹間半之間タ貳尺

余南之方江出張、壹間半余之処貳タまニテ、東側北之方

杉戸ニテ、常御殿南庇江出ル、同南之方ハ妻戸ニテ常

御殿南御縁江出ル、貳尺余之処、内ハメ外カへ、南側東ノ方

ニテ壹間半之ま貳まニ成、残り壹間宛何レも中シキイ

戸貳、セウシ壹、下ハメ下カへ、

北側東ノ方壹間半杉戸、次二五尺計妻戸有、東落

縁へ出、次六間半小ま半ハメ、次二壹間半ヤリ戸東西建

付、常御殿西側柱式間半目下々道有、御献ま方北江式

間目下々道有、水鳥之間方南江式間目下々道有、

同常御殿東江折廻り御廊下

南側貳拾三間、東方ニ而壹間半之ま貳タま、残り

壹間ま何レも中シキイ戸貳、障子壹、北側貳拾壹

間半、東之方ニテ壹間半之ま壹トま有、残り壹間ま

何レも内ハメ外カへ、北江折廻り、

東側九間内南之方壹間半戸貳、セウシ壹、北之方式タ

ま中敷居戸貳、セウシ壹、次二四間半余之処内ハメ外カへ、

北之方東側御縁江出、妻戸有、西側七間半、南之方四ま、

内ハメ外カへ、

北之方三ま中敷居戸貳、セウシ壹、次五尺計妻戸

有、南御縁へ出、北之方常御殿落長押之間取合

ヤリ戸貳、セウシ壹、南側方五間半目二東西二遣戸

└ (76ウ)

夕ツ、南東角方七間目下々道有、東南角方

四間半北之方二下々道有、

一、常御殿梁行拾壹間半
桁行拾四間

西御縁座敷南取合共壹間半
拾貳間半

南指出壹間半
三間

但七尺ま、

此坪貳百拾三坪六分八厘、

一、同御黒戸江御廊下壹間
貳拾四間半

御物置壹間半
三間

此坪貳拾九坪、

一、御廁取合縁共壹間
貳間半

御小用所通縁共壹間半
貳間半

此坪三坪七分五厘、

一、仙洞御所御廁御小用所壹間
貳間

女院御所御廁壹間
壹間

取合通縁壹間半
四間取合御廊下壹間
六間半

此坪拾壹坪五分、

一、御湯殿貳間半
六間半北指出壹間
貳間

此坪拾八坪貳分五厘、

一、同北御物置壹間半
六間

此坪九坪、

一、御黒戸三間
三間東御物置貳間
四間

此坪拾七坪、

一、御涼所四間半
四間五尺

東戸袋直違間半
平均貳尺五寸

御違柵貳尺五寸
壹間西御床貳尺五寸
五尺

┌ (77才)

西御縁底間半
四間半御廁小用所五尺五寸
壹間半

折廻廊下壹間
四間半

此坪三拾坪三分四厘、

一、申口北御廊下貳間
貳拾八間

御物置壹間
三間梳之間壹間半
四間

此坪六從五坪、

一、同三口御雪隠小用所五尺
三間

通縁間半
五間

此坪四坪八分壹厘、

一、同北御物置貳間
四間

此坪八坪、

一、対屋通廊下貳間
三拾六間半

同東御物置三間
五間半

同西御物置貳間
五間

此坪九拾九坪五分、

一、表口ニテ清書削書改之儀、鹿絵図ニ写候事、左之通、

常御殿南御廊下遣戸南ハメカヘニ改事、

御黒戸御縁之事、

同御湯殿取合開キ之事、

対屋廊下北側東方拾間目戸二、障子一、踏段付事、

┌ (78才)

丈尺坪取等往反拔書

七月廿六日、

一、申口拭板間仕切方西側御築地内側迄六拾九間、但御絵

┌ (77ウ)

図二而八棗間短夕相見へ申候、

一一

一一

右之通書付御座候、其以前之義八帳面無御座相知不

申候間、御尋二付、此段申上候、御修理方

一、如左書付差出、

宝永以来御建添之分、

『天明元年十二月十五日』

一、常御殿北之方 凡壹坪半計

一一

一一

一一

八月十八日、

一、日野殿御面会、宝永・此度常御殿坪数今晚中二相糺

置、明朝差上可申旨被仰渡、則岡嶋へ申渡、

一、宝永 常御殿貳百貳拾壹坪壹分五厘、

一、此度 常御殿百八拾四坪貳分五厘、

指引卅六坪九分減少二相成候、

廿四日、

一、日野殿御面会、清涼殿・常御殿此度御造営御指

図御柱間六尺五寸間二御座候事、

右伝奏衆方申出候事、

一、同卿御面会、常御殿柱間之義被仰付候、御畳八七尺

間二御座候哉、六尺間二御座候哉之旨御尋申上候処、七尺

間之由被仰渡、尤関東へも御達し有之由被仰、御絵

図二御差支不申候哉之旨被仰候二付、御絵図二御差支

も無御座候得共、御取建之節拾間二而五尺ツ、延候由

申上、

一、常御殿柱間取・御坪取等七尺間を以坪取可致旨、

日野殿被命一一一一

一、日野殿御面会、宝永度之常御殿・清涼殿七尺間二

被成候旨御尋、此度書上宝永度之坪数七尺間二而

坪取仕候、此度之義八六尺五寸間之積二御座候由申上候処、

左候ハ、其趣ヲ以坪数書付相改候様被命、

廿六日、

一、日野殿御面会、如左進達、

宝永御造営

常御殿 但壹間七尺ま、

此坪貳百貳拾壹坪壹分五厘、

此度

常御殿 貳百拾三坪六分八厘、御有棗 七尺間、

指引七坪四分七厘此度減之、

一、日野殿御面会、如左書付進達、

坪取之義御尋二付申上候覚

一、落縁・樽縁御軒下二相成候故、建坪二相加り不申候、

併軒下樽縁二捨柱有之候歟、惣体取合縁二相成候

所、其外樽縁廊下通樽縁并柱形印二有之、又ハ

軒下二相成不申御縁等ハ坪数二相加り不申候、尤井戸

前縁其外共大樽縁廻り等坪数二相除申候、

一一

一一

右之通、前々方坪取之仕来り二御座候、此段申上候、以上、

「(79才)

八月

岡嶋上野掾

一、清涼殿――

常御殿御間七尺間御座候、

右両殿柱真取二御座候、

十月朔日、

一、大原殿御面会、内々自分御伺申、如左、

裂縁娘子張障子如何候哉、

『常御殿御上段、是迄ノ通ノ切縁ノ娘子張障子のよし、』

「(79ウ)

廿四日、

一、常御殿御ま七尺ま二付御廊下取合之所、別絵図を以御伺

申上候、

一、常御殿御ま何れも天井高明朝迄二可申上旨、勢多入来

伝達、

一、常御殿御天井高サ、如左書付土山へ相渡、

劍璽御間、夜御殿 天井高壹丈四尺三寸

御上段 同 壹丈五尺三寸

御中段 同 壹丈四尺四寸

御中段三ま并 同 壹丈三尺三寸

東御小座敷共

御下段式ま 同 壹丈貳尺八寸

右者元御殿御天井高二御座候、

一、仁和寺宮寢殿写并丈尺寸法書御出し、天井高サ可致

吟味旨被仰渡、如左書付日野殿へ進達、

常御殿御拝領のよし、

一、劍璽間 拾貳帖

折上組天井、
高壹丈貳尺貳寸八分、
緑下迄、

一、御上段 拾八帖

折上二重小組天井、廻り縁高壹丈
高サ壹丈二尺二寸八分、

一、中段 拾八帖

折上小組天井、高サ棟縁下迄
壹丈二尺二寸五分、

一、御帳間 拾貳帖

折上小組天井、高難分、

一、唐子ノ間

折上小組、廻り縁迄高サ壹丈貳尺四寸、

一、四芸間 拾貳帖

同上、

一、唐船間 拾貳帖

無折上小組天井、高サ壹丈貳尺貳寸、

一、琵琶間 拾八帖

天井同上、高難分、

一、孔雀間 貳拾四帖

無小組棟縁計大組天井、板違張、高サ難分、
床違二寸五分、下り高サ壹丈貳尺五寸、
七間廻り縁下迄平天井、

一、麝香間 六帖

同上、

十二月七日、

一、常御殿七尺ま二相成候二付、小図二朱引いたし、掛紙図并

如左書付別紙差添、岡嶋差出し、勢多へ上、

常御殿南北折廻り御廊下朱引六尺五寸間二御座候

処、七尺ま二相成候二付、北ノ方へ取合二而壹間縮相減、

南ノ方二而東ノ方へ七尺七寸五分相延、差引此所二而

御廊下壹間半
壹尺貳寸五分相増、

同西ノ方折廻り御廊下朱引六尺五寸間二御座候処、

七尺ま二相成候二付、南へ折廻り之所二而壹間縮相減、

申口拭板間廻り七尺ま二相成候而も御差支無御座候、

同取合并縁共南ノ方二而三間
壹間相延、御廊下之減下

差引壹間半
壹間相増、常御殿北御廊下七尺ま二

相成候二付、間半東へ寄、御涼所へ取合御廊下間半

東へ縮メ、取合之所間半広ク仕候得者、申口ノ間

張付二可相成候哉之所、最初御絵図之通り二而出来

可仕下奉存候、

二月十二日、

一、拾間半ヲ九ツ割壹間トス、柱図径リ六寸五分、柱寄

「(80才)

「(80ウ)

アリ、此寸法、

右九ツ二割八柱真ヨリ真迄七尺五寸八分余、

但六尺五寸間、

柱六寸五分、柱寄セ見付壹寸、見込八分計、長押五寸、

長押下端方鴨居上迄壹尺計、鴨居三寸掛才八分、

敷居式寸四分、

絹襖高サ六尺、壹枚巾三尺四寸六分計、

板敷上端方長押下端迄七尺六寸、

一、壹丈之割柱真々壹丈二而、柱内法九尺三寸五分、

但柱太サ六寸五分計、

柱寄^{壹寸}八分御絹襖巾四尺六寸七分計、

十四日、

一、御柱太サ六寸五分之時、敷居中六寸五分、御襖縁八分、溝

八分半式筋、^{四分半}又五分、両方樋バた式寸壹分ツ、

御柱太サ六寸時、敷居中六寸、御襖縁八分、溝八分半ツ、

あ七四分半、樋バた壹寸九分余宛、

右日野殿へ差上候処、御焼失常御殿・清涼殿之

御形手書付差上候様被命、如左書付上、

一、清涼殿 御柱太サ六寸五分

常御殿 御柱太サ六寸

但両御殿共御襖縁八分四方、

┌ (81才)

一、常御殿北之方 凡壹坪半計

┌

右書付御尋之由二付、大判事へ出入、尤御正絵図之分二

右之通追々相増候事、御取解減少者無之事、

一、東折廻り常御殿御廊下^{壹間半}三拾式間半

此坪四拾八坪七分五厘、

一、常御殿^{梁行拾壹間半}取合^{四尺七寸}但七尺ま、^{壹丈五寸}

此坪式百式拾壹坪壹分五厘、

一、常御殿之北御廊下^{壹間五寸}御廁小用所^{壹間}

御湯殿^{梁行式間半}御黒戸^{梁行式間半}

此坪八拾八坪八分九厘、

一、御雪隠小用所^{壹間}式間^{七間}所御廊下^{七間}

此坪拾壹坪、

一、櫛笥部屋^{壹間半}南押入^{間半}御物置^{式間}

此坪拾七坪、

一、申口方对屋へ廊下^{式間}御物置^{式間}同^{壹間半}

对屋通廊下南御物置^{壹間半}同所方北御殿へ

御廊下^{拾三間}同^{壹間}

此坪百壹坪九分壹厘、

八日、

一、小御所方常御殿江折廻り御廊下

一、常御殿

一、同西南へ折廻御廊下

一、同北御黒戸へ御廊下并東御物置

一、御黒戸

┌ (81ウ)

六月二日、

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

一、御湯殿

一、御廁御小用所

一、同南御物置

右之分檜皮葺御座候哉、

一、申口并南取合廊下

一、同对屋江折廻廊下

一、同北御物置并梳之間

一、院御廁御小用所

一、同取合御廊下

一、御湯揚所御物置式个所

一、对屋通廊下南御物置式个所

右之分式分木賊葺二御座候哉、

九日、

一、对屋通廊下之内、上家方御湯揚所北之方御物置

際迄中敷居戸障子二木格子御座候、其外御

廊下廻り、昨日申上候通り、中敷居戸障子御座候、

此段申上候、

一、御廊下向御絵図ニ中連子与御書付御座候、惣体宝永

已後御在形、中敷居戸障子二御座候二付、右之通可仕哉、

尤对屋通廊下之内、对屋上家方御湯揚所北之方

御物置迄、中敷居戸障子木格子二御座候二付、右之

通相認可仕哉、

右御伺申上候事、右伺之通御治定

御造管承知帳

一、常御殿

小御所

右兩御殿簀子高サ三尺式寸、此通御治定被仰出候

間、壹寸式分計二致し、小御所并北西南等取付御

廊下を引添可上事、

但右御廊下方小御所江之所段有之候故、其所二箱段

一級引添可上事、

四月晦日

一、常御殿南御廊下北取合

一、同北御廊下南取合

右个所之分、御有来之通唐破風出来候積、

五月六日

一、御涼所檜垣之図被出、檜垣曲節等恰好能付替

可入御覽旨承知仕候、猶跡方可申上候、

六月九日

一、常御殿

小御所

御襖定木金物

常御殿

常御殿

御涼所

御棚小襖引手

渡殿

右回縁已前金物御形職方之者所持有之候ハ、可申事、

若御形不有合候ハ、委彩色絵ヲ以可申上事、

「(82才)

「(82ウ)

右之通被仰渡承知仕候、猶職方之もの相糺、明日可申上候、

八月廿二日

- 一、常御殿已下御襖向金物之義、職方相糺申上候処、先
繪形仕立、明日可差上旨被仰渡承知仕候、職方へ可申付候、

八月廿三日

「(83才)

- 一、禁裏御殿向御屋根所々獅子口棟瓦三ツ頭・足元
とも御改、表菊二付候様申付候処、足元与鱒瓦之分ハ
往古方造り花二仕立来候旨、瓦師触頭申聞候間、
相違も有之間敷候得共、別紙絵図之通可然候哉、
為念御懸合申候事

十月

- 右御普請方方伺書面之趣相糺可申上旨承知仕候、
猶明日可申上候、

- 一、御涼所御違棚

御小座敷御違棚

右御金物御有形赤銅銀之筋等入候御金物有之候
哉、其外二も右体之御金物等有之候哉、飭方相調
委細ニ可申上之旨、被仰渡承知仕候、猶職方之もの
相糺、明日可申上候、

十一月廿三日

- 一、常御殿二重床力之所ハ、野天井之上二床コ引並之
趣御有来右之通候哉、相糺可申上事、
右之通被仰渡承知仕候、猶相糺可申上候、

四月十六日

御造営窺帳

- 一、御常御殿御縁高サ、石居方御縁板上迄三尺式寸

御階五級

┆

┆

右木子播磨方書付取之、別紙差上申候、

四月廿八日

- 一、御殿向板壁之義相糺候処、御床力上計二而御床力下二
板壁ハ無御座候、都而竹下地壁二而御座候、既二御有
形天神妻戸下々壁度々損二付、御表方御繕被仰
渡候故、竹下地壁二相違無御座候、

五月廿八日

- 一、常御殿御小座敷御有来御床框大サセイ四寸五分
上ハ式寸八分
同御柱大サ六寸四分
武辺方御伺通框大サ三寸八分、御有来框二相当仕候
得者、七分少ク御座候、

西六月

- 一、常御殿御襖

御定木間金物

- 一、同

御定木切金物

- 一、常御殿

御違棚間金物

- 一、同御小襖

「(84才)

「(83ウ)

御引手

一、渡殿御小襖

御引手

一、御涼所御小襖

御引手

右職方所持仕候分仕立出来仕候二付、今日差上申候、

八月晦日

一、常御殿・渡殿等御有形之御襖金物等職方所持

仕立仕差上候処、右差上候金物御普請方へ御廻し二

相成候旨、職方之者差支之筋も無之哉可相糺候旨、

昨日再心被仰渡、則職人筋師権兵衛呼寄申

渡候処、差支之義も無之旨書付取之候二付、別紙入

御覽候、

九月一日

一、去三日常御殿・御涼所等押入之内御棚有形木品

万端委細可申上旨被仰渡、木子播磨相糺候処、如左

書付ヲ以申聞候二付申上候、

劍璽之御間中敷居ヨリ上御棚一重有、

但中敷居方御棚下迄壹尺五寸三分、

御棚中壹尺五寸、同厚サ壹寸三分、木品櫬、

中敷居高サ、地板方敷居下迄三尺壹寸五分、

中敷居厚サ、壹寸五分、

右之外并御涼所等御棚相知不申候、

西十月

木子播磨大掾

右之趣二付於修理職も相調候処、常御殿御押入之内御

棚之義拜見仕候義無御座候二付、木品御模様等相分不申候、

「(84ウ)

御涼所之義八天明六年御手沙汰二而御修覆御座候

節、新造東七帖之間東方御袋棚、中間半、奥行一小丈、中棚二重、

上高サ内法九寸、下明キ式尺三寸計、地棚櫬、中棚赤杉、

右之通御座候、御涼所二八御押入八無御座候、依而此段

申上候、

十月十四日

一、御違棚卷金物寸法之義、御有形卜相違有之候様

思召候二付、吟味可仕旨被仰渡、則木子播磨相糺候処、御

有形二相違無御座候旨申聞候、別紙豎金物相除候写

図被仰付引立差上候、依之御有形之有無可申上旨

被仰渡、則木子播磨相糺候処、有無之義覺不申候旨

申聞候二付、此段申上候、

十一月廿三日

一、御違棚金具、御有形職方筋師相糺候処、渡殿・御涼所

御違棚金物御同様之旨二而、則御手本差出候卷金物

者、右御手本漆差之所計二御座候、御小座敷之分者、先

達而差上置候、常御殿御棚金具之通二而、漆差者

無御座候旨申聞候二付、此段申上候、

但御棚金具之分、何も金・銀・赤銅等之筋者無御座候、

尤卷金物座三枚入申候内、式枚者金減金、壹

枚者銀減金之旨申聞候二付、是又申上候、

右別紙之通二御座候二付、則御有形金物壹并卷金

物之図相添差上申候、御違棚御手本之図二枚、是又

返上仕候、

十一月廿五日

一、御涼所御腰障子、腰高サ壹尺五寸、入子障子之積、

「(85才)

裏舞良吹寄二仕立候絵図一枚出来二付差上申候、

正月十七日

一、元御殿・常御殿・夜御殿計、二重床力下夕板檜

釘打、上八板桐板釘目無之与奉存候、

戊四月 木子播磨大掾

右相糺書付取之、別紙差上申候、

一、常御殿二重床力之処八野天井之上三床口引並候趣、

御有来之義相糺可申上候旨被仰渡、木子相糺候処、別

紙書付差出候二付差上申候、

御屋根御柱御床御天井 个所付

一、常御殿

右御屋根檜皮葺、

一、御黒戸東御物置

一、御東司廊下御物置

一、同西御廊下并御東司

一、梳之間并御物置

右御屋根式分木賊葺、

一、御涼所

右御屋根壹分半木賊葺、

〔御有形式分木賊〕

一、御幸御廊下

右御屋根上柿葺、

一、新御廊下

一、御常御殿

一、申口

一、御東司廊下并御東司

一、御湯殿

一、御涼所

一、御黒戸

右檜御柱

一、御幸廊下

一、御黒戸東御物置

一、御東司廊下西御物置

一、对屋廊下東御物置并梳之間

右栴御柱

平地ヨリ〔板敷上端迄〕寸法

一、御常御殿

劍璽御間

御上段

御清間

御寢之御間 〔四尺八寸六分〕〔五尺〕
〔コノ文字、抹消サル〕

御中段

御小座敷二夕ま

御一二之御間

御次之間 〔四尺式寸式分〕〔三五〕

御下段

御下段

┌ (85ウ)

┌ (86才)

申ノ口二夕ま 四尺^式三分
 東西北御縁座敷 三尺七寸^九八分
 南庇 三尺五寸^七四分

御縁高サ 三尺^式寸

申口

女孀詰所 三尺

男居

取合并御物置

御東司御廊下

御物置^式个所 式尺七寸^九六分

御涼所

御湯殿 式尺五寸^七四分

同御上段 三尺^四式寸^七四分

御黒戸 三尺五寸^七六分

一、常御殿西御縁座敷 棹縁 修『○』化粧屋根裏

一、御東廊下 棹縁 修『○』猿保 中 棹縁

一、御東三个所 平縁 修『○』猿保

一、御涼所廊下 平縁 修『○』棹縁

一、対屋廊下 棹縁 修『○』猿保 中 棹縁

一、御幸廊下 棹縁 修 平縁

┌ (86ウ)

一、下廊下 平縁 修 中『○』棹縁

(○八七丁裏ヨリ八八丁裏マデ、空)

小御所

造内裏坪取御間敷御建具御絵様諸式寄帳

一、小御所梁行七間
桁行拾式間

此坪八拾四坪、

御上段 拾八帖

二重折上ヶ小組天井、東側三まニテ襖式枚宛、西側同断、

南襖四ニテ、御中段取合北側三間ニテ襖式枚宛、

御中段 拾八帖

小組天井、東側三まニテ襖式枚宛、西側同断、南御下段へ取合

ニテ襖四、北側八御上段、

御下段 拾八帖

組天井、東側三まニテ御襖式枚宛、西側同断、南側襖四枚、

北八御中段、

東廂拾式間ニ
式間半拭板敷化粧屋根裏

東側両面障子式宛、南北ニテ壹間半ま有、其余八壹

間ま、

西側御上段・御中段・御下段ニ取合、南北壹間半之間ニテ布

障子式枚宛、南北廂ニ取合、

┌ (87才)

西廂^{九間} 拭板敷化粧屋根裏、東側御上

「(89才)

段・御中段・御下段二取合、

西側北之方^{壹間半}杉戸二、御拝道廊下江出、次^壹

間半格子戸、次二六^{間半}両面蔀障子^{二枚宛}、

南八杉戸^{二枚}ニテ南庇江取合、

北八杉戸^{二枚}ニテ北庇江取合、

南廂^{四間半}

東八東庇取合布障子、

西側八唐戸、平軸・小柱有、

南側東^方三^間之間^二両面蔀障子^{二枚宛}、次二^{壹間半}

唐戸、平軸・小柱有、

北側三^間壹^間ト^ま襖^{四枚}ニテ御下段取合、次二^{壹間半}之

杉戸^{二枚}ニテ西庇取合、

北廂^{四間半} 拭板敷化粧屋根裏

東側八布障子^{二枚}ニテ東庇^{二枚}取合、

西側八杉戸^{二枚}ニテ御廊下江取合、

南側三^間之間^二夕^襖ニテ御上段^{二枚}取合、次二^{壹間半}ニテ

杉戸^{二枚}西廂江取合、

北側西之方^{壹間半}、跡ハ^{壹間}ま^{ニテ}両面蔀障子

二枚宛、

東簀子木口縁御中之通り二五^級之階段有、

西簀子南之方小御所南廊下西取合、廊下之角

御縁巾程四方二出、

南簀子東庇之通り二五^級之階段有、何レ茂高欄・

登り高欄等有之、

「(89ウ)

西取合廊下^{壹間半}

同北常御殿西へ折廻り御廊下^{壹間半}

同所^方常御殿東へ折廻り御廊下^{三拾間半}

此坪百^式拾九坪、

南廊下

東側北之方ニテ妻戸有、南簀子へ出、次二三^間半余之処

中敷居戸^式、障子^壹、下ハメ下カへ、

西側北之方ニテ妻戸有、次二三^間半余之処、内ハメ外カへ、

南側拾八^間廊下江出、無仕切、

北側小御所南庇唐戸、拾八^間廊下^方北へ^式間目下々

道有、

西取合廊下

東側八小御所南庇唐戸、

西側八紫宸殿北廊下へ出ル、ヤリ戸、

南側八西ヨリ七^間半余中シキイ戸^式、障子^壹、下ハメ下カへ、

次二五^尺計妻戸、

北側西ヨリ七^間半余内ハメ外カへ、次二五^尺計妻戸、

紫宸殿北廊下^方東へ五^間目下々道有、

同常御殿西へ折廻り御廊下

東側南之方^{壹間半}杉戸ニテ小御所北庇取合、

次二^式拾^式間之間^二夕^襖中シキイ戸^式、障子^壹、下ハメ下カへ、

次二^{壹間半}ヤリ戸ニテ常御所東へ折廻り廊下へ

取合、次二八^間半目ニテ東へ折廻り北之方ニテ^{壹間}

半^間有、残七^間共中シキイ戸^式、障子^壹、下ハメ下カへ、

西側三拾四^間半南之方^式間ノハメ、次二^{壹間}之所ヤリ

戸^式、次二七^間半間タハメ、次二^{壹間半}ヤリ戸四、水鳥間二

「(90才)

同南廊下^{壹間半}

取合、次二式間半遣戸四、八景之間取合、次二壺間半之処

遣戸、北縁座敷取合、次五間半中敷居戸式、セウシ壺、

次二壺間半ハメ、次二遣戸式、御献之間二取合、御献間方

間半北東西ニヤリ戸式枚立、遣戸方北へ拾間ノ間タ

九まニテハメ、夫方東へ折廻り南側九間ノ内壺間半之

間タ式尺余南の方へ出張、壺間半余之処式タまニテ、東

側北之方杉戸ニテ、常御殿南庇へ出ル、同南の方ハ妻

戸ニテ常御殿南御縁へ出ル、式尺余之処内ハメ外カへ、南

側東ノ方ニテ壺間半之ま式ま二成、残り壺間宛何レも

中シキイ戸式、セウシ壺、下ハメ下カへ、

北側東ノ方壺間半杉戸、次二五尺計妻戸有、東御

縁へ出、次六間半小ま半ハメ、次二壺間半ヤリ戸東西

建付、常御殿西側柱式間半目下々道有、御献ま方

北へ式間目下々道有、水鳥之間方南へ式間目下々

道有、

同常御殿東江折廻り御廊下

南側式拾三間東方ニ而壺間半之ま式タま、残り壺間ま

何レも中シキイ戸式、障子壺、北側式拾壺間半東の方」(90ウ)

ニテ壺間半之ま壺トま有、残り壺間ま何レも内ハメ外

カへ、北へ折廻り東側九間内、南の方壺間半戸式、セウシ

壺、北之方式タま中敷居戸式、セウシ壺、次二四間半余之

処内ハメ外カへ、北之方東側御縁へ出、妻戸有、西側七間

半、南の方四ま内ハメ外カへ、北之方三ま中敷居戸式、セウシ

壺、次五尺計妻戸有、南御縁へ出、北之方常御殿落長

押之間取合、ヤリ戸式、セウシ壺、南側方五間半目二東西二

遣戸タツ、南東角方七間目下々道有、東南角方四

間半北之方二下々道有、

丈尺坪取等往反拔書

一、小御所梁行七間
桁行拾式間

御柱外側五寸八分四方
内側五寸四分四方

長押 七イ四寸六分

鴨居 巾五寸 七イ式寸式分

敷居 巾五寸八分ト五寸四分ト 七イ式寸四分

鴨居打才内法 高六尺式寸

御襖縁 八分四方

御上段 前側

御襖高鴨居打才内法 六尺六寸六分

横壺間ま之所柱内法 五尺九寸六分

同三間ま之所柱内法 壺丈八尺九寸六分

同布障子之所柱内法 九尺壺寸九分

」(91才)

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

一、小御所梁行八間半
桁行拾壺間半

此坪九拾七坪七分五厘、

一、同南廊下壺間半七間
北廊下九間 御物置三間雪隠
五間

小用所八尺縁廊下八間半
八尺縁廊下八間半

此坪四拾八坪八分三厘、

六月二日、

一、御学問所

小御所

右床力高サ敷居上端迄四尺七寸式步ニ相成申候、尤

一、御上段者右之外かまち四寸六分相増可申儀ニ奉存候、

一、御学問所 小御所

一、御学問所 小御所

右御床力高サ四尺五寸、

八月八日、

一、小御所

一、同取合

一、同紫宸殿・小御所廊下へ取合御廊下

一、小御所方常御殿へ折廻り御廊下

一一

一一

右之分檜皮葺御座候哉、

「(91ウ)

引添可上事、

四月晦日

一、一一一一

小御所南御廊下・西御廊下共取合、右御有来唐破風

無御座候ニ付、此度も無之積相心得罷在候、

右式通御下ケ、落手承知仕候、相糺明日可申上候、

五月六日

一、常御殿

小御所

御襖定木金物

一一一

右回祿已前金物御形職方之者所持有之候ハ、可申事、

若御形不有合候ハ、委彩色絵ヲ以可申上事、

右之通被仰渡承知仕候、猶職方之もの相糺、明日可申上候、

八月廿二日

一、常御殿已下御襖向金物之義、職方相糺申上候処、先

絵形仕立、明日可差上旨被仰渡承知仕候、職方へ可申

付候、

八月廿三日

一、小御所廂疊被敷候ハ、何帖御入用候哉、

右相糺書付可上旨、尤小御所廂御疊之義者、四方書

分ケ可上旨、被仰渡承知仕候、

十月十九日

「(92才)

御造営承知帳

一、常御殿

小御所

右両御殿簀子高サ三尺式寸、此通御治定被仰出候

間、壹寸二分計ニ致し、小御所并北西南等取付御廊

下を引添可上事、

但右御廊下方小御所江之所段有之候故、其所ニ箱段一級

御造営窺帳

一、小御所御縁高サ留書等無御座覺不申候二付、寸尺難申上候得共、凡四尺計与奉存候、御階五級、

右木子播磨方書付取之、別紙差上申候、

四月廿八日

一、小御所

東廂六拾貳帖半 織高麗二重縁

西廂貳拾七帖 右同断

南廂拾三帖半 右同断

北廂拾三帖半 右同断

右之通御座候、以上、

西十月

一、小御所取合御廊下江刀自通縁開戸手摺付札之

絵図壹枚、

十一月十五日

一、参内殿・小御所上段御框之義二付、木子播磨相糺、

書付差出、如左、

元御殿

参内殿――

小御所御上段框之義、元御殿檜木地と奉存候、

但御普請方御伺槻摺漆之義、槻杢目木地蠟色

之類二御座候、

戌二月

「(92ウ)

御屋根御柱御床御天井 个所付

一、小御所

――

――

右檜御柱、

平地ヨリ板敷上端迄
畳上端迄寸法

一、小御所御上段高サ 四尺四寸八分六

同御中段
御下段 四尺貳分

同廂 三尺七寸八分九

御縁高サ 三尺貳寸

押紙、小御所地上ヨリ御上段上八迄四尺四運八分、

但清涼殿ヨリ貳寸八分高シ、

一、小御所

上段 二重折上 中修 小組 中修 二重折上小組

中段 小組 中修 猿保 中修 格天井小組 『板違』

下段 組天井 中修 猿保 中修 格天井板違

一、小御所方水鳥間東迄

御廊下棹縁 中修 屋根裏 中修 同断

一、水鳥間東方北

御廊下棹縁 中修 猿保 中修 猿保

「(93ウ)

御学問所

丈尺坪取等往反拔書

一、日野殿御面会、宝永之度之御取建之御殿、此度御造営

「(93ウ)

無之个所書付老通上、

此度御取建無御座候个所

御記録所 一一

御学問所 此坪七拾六坪、

一一

一一

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

一、御学問所梁行八間
桁行九間半

此坪七拾六坪、

一、同南取合廊下老間半
式間 御廁御小用所老間半
式間

此坪五坪式分五厘、

一、東折廻り常御殿御廊下老間半
三拾貳間半

此坪四拾八坪七分五厘、

一一

一一

右者宝永五子年天明八年正月晦日炎上迄坪数、

「(94才)

六月二日、

一、御学問所

小御所

右床力高サ敷居上端迄四尺七寸式步二相成申候、尤

一 鰻頭形高サ壹尺三寸程二相見へ申候、

御上段者右之外かまち四寸六分相増可申儀二奉存候、

御学問所 小御所

右御床力高サ四尺五寸、

御三間

丈尺坪取往反拔書

一、日野殿御面会、宝永之度之御取建之御殿、此度御造営

無之个所書付老通上、

此度御取建無御座候个所

御記録所

御学問所

御三間御殿并御献之間共

此坪六拾貳坪式分五厘、

一一

一一

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

一、御三間御殿梁行五間半
桁行九間半 御献之間式間
五間 南御廊下老間半
八間

此坪七拾四坪式分五厘、

一一

一一

右者宝永五子年天明八正月晦日炎上迄坪数、

「(95才)

「(94ウ)

表方雜々

造内裏坪取御間數御建具御絵様諸式寄帳

一、虎之間 鶴之間 桜之間 板廂共三間半拾間

東板廂志間五尺五寸

北取合廊下志間半六間

此坪四拾八坪九分式厘、

虎之間 式拾壹帖

東側三ま両面蔀、西側鶴之間取合、

南側式々ま東之ま遣戸式、内張付障子壹、西之間同断、

東之ま縁外二沓脱有、西之ま三級之段有、北側式々ま共遣戸式、

内張付障子壹、

鶴之間

東側八虎之間取合、西側八桜之間取合、

南側八式々まニテ式間共遣戸式、内張付障子壹宛、

北側八南側同断、

桜之間

東側八鶴之間取合、西側八式々まニテ式ま共遣戸四、内張付障子式宛、

南側八式々まニテ式ま共遣戸式、内張付障子壹宛、

北側八式々まニテ式ま共内張付外壁、 『(96才)』

東板廂

東側八桜之間取合遣戸、西側八明放シ、

南側八鳴板、北側八羽目外壁、

北取合廊下

東側南之方間半内ハメ外壁、中ハ妻戸、凡五尺計北小間半、

内ハメ外壁、

南側虎之間・鶴之間取合、

北側東之方式間内ハメ外壁、志間半ハ御車寄廊下へ

取合、西式間半ハ上連子木格子障子、下ハメ下壁、

西側同断、

一、御車寄梁行三間桁行四間

南廊下志間半八間

北廊下志間半七間

此坪三拾四坪五分、

御車寄

敷石内法共四間、敷石南北 (アキマ、)

東側内ハメ外壁、

西側三間遣戸四、

南廊下

東側内ハメ外壁、西側上木格子障子、下ハメ下壁、

南側八虎之間・鶴之間北廊下へ取合、北側ハ御車寄、

北廊下

東側内ハメ外壁、西側上木格子障子、下ハメ下壁、

南側御車寄、北側北廊下取合杉戸式、杉戸建付、

柱方南へ三本目之柱方四本目之柱迄志間之間下々道有之、

『ハシ廊下也、』

一、同北廊下方御詰江折廻り御廊下志間半四拾六間

此坪六拾九坪、

東之方御詰廊下へ取合戸式、北側五間半之処東之方ニテ

志下間御物置へ取合戸式、障子壹、南側四間ハメ南北

折廻り、東側八間内ハメ外壁、西側五間半中敷居戸

『(96ウ)』

式、障子巻、下ハメ下カへ、五間半目カ巻間之処戸式、北間半之処遣戸式、

同六間ハメ、同巻間半之処大杉戸式、同式間ハメ、同八間半ニテ

七間障子式、同式間半式タマ中敷居戸式、障子巻、同巻

間杉戸式、清涼殿北取合廊下へ取合、夫カ西之方中敷居

戸式、障子巻、北側東方六間之間中敷居戸式、障子

巻、東第一之間ニ下々道有、第七之所巻間半遣戸式、内々番

衆所へ取合第七・八之処ハメカへ、是所下々道有之、次間半開戸

有、外様へ出、次五間四まニテ外様小番衆所へ取合、次間半之処

ハメ、次十間半之処八ま戸式、障子巻ニテ、非藏人部屋へ取合、

次二三間之処式まニテ、内ハメ外カへ、西行当上木格子障子下ハメ

下カへ、

一、御拝廊下式間
長延三拾八間

此坪七拾六坪、

南側拾間半目ニテ北へ式間折廻り、ま拾七間東之方ニテ

間半北へ寄、御廊下巻間半巾二成、小御所取付迄八間半、

南側西方第一之ま巻間半遣戸、ま式拾六間半□中敷居

戸式、障子巻、下ハメカへ、次ニ巻間杉戸ニテ、紫宸殿取合

廊下へ出、次七間半余之処中敷居戸式、障子巻、下ハメ

下カへ、次ニ小御所西ノ縁へ出、妻戸有、

北側八間半目ニテ北へ折廻り、北側西方折廻り、北側ニテ巻間

半ニテ、式タマ目迄何レもハメ、次ニ巻間半大杉戸式、次ニ六間

之間ハメ、次ニ巻間半遣戸式、次ニ四ま遣戸式、内ハリ付セウシニ、

麝香間、次ニ巻間半遣戸式、次ニ巻間式タマ遣戸二、御

色紙部屋取合、次ニ七間半ハメ、次ニ巻間半杉戸式、廊

下出カ、東行当り杉戸式、西行当りハメ、紫宸殿北

廊下カ西へ九間目ニ下々道有、

一、紫宸殿カ御拝廊下江取合御廊下巻間半
拾八間式尺五寸

此坪式拾七坪五分八厘、

六間半之間拭板敷、東側四間之間高欄、次ニ巻間半遣戸

式、拾八間廊下出、西側ハメ、南ハ紫宸殿北之簀子取合、

北ハ遣戸式ま踏段有、北拾式間之間タ東側御拝廊下

取合カ南江七間之間タ内ハメ外カへ、夫カ南巻間半遣戸式、

小御所東側南之廊下取合、夫カ南四間半五ま内ハメ外

カへ、

西側拾三間中敷居戸式、セウシ巻、下ハメ下カへ、

紫宸殿簀子カ八間目下々道有、

一、御詰御番所五間半
九間半

南取合落長押間納戸共式間
三間

湯殿巻間半
式間

式口雪隠小用所取合縁共巻間半
式間

非藏人詰所式間半

此坪七拾坪五分、

一、水鳥間 六帖

東側巻間半遣戸式、内ハリ付障子巻、西側ハリ付

南側式間四枚折遣戸、内ハリ付障子式、北側フスマ四、

一、八景之間 拾式帖半

東側式間半遣戸四、内張付障子二、

西側式間四枚フスマ、林和靖間取合、南方間半ハリ付

南側フスマ四、水鳥間取合、西之方ニテ間半ハリ付、

北側式間半遣戸四、内ハリ付障子式、

一、議奏候所 八帖

東側沓間半奥行間半押入フスマ四、北之方間半ハリ付、
「(98才)

西側式間四枚フスマ、近習番衆所取合、

南側式間四枚遣戸、内ハリ付障子式、

北側式間四枚フスマ、林和靖間取合、

一、林和靖間 八帖

東側式間四枚フスマ、八景間二取合、

西側式間四枚フスマ、錦鶏間二取合、

南側式間四枚フスマ、議奏候所取合、

北側式間四枚遣戸、内ハリ付障子式、

一、近習番衆所 拾貳帖

東側式間四枚フスマ、議奏候所取合、

西側南方沓間式枚フスマ、落長押間二取合、北方沓間ハリ付、

南側三間四枚遣戸、内張付障子式、

北側三間四枚フスマ、錦鶏間二取合、

錦鶏間 拾貳帖

東側式間四枚フスマ、林和靖間二取合、

西側式間張付、

南側三間四枚フスマ、近習番衆所二取合、

北側三間四枚遣戸、内張付障子式、

物置 式帖半

東側式間押入沓間半式枚戸、内廻リハメ、

西側戸四、障子式、

南側押入沓間半戸式枚、内廻リハメ、

北側戸四、障子式、

長四帖物置

東側ハメ、西側戸式、障子沓、南側ハメ、北側ハメ、

落長押之間 拾貳間

東側北ノ方沓間式枚フスマ、近習番衆所江出ル、南ノ方式間四枚

戸、障子式、

西側沓間半式まニテ戸二宛、

南側式間四枚フスマ、納戸取合、北側張付、

納戸 四帖

東側沓間式枚戸、障子沓、

西側ハメ、南側ハメ、

北側フスマ四、落長押之間二取合、

湯殿 板間

上り場沓帖半、東西ハメ、南側光敷居、北側戸四、障子式、納戸

南縁へ出、沓間半四方湯、

南東之方石間戸式枚、西方ハメ、

東側石間北柱方上り場南柱迄中木格子障子、下壁、

西側ハメ、

雪隠式口小用所沓口

入口戸南側内ハメ、外力へ、中仕切ハメ、西側中木格子障子^子、下壁、

縁南之方開キ、

長小便所式間半上木格子障子式宛、南之方ハメ壁、折廻リ高

塀

一、議奏衆用所

雪隠式个所、小便所式个所、

○指図アリ

一、御認北縁座敷^{九間半}沓間半式拾八帖

東ノ方遣戸二、障子沓、小御所方常御殿江之廊下江出、

西ノ方戸二、御話廊下江出、

「(99才)

南側東ノ方式間半ヤリ戸、八景間取合、次式間四枚遣戸、林和靖間

取合、次二三間四枚遣戸、錦鷄間取合、次二間半ハメ、次二戸四、障

子式、四帖半物置取合、

北側東之方式間四枚腰障子、次二式間四枚コシ障子、次二式間半

腰障子、何レモ縁江出、次二式間光敷居、非藏人詰所取合、次間半

ハメ、

一、非藏人詰所 拾帖

東側式間半コシセウシ四、西側間半式間押入戸四、内廻リハメ、

南側又メシキイ、北側式間戸四、障子式、式間半余落縁有戸四、

ハシリ有、

┌ (99ウ)

『議奏便所之事歟、』

一、同南縁廊下七間

北之方御雪隠小用所五尺五寸

南之方御雪隠小用所三尺五寸

此坪拾坪壹分五厘、

一、御献之間同御用場御物置共

三間

此坪拾八坪、

一、御拝御廊下北御物置四間

北取合拭板廊下九間半

御色紙部屋式間

此坪式拾壹坪五分、

一、御拝御廊下方表之口迄取合廊下式拾貳間

北之方西之指出四間

此坪三拾五坪、

一、麝香之間貳間

御雪隠五尺四尺五寸

御小用所六尺六尺

通縁三尺七寸五分

此坪拾坪壹分七厘、

一、同北部屋式間

西押入間半

同式下小間

此坪五坪七分五厘、

一、同北御物置式間半

雪隠四尺

通縁間半

此坪五坪四分、

一、伝奏部屋非藏人休所共三間

雪隠小用所通縁共四尺四間

此坪拾五坪八厘、

一、内々小番衆所四間東指出式間南取合式間半

東取合板間縁共式間半雪隠小用所通縁共式間

此坪式拾六坪八分壹厘、

一、外様小番衆所三間東指出式間雪隠小用所縁共式間

通縁三尺五寸

此坪式拾貳坪三分、

一、法中用所四尺通縁三尺

此坪壹坪六分八厘、

一、端非藏人部屋拾貳間

北取合物置茶所非藏人口共三間

東縁廊下六間湯殿式間半同石之間間半

┌ (100才)

┌ (100ウ)

北物置式間三間 雪隠縁共老間八尺 小用所通縁共老間四尺

此坪七拾五坪九分、

一、伶人楽屋三間九間半 指出式間三口 雪隠三尺五寸三間半 樂器

蔵三間半六間 間庇老間式間

此坪五拾六坪四分九厘、

一、表口ニテ清書削書改之儀、鹿絵図ニ写候事、左之通、

虎間東渡廊之西ニ唐戸付、同簀子仕切改正、

御詰議奏衆庭南下々道東江寄、

同高塀南へ付引戸有、

外様御番所用所中連子止、

法中并西力へ、南間戸二、

内々御番所取付東縁南側明放、納戸北戸ニ障子一、

内ハリ付、

車寄切石上連子、

御献間東廊下北ノ方遣戸二、

同間九帖ニ夕間ハメ柱直シ之事、

同所物置拾八帖ニ相成事、

非蔵人物置裏用所削、

御詰用所先板塀之事、戸付之事、

一、日野殿、勢多へ御面会ニテ、左之通書付御渡――

虎間北廊下良角ハメ壁ニ改候事、

外様小番衆所水船削之事、

七月十八日、

一、御車寄方御築地迄長橋老間、

廿四日、

一、勢多方如左書付伝達、上野掾へ相渡、

御詰廊下西ノ方南北拾間之所、七間余ト相見へ候義如何、

廿六日、

一、口向御指図表方御下知之通相改差出、

一、非蔵人詰所北高塀方南御築地内側迄九拾七間半、

但御絵図茂同間数ニ而御座候、

一、如左書付差出、

宝永以来御建添之分

御詰北ノ物置 凡五坪八分計

〃 南物置 〃 拾坪計

『宝曆十三年

天明四年卯五月建足、』

日御門北ノ方修理職物置 三拾坪計

八月二日、

一、伶人楽屋御築地へ引付御座候、御図面之通ニ而八屋根水取

難仕候ニ付、御築地之内老間明ケ、西へ引直シ申度候事、

『右伺之通御下知、』

一、御献之間内奥之方ニ而老間減し、物置ニ而間半増有之候

二付、小絵図ヲ以伺之処、御間違ニ而、御献之間中仕切真中ニ

仕東西一間増、物置ニ而間半減し候様被仰出、

一、表増坪之義ハ棟内ニ御座候処、坪取難仕候故、宝永度之

見合ニ相成間敷哉ニ奉存候、此度表新規御造営之坪

数之内へ何角一緒ニ合惣坪幾坪、且宝永之坪数合

丈尺坪取等往反拔書

「(101才)

「(101ウ)

幾坪卜書付、増減差引書付差上可申旨申上候処、下書入御覽候様被仰渡、則差上、下書之通り御治定、

一、日野殿御面会、此度御造営坪取増減書奉書認可上、

則閑東へ被遣候間、急々出来、且又御縁廻り御坪数二不入、

廻廊等も柱外者坪数二不入之由、先達而棟梁申聞候間、

其趣書付ヲ以可申、宝永ニ御造立有之候処、此度之方

無之个所坪数等書付ヲ以可上旨被仰渡、則上野掾申渡、

一、日野殿御面会、如左書付進達、

坪取之義御尋ニ付申上候覚

落縁・樽縁等軒下ニ相成候故、建坪ニ相加り不申候、併

軒下樽縁ニ捨柱有之候歟、惣体取合縁ニ相成候所、其

外樽縁廊下通樽縁并柱形印ニ有之、又ハ軒下ニ相

成不申候縁等ハ坪数ニ相加り不申候、尤井戸前縁其外

共大樽縁廻り等坪数ニ相除申候、

一一

一一

右之通、前々方坪取之任来りニ御座候、此段申上候、以上、

八月

岡嶋上野掾

九月十六日、

一、如左上野書付出、土山へ相渡、尤七个条御糺ニ付、

虎間北廊下良角ハメ壁ニ改候事、

外様小番衆所水船削之事、

十八日、

一、豊岡殿方虎間良方巻トま羽目壁ニ改候処、式々ま共

羽目壁ニ改候様被命候由、勢多人来伝達、

十一月十四日、

┌ (102才)

一、此度御掛紙減申来候処、口向廊下・溜間等、右融通書付差出候様土山申聞、則如左、

御物置ニ而式坪

御物置色紙部屋北板間六坪

御拝道廊下四坪式分五厘

×拾式坪七分五厘、

取次部屋ニ而拾坪半

御台所御門北供溜り四坪

×拾四坪半、

五点×式拾七坪式分五厘、

口向式筋廊下・溜間御絵図御有形之通ニ相成溜間

之坪

此坪式拾六坪七分五厘、

差引五分余坪御座候事、

┌ (102ウ)

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

六月二日、

一、殿上公卿諸大夫之間五間四尺五寸 折廻庇九間

此坪八拾八坪六分六厘、

御車寄三間 取合廊下七間半 北廊下七間半 清涼

殿へ取合式間半 清涼殿北御廁小用所御手水所式間半

取付壹間五尺五寸

此坪六拾四坪五分五厘、

清涼殿方北御所へ御廊下三拾間 記録所式間 翠簾五間 豊

部屋廊下造合共八間 同東廊下五間半

此坪百三坪五分、

宮方御休息所廊下造合四間 同北雪隠小用所通道

共五間 取合廊下二間半 西折廻廊下十八間半

此坪五拾壹坪七分五厘、

御詰御番所廊下造合六間 指出二間 湯殿通道共

三間 土間庇三間 御近習詰所廊下取込共三間

式口雪隠小用所七尺五寸 廊下二間 非藏人部

屋三間半 雪隠小用所五尺

此坪九拾六坪八分七厘、

内々御番所四間 取合老間半 廊下三間半 雪隠小用

所八尺 西廊下四間半

此坪三拾三坪九分六厘、

外様御番所御廊下造合六間 指出二間 式口雪隠

小用所通道二間半 同西取合二間半

此坪三拾四坪、

端非藏人部屋拾間 葛籠口二間半 同東取合二間半

廊下二間半 茶所二間半 縁廊下五間半 雪隠小用所

通道共三間 物置掌燈部屋湯殿腰掛共拾二間

西式口雪隠通道二間 老間三寸

此坪六拾八坪六分五厘、

伝奏詰所二間半 東庇二間半 西廊下六間半 東庇二間

御物置六間半 南庇五間半 東庇四間半

此坪四拾六坪式分五厘、

唐御門番所三間 指出三間 同三間半 折廻庇七間半 湯殿雪

隠四尺五寸 物置二間半 雪隠三尺五寸

┌ (103才)

此坪三拾八坪式厘、

御車寄前供腰掛九間半 平唐門内雪隠四尺八庭

巽角三口雪隠二尺五寸

此坪拾壹坪式分五厘、

伶人樂屋拾間 庇八間 指出三間 三口雪隠三尺五寸

器藏三間 同庇八尺

此坪五拾壹坪式分三厘、

行事宜預藏三間 間庇八尺 三个所修理職預

藏三間 間庇二間半 三个所置藏八間 間庇八尺

此坪百壹坪八分、

日之御門番所梁行四間半 指出三間 折廻庇八間 物置二間

湯殿雪隠四尺 式个所雪隠三尺五寸

此坪四拾六坪六分五厘、

┌┌

右者宝永五子年 天明八正月 晦日 炎上迄坪数書付、

二日勢多大判事へ相渡ス、

六月廿一日、

一、御造立之新図ニ清涼殿北御庭ニ小庭有之、其所ニ廊下

軒与内々小番所軒与出候、此間老間半程ニ相見へ候故、

明り取宜敷哉吟味仕候処、両方軒出ニ而相考候得者、

今少シ明り取不宜様奉存候、併西側二戸口御座候得者、

是迄之御番所方少々明り宜可有御座候、御尋二付、此段

申上候、以上、

六月廿一日

下ヶ札ニ左之通、

棟梁岡嶋上野大掾

┌ (104才)

此明り取可相成者、取合廊下^{三間}二被仰付候得者、建坪不相増、明り宜可有御座奉存候、右之通仕候得者、内々御番所を^{三間}北江寄候与奉存候、

七月九日、

一、御勝手向南北御地面間数少ク御座候二付、御清間・鍵番所之間数南北拾^{三間}之間、式間^二寄七、東西四間之所江^{三間}之間延シ振替割合候二付、御膳所・伝奏詰所絵図之通北寄二相成候儀二御座候、此段申上候、

廿五日、

一、御詰廊下西之方南北拾^{三間}之間、七間余与相見へ候儀如何、此儀、先達而御麁絵図拜見仕、相直引立候処、七間余二相成候義二奉存候、

八月二日、

一、伝奏衆部屋向物置雪隠縁より南之方江引直、議奏衆庭へ出下々道取建差構候哉御尋、付り入口之事、内々番所御詰之間夕仕切高塀付候事、外様・内々庭北之方御絵図之通二而も不苦候二付、実々御内儀之方二御差支も有之候ハ、懸紙方挟り候様相願可申候事、但挟り丈致朱引候積、

八日、

一、御廊下向上連子者御書付御座候木格子障子二仕候哉、右何れ茂御廊下向中敷居戸障子御有来御座候、此段御伺申上候事、

一、御拜道御廊下

紫宸殿北御廊下

虎之間・鶴之間・桜間・同板間共

御車寄并南北廊下

同北折廻り御廊下外様小番衆所際迄

平唐門

南御門

唐御門

右之分檜皮葺御座候哉、

御献之間・同御用場并西御物置

御詰御番所并落長押間・非藏人詰所等

同御雪隠小用所 同御物置并御色紙之間

伝奏衆部屋并非藏人休所

同南御物置并南建物^二个所

麯香絵之間 同東御詰取合御廊下

同所^二外様小番衆所へ廊下

内々小番衆所

外様小番衆所 端非藏人部屋

右之分式分木賊葺二御座候哉、

右之外諸建物・末々部屋々々・湯殿・雪隠・御蔵間庇并

井戸屋形等

右柿葺二御座候哉、

日之御門番所 伶人樂屋

御文庫向并所々御蔵 右之分瓦葺二御座候哉、

右者宝永已来有形御屋根之振合ヲ以御伺申上候、

葺方合印如何、可被仰付哉之事、

塀廻り并井戸屋根共

屋根 式越

屋根 ^{壹方式越} 壹方式越

屋根 布板

右印如何可仕哉、

「(104ウ)

「(105才)

右之通御伺申上候、

岡嶋上野大掾

十月

右御普請方伺書面之趣相糺可申上旨承知仕候、猶明日可申上候、

十月十五日

┌ (106才)

御造宮承知帳

一、御車寄

平唐門両妻

右御差図二唐破風御座候、

┌┌

┌┌

右式通御下ケ、落手承知仕候、相糺明日可申上候、

五月六日

一、唐御門内番所

内玄関前供部屋腰掛とも

右之通此度瓦葺被仰付候事、

右之通被仰渡承知仕候、

七月八日

一、御車寄前腰掛

┌┌

右式个所屋根瓦葺御治定旨、御書付被仰渡承知仕候、

八月三日

一、禁裏御殿向御屋根所々獅子口棟瓦三ツ頭・足元とも

御改、表菊二付候様申付候処、足元与鱒瓦之分ハ往古方

造り花二仕立来候旨、瓦師触頭申聞候間、相違茂

有之間敷候得共、別紙絵図面之通可然候哉、為念御懸

合申候事、

御造宮窺帳

一、下々道御有形石岩破御座候処、此度扣キ土ニテ石岩破之通

段ヲ付候様仕度旨、御普請方相伺候二付、右相糺候様被仰

渡承知仕候、則木子播磨・日用頭七兵衛等相糺候処、扣キ土ニ而

石岩破之通段ヲ付候義、寒中防キ無之候二付、忝度寒氣

二相当リ候得者、直ニ石灰気拔ケ、真土同様ニ罷成候旨申

聞候、殊ニ運送往来繫キ御場所ハ直ニ踏クツシ、相保

申間敷候間、御有形之通、石段ニ被仰出可然奉存候、

五月十六日

一、御普請方相伺候下々道御有形石岩破卜書付御座候

義石段之義ニ御座候旨、播磨申之候二付、此段申上候、以上、

五月十六日

一、新御廊下下々道

内侍所御通廊下下々道

右年々御用筋二付、御有来石壇等取払ニ相成候御場所ニ

御座候故、扣キ土ニ而者差支申候、

御末口方常御殿へ出候往来下々道

御詰方御池庭へ出候往来下々道

右者日々往反繁候上、御修覆等之節者、長木数多

運送仕候故、扣キ土二相成候得者、御保茂無御座、度々御」(106ウ)

修覆御座候而者、日々往反之差支二も相成可申哉

奉存候、

右書面之个所、修理職二而心付、水原撰津守二も申聞候

事も有之候、下々道之義被仰出之上二御座候得共、右个所之

分者、此度石壇二相成候様、私共、水原撰津守へ猶又掛合、

御普請方へ通達仕候義不苦候哉奉存候、

七月廿八日

伺之通不苦、

一、議奏候所・近習小番所隔之図鳥居付両面舞良

戸西開等付札仕、外二御扣壹枚出来、相添差上申候、

十月廿日

一、御有形中敷居高寸寸法相糺候処、御廊下廻り其外

一統寸法同様之旨御座候二付、絵図引立差上申候、

昨日御出し之絵図相添返上仕候、

十月廿七日

一、外様小番所翠簾掛ケ箇所之図壹枚

一

右出来二付差上申候、

」(107才)

御屋根御柱御床天井一一箇所付

一、公卿之間

御車寄同御廊下
端御廊下
但棟迄

御詰東廊下 但棟迄

御鈴踏歌 同断

新御廊下

右御屋根檜皮葺式分木賊

御献之間并御用場式分木賊

御物置式分木賊

御詰御番所式分木賊

同前御廊下式分木賊

御鈴廊下 但棟迄式分木賊

落長押之間式分木賊

非藏人詰所

伝奏部屋 非藏人部屋式分木賊

御詰西御廊下式分木賊

申沙汰之間并北御物置式分木賊

麝香之間式分木賊

御色紙部屋并東御物置式分木賊

内々小番衆所并同前御廊下式分木賊

外様小番衆所并納戸式分木賊

非藏人部屋 同物置

右御屋根上柿葺上柿

非藏人口北腰掛

右御屋根中柿葺

一、公卿之間

御車寄同御廊下
端御廊下

御拝廊下

麝香之間

」(107ウ)

紫宸殿北取合御廊下

御詰御番所

同東御廊下

御鈴廊下

新御廊下

右檜御柱

外様小番衆所

内々小番衆所

同前御廊下

申沙汰之間 『此御間新規故不相分、』

同東湯殿廻り

御色紙部屋 『此御間新規故不相分、』

御詰西御廊下

御物置

落長押之間 北并東側廻り

伝奏部屋

非蔵人部屋 同詰所

御猷之間 同御用場

御物置

非蔵人口北腰掛

右栴御柱

非蔵人部屋 同湯殿廻り

同物置

右杉御柱

平地ヨリ 板敷上端迄 寸法

御猷之間 同御用場

┌ (108才)

右畳上端迄 板敷上端迄 式尺六寸四分

公卿之間

御車寄御廊下

非蔵人部屋 同物置

外様小番衆所 同前御廊下

内々小番衆所 同前御廊下

御色紙部屋

申沙汰之間

御詰西并北御廊下 同物置

落長押之間

伝奏部屋

非蔵人部屋 同詰所

右畳上端迄 板敷上端迄 式尺六寸四分

御天井

一、虎間、鶴間、桜間

御車寄

同廊下

御北廊下

御拜道廊下

小御所方水鳥間東迄 御廊下

水鳥間東方北御廊下

八景・林和・水鳥・金鶏等間猿保、跡三間者棹縁、

御詰八景間以下六ま

落長押間

湯殿

各棹縁 中修 『〇』猿保

格天井板違 中修 書付無シ

棹縁 中修 『〇』屋根裏

棹縁 中修 『〇』猿保

棹縁 中修 『〇』屋根裏

棹縁 中修 『〇』屋根裏

棹縁 中修 『〇』猿保

棹縁 中修 『〇』猿保

棹縁 中修 『〇』猿保

平縁 中 『〇』棹縁

平縁 中 『〇』屋根裏

┌ (108ウ)

┌ (109才)

御詰西廊下 平縁〔〇〕猿保平縁
 同北廊下 棹縁〔〇〕平縁
 内々御番所 平縁〔〇〕棹縁
 外様御番所納戸 平縁〔〇〕棹縁
 非蔵人部屋 不残平縁〔〇〕平縁
 同詰所 平縁〔〇〕平縁
 御献間 棹縁〔〇〕猿保棹縁
 唐御門常番居所 屋根裏直打〔〇〕天井平縁
 露台代統御廊 仮粧屋根裏
 廿五帖半御廊下 同上
 九拾六帖御廊下 同上
 申沙汰之間 棹縁
 伝奏部屋 棹縁

（〇一〇丁表ヨリ一二丁裏マデ、空）

参内殿对屋男居以下口向雑々

造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

- 一、对屋通廊下〔三〕式間〔六〕半〔三〕
 - 同東御物置〔三〕式間〔五〕半〔三〕
 - 同西御物置〔五〕式間
- 此坪九拾九坪五分、
- 一、東对屋上家〔梁行七間〕
 - 東指出〔四間〕同東庇〔三間〕北庇〔三間〕
 - 西指出〔四間〕北庇〔三間〕
 - 三口雪隠縁共〔三間〕通縁〔四尺〕

┌ (109ウ)

- 東湯殿縁共〔式間〕雪隠縁共〔八尺五寸〕
- 西湯殿縁共〔式間〕雪隠〔八尺五寸〕
- 此坪百七拾七坪四厘、
- 一、同取合廊下女房部屋共〔式間〕宛式个所
- 取合廊下〔式間〕宛三个所
- 同〔式間〕縁廊下〔間半〕宛式个所共
- 此坪百七拾九坪、
- 一、同下家〔梁行五間半〕玄関〔式間〕宛式个所
- 小部屋〔志間〕同北物置〔志間〕輿部屋〔三間〕
- 薪部屋下湯殿雪隠〔七間半〕
- 此坪百四拾五坪、
- 一、参内殿〔梁行四間〕北指出〔志間〕東座敷〔五間〕

┌ (113才)

御車寄式間御雪隠溜共 卷間半

東式筋廊下式間 拾三間

此坪七拾坪、

一、御輿寄奏者所梁行四間

東取合卷間南指出三間北物置縁共 卷間 五間

北指出卷間半押入式間土間物置共 卷間 貳尺

雪隠小用所縁取込共 卷間雪隠小用所三 尺 五寸

此坪五拾五坪七分五厘、

一、長橋殿局五間半北指出式間茶所卷間半

東廂卷間半西取合卷間半内玄闕卷間半台所三間半

水棚庇三間上湯殿卷間半御雪隠五尺女房部屋四間半

押入卷間半雪隠縁共 四尺

女中部屋湯殿雪隠縁共 卷間半物置下女部屋共 卷間半

押入卷間半湯殿六尺雪隠三尺 五寸宛式个所乗物部三 間

此坪九拾七坪四分四厘、

一、御物仕部屋梁行三間北指出卷間同卷間半

南縁庇卷間東縁庇三間半土間庇拾 卷間半

惣湯殿式間三口雪隠縁共 卷間物置式間

雪隠三尺 五寸乗物部屋三間

此坪七拾坪八厘、

一、申口女孀詰所五間半北廂老間北押入三間半

式帖敷卷間西庇卷間半西取合三間北庇三間

南庇三間半南取合縁共 三間西物置卷間半

酒部屋掌燈部屋共 三間西縁廊下七間

此坪百拾七坪、

一、御差部屋梁行五間半水棚庇卷間半東庇四間

「(113ウ)

雪隠四尺南縁廊下三間湯殿雪隠卷間半

塩噌部屋式間

一、御末女孀部屋惣湯殿共 四間南指出式間

水棚庇式間宛五个所同 卷間半西押入卷間

式口雪隠縁共 七尺宛式个所薪部屋 卷間半宛三

个所同 卷間半同卷間半乗物部屋式間半同三間

物置卷間半三口雪隠三尺 五寸

此坪百貳拾四坪壹厘、

一、对屋女中蔵式間半間庇式間御物仕蔵三間半

間庇六尺

此坪貳拾坪貳分壹厘、

一、男居御膳所四間西折廻り廊下八間半

掌燈部屋六間

此坪四拾貳坪五分、

一、御清間囲炉裏之間鍵番部屋小間使部屋共

五間南押入卷間半西小部屋卷間

武家伺公之間四間溜之間取合三間

此坪六拾八坪七分五厘、

一、御厨子所三間半東指出卷間供御所三間

北水棚庇土間共 四間半物置部屋共 卷間半湯殿卷間半

式口雪隠三尺 五寸奥御膳所三間半西板間三間走庇式間

井戸前樽縁共 卷間半

此坪八拾貳坪三分三厘、

一、御清所廊下取込共 八間東廊下取合卷間半

同北取合卷間半南走庇卷間半

「(114ウ)

此坪百六拾九厘、

一、表御膳所同北庇經師部屋南取合樽縁共三間半四間半

此坪拾五坪七分五厘、

一、膳部所物置共式間半四間 行事部屋式間半水棚庇式間半

此坪拾五坪、

一、内玄關武家休息所共四間半六間半 東指出式間半

北指出式間半西庇間半雪隠小用所五尺南溜之間三間半雪隠三尺五寸御付供部屋式間半供部屋式間半腰掛式間半

此坪五拾八坪九分四厘、

一、取次詰所醫師候所共四間半六間 北縁庇式間半西取合式間半日記部屋西取合共式間半三間半 押入式間半

湯殿雪隠小用所五尺取合縁四尺御付雪隠小用所三尺五寸通縁式間半

此坪四拾四坪三分九厘、

一、勘使部屋四間半八間半 東指出式間半玄關式間半西庇式間半

南取合廊下式間半四間 部屋取合縁共式間半三間式間半物置式間半

勘使蔵式間半間庇式間半

此坪六拾七坪四分五厘、

一、賄部屋七間九間 北取合廊下式間半八百屋部屋掌燈部

屋下役部屋炭部屋共式間半五間 木具部屋三間

雪隠小用所三尺五寸南樽縁廊下式間半五間

此坪八拾六坪五分四厘、

一、御膳番部屋板元部屋共四間半五間半 吟味役部屋式間半

押入式間半雪隠小用所式間半雪隠三尺五寸北取合廊下式間半

下三間半

「(115才)」

此坪三拾七坪式分九厘、

一、御冷井板元物置魚屋八百屋部屋式間半八間半

塩噌部屋式間半七間半 庇式間半六間半 仕丁頭部屋縁雪隠共式間半四間半

三口雪隠三尺五寸炭部屋山科物置式間半四間

此坪四拾六坪九分九厘、

一、对屋口切手番所三間半四間 指出式間半湯殿雪隠三尺五寸

会所三間半指出式間半縁庇式間半雪隠三尺五寸式个所

此坪三拾坪式分式厘、

一、修理職部屋五間半七間半 南指出三間半同式間半湯殿雪

隠小用所式間半取合縁式間半東取合板間式間半物置式間半小細工所五間半七間式間半南土間部屋共式間半式間半

物置式間半湯小屋式間半式口雪隠三尺五寸物置式間半五間

此坪百式拾坪八分五厘、

一、取次部屋三間半拾五間 茶所式間半六寸 三个所

湯殿雪隠三尺五寸宛三个所雪隠三尺五寸三个所

此坪五拾七坪、

一、洪部屋御花壇物置式間半六間半

此坪拾三坪、

一、御釜殿式間半三間 薪部屋式間半御釜井式間半

役人詰所式間半

此坪拾四坪式分五厘、

一、御茶蔵三間拾式間 間庇式間半宛三个所

此坪三拾九坪六分九厘、

一、御台所御門番所三間七間半 折廻庇五尺式寸拾五尺式寸東指

出式間半東常番式間半西常番五間物置式間半

「(116才)」

式口雪隠三尺五寸、湯殿雪隠三尺五寸、宛式个所
供部屋四間

此坪五拾五坪三分九厘、

一、御末口番壹間半雪隠三尺五寸、会所壹間

此坪五坪五分四厘、

一、御使番部屋五間茶所板間壹間、走庇壹間

物置三間、湯殿縁共八尺、式口雪隠縁共八尺、小用

所通縁共五尺、山之者部屋壹間半、西物置壹間

鳥部屋物置壹間、雪隠小用所三間

此坪五拾六坪七分、

一、侍惣湯殿壹間半

此坪三坪七分五厘、

一、仕丁部屋四間、煮方部屋掃除之者部屋三間半、惣湯殿三間

式口雪隠三尺五寸

此坪三拾四坪五分四厘、

一、表口ニテ清書削書改之儀、鹿絵図ニ写候事、左之通、

对屋廊下北側東方拾間目戸二、障子一、踏段付事、

参内殿東方女中御用所御手水所構ニ付壁之処、中敷居戸二、セウシ一、下カへ、「(117才)

地坪数四千三百四拾式坪余、

差引

九百拾四坪余、此度之分坪数不足、

「(116ウ)

七月十八日、

一、参内殿御車寄方西御築地迄長五拾壹間余、

御築地根張六尺九寸、右小絵図差出、

一、南側御築地御台所御門南面迄

百式拾壹間余程、

此度百式拾四間半程、

一、御台所御門北面ニ而北御殿境迄

三拾六間程、

此度三拾六間程、

右者此度北御殿へ三間半余程入込候ニ付、同間ニ相成候、

但御台所御門見当りハ御妻道廊下边ニ相当可申哉

奉存候、

廿六日、

一、「口向御絵図表方御下知之通相改差出、(○挿入サル)」

申口拭板間仕切方西側御築地内側迄六拾九間、但御絵

図ニ而ハ壹間短ク相見へ申候、

一、定御修理方如左書付出、

御末女孀詰所西廊下南方押入壹間半

建具并床コ風呂台所建奥

長橋殿女房部屋榑縁之所部屋壹間建足

勘使所廊下脇三間建足

御膳所押入内御上段柱式本立西ノ方押入壹間

「(117ウ)

丈尺坪取等往反拔書

「六月廿三日、

一、此度口向ニ相成候

地坪数三千三百式拾八坪余、

宝永之度口向

有来り之所壹間持出し

御賄方前物置貳間入口庇共壹間新建

供御所梁行貳間北ノ方へ継足

御物仕部屋建足壹个所桁行二間半
梁行西側三間半
々東側四間半

御障子方物置建足

奏者所南方建足

同北ノ方壹間物置建足

一一

右之通書付御座候、其以前之義ハ帳面無御座、相知不申候

間、御尋ニ付此段申上候、御修理方

一、如左書付差出

宝永以来御建添之方

修理職役所 凡拾四坪半

局会所 々貳坪半

天明元年同三年迄御手沙汰御修覆ニ而増 々拾坪半

安永七年戌十一月 御物仕部屋 々拾坪半

天明二年寅四月 奏者所北ノ方 々三坪半

天明元年五月 同所南之方 々三坪半

山ノ者部屋 々貳坪半

明和二年・安永七年十二月兩度増 御使番部屋 々四坪半

明和四年 勘使所 々五坪半

取次詰所 々三坪半計

宝曆十年卯十月 女孀御末部屋物置 々五坪計

天明三年卯十一月十三日迄 申口北ノ方 々三坪半計

御流し裏 々三坪半計

「(118才)」

男居脇 々貳坪半

安永八年五月六日迄 申口南方 々壹坪計

清所御門常番 々貳坪計

吟味部屋 々壹坪半計

安永五年 賄所物置 々七坪半計

安永六年西〇月 御三間西御物置 々壹坪計

宝曆十年卯十月 取合新廊下 々壹坪計

安永五年申十月 長橋殿女房部屋 々壹坪計

安永七年戌九月 御膳所押入 々壹坪半計

供御所 々壹坪計

廿八日、

一、御呉服藏参内殿塀重門南方外貳間三間半ニ而拾

帖半、外廻り高塀取建御治定、風窓北貳个所西壹个所之積り、「(118ウ)

(〇)コニ六月廿三日ノ項アルモ、符号ニ依リ一七丁裏ニ移ス

八月十日、

一、对屋上家間半廊下開キト御絵図ニ御座候、御妻道之方

並二廊下杉戸御書付御座候、杉戸開キニ御座候哉、又御

遣戸開ニ御座候、何レ之方書入可申哉御伺申上候事、

『可為杉戸事、』

廿六日、

一、御勝手向

宝永坪数千四百四拾四坪五分五厘、

宝永已来出来方

坪数八拾坪、

々千五百貳拾四坪五分五厘、

此度坪数千五百拾四坪式分式厘、
指引拾坪三分壹厘減少仕候、

十一月六日、

一、御内玄閤溜り大廊下并右続廊下二付、是迄之通り二
可被仰付候様申上候、増坪凡

溜り間二テ三坪、

大廊下二テ拾五坪、

南続廊下二テ九坪、

ノ 式拾七坪、

取次部屋二テ式夕間相減、坪数拾坪半、

御台所御門内供溜り相減、坪数四坪、

ノ 拾四坪半、

右之通御座候、以上、

十四日、

一、今度御掛紙減申来候処、口向廊下・溜間等右融通書付

差出候様土山申聞、則如左、

御物置二而 式坪、

御物置色紙部屋北板間 六坪、

御拜道廊下 四坪式分五厘、

ノ 拾式坪七分五厘、

取次部屋二而 拾坪半、

御台所御門北溜り 四坪、

ノ 拾四坪半、

五点ノ 式拾七坪式分五厘、

口向式筋廊下溜間御絵図御有形之通二相成溜間

三坪、

┌ (119才)

此坪式拾六坪七分五厘、
差引五分余坪御座候事、

十八日、

一、大廊下溜間取合之処、勘使入口卜致融通、昨日七分
五厘卜定右衛門申出候二付、其段勢多・土山へ申達、

┌ (119ウ)

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

六月二日、

一、修理職役所

局会所

東西対屋

御物仕部屋

奏者所北之方

同所南之方

御使番御膳番部屋

山之者部屋

勘使

取次詰所

御末女孀部屋物置

申之口北之方

御流し裏

男居脇

申之口南之方

台所御門定番

凡拾四坪半

々式坪半

拾坪半

式坪計

三坪計

三坪計

四坪計

式坪計

五坪半計

三坪半計

五坪計

三坪半計

三坪半計

式坪計

壹坪計

式坪計

吟味役部屋

壹坪半計

「(120才)」

賄所物置

七坪半計

増坪数凡百三拾貳坪余、

右書付御尋之由二付、大判事へ出入、尤御正絵図之分二右之

通追々相増候事、御取解減少者無之事、

一、御輿寄奏者所拾間物置壹間半 折廻縁庇壹間半 湯殿

手水所壹間

此坪四拾九坪五分、

一、参内殿梁行六間 桁行八間 御車寄壹間半 東庇壹間半 指出壹間半

御雪隠溜共壹間半 東式筋廊下拾三間半 三口雪隠壹間半

小用所四尺

此坪百壹坪九分壹厘、

一、長橋殿局六間半 北縁庇壹間半 玄関壹間半 取合壹間半

台所壹間半 水棚庇三間半 雪隠三尺五寸 女房部屋壹間半

押入壹間半 雪隠通道共四尺 女中部屋湯殿雪隠

取込共壹間半 下女部屋壹間半 押入壹間半 湯殿壹間半

隱三尺五寸 乗物部屋壹間半 同西雪隠三尺五寸

此坪百貳坪五分、

一、御物仕部屋梁行三間 桁行拾壹間 土間庇壹間 水棚庇壹間 五个所

惣湯殿壹間 雪隠通道共壹間 乗物部屋三間 式口

雪隠七尺 雪隠三尺五寸

此坪五拾五坪九分九厘、

一、東对屋梁行七間 桁行拾八間 西指出四間 樽縁壹間半 押入壹間

東指出壹間半 三口雪隠壹間 通縁壹間半 玄関

湯殿共壹間半 三个所小部屋壹間半 三个所雪隠三尺五寸

三个所取合廊下壹間半 同壹間半 同壹間半 三个所同

壹間半 三个所下家四間 七間庇壹間半 薪部屋湯殿

雪隠壹間 乗物部屋三間半

此坪三百拾八坪三分壹厘、

一、西对屋梁行七間 桁行拾八間 東指出三間 押入壹間半 広縁壹間

西指出三間 三口雪隠壹間 通縁壹間半 玄関

湯殿共三間半 三个所小部屋壹間半 雪隠五尺貳寸 三个所取合廊下三間 同壹間半 三个所同壹間半 同壹間半

下家四間 七間庇壹間半 物置壹間半 薪部屋湯殿

雪隠壹間 乗物部屋三間

此坪三百拾五坪六分八厘、

一、申口女孀詰所梁行五間半 桁行九間 北庇壹間 西庇壹間半 西取合

三間 北庇壹間 南庇壹間半 南取合壹間半 同壹間半 酒

部屋三間 折廻縁廊下壹間

此坪九拾八坪七分五厘、

一、備後部屋梁行五間半 桁行五間半 水棚庇壹間半 湯殿雪隠

壹間 雪隠通道共五尺貳寸

此坪三拾三坪九分六厘、

一、御末女孀部屋梁行三間 桁行拾四間半 下家廂四間半

雪隠通縁四尺 水棚廂壹間半 同壹間半 五个所塩噌

部屋壹間 湯殿壹間 三口雪隠四尺 乗物部屋三間

三个所

此坪百拾四坪六分三厘、

一、对屋女中蔵壹間半 六間 間庇壹間半

此坪拾坪、

「(121才)」

一、男居御膳所^{四間} 西折廻廊下^{五間} 同繼合^{老間} 延四間 掌燈部屋廊下^{合共} 式間

此坪四拾三坪、

一、御清間 囲炉裏之間 鍵番小間 使部屋^{四間} 押入小用所^{式間} 武家伺公之間^{五間} 溜之間 取合^{四間}

此坪七拾三坪五分、

一、御厨子所^{四間} 供御所^{三間} 湯殿式口雪隱^{五尺式寸} 物置^{四間} 表御膳所^{四間} 南取合^{三間} 水棚庇^{式間}

此坪七拾九坪五分、

一、御清所^{梁行八間半} 庇^{老間半} 桁行拾九間半

此坪百六拾八坪七分五厘、

一、奥御膳所^{老間半} 北庇^{老間} 式間半

此坪七坪式分五厘、

一、表之口^{式間半} 物置^{老間半} 經師部屋物置共^{老間半} 行事部屋^{老間半} 水棚庇^{老間半}

此坪拾九坪七分五厘、

一、御台所^{梁行九間} 水棚庇^{老間} 式間

此坪百拾壹坪、

一、取次詰所^{四間} 指出^{老間半} 小用所 通道共^{六間半} 湯殿^{老間} 雪隱^{三尺五寸} 式間

此坪式拾四坪三分三厘、

一、勘使部屋^{梁行四間半} 玄闔^{老間} 五尺 物置^{老間} 湯殿^{老間} 雪隱^{五尺式寸} 南廊下^{老間} 四間 部屋^{老間} 勘使蔵^{老間} 間庇^{老間}

此坪五拾八坪式分四厘、

一、内玄闔 武家休息所共^{三間半} 庇^{老間半} 北取合^{老間} 式間半

雪隱小用所^{五尺式寸} 南溜之間^{三間半} 雪隱^{三尺五寸} 供部屋^{老間半} 腰掛^{五尺} 御付供部屋^{老間半} 式間

此坪五拾九坪九分七厘、

一、賄部屋板本部屋^{梁行四間} 縁庇^{老間} 仕丁頭^{老間} 部屋^{老間} 雪隱小用所^{四尺} 北御清所 江取合 廊下^{三間} 炭部屋 掌燈部屋 下役部屋 八百屋部屋 共^{四間半}

此坪百貳坪六分六厘、

御台所 取合 廊下^{式間} 吟味役部屋^{老間} 縁^{老間} 庇^{老間半} 魚洗所^{老間半} 式間

一、御冷井 八百屋部屋 共^{老間} 塩噲部屋^{三間} 木具部屋^{三間} 廊下^{老間} 雪隱^{三尺五寸} 惣湯殿^{老間} 三口雪隱^{四尺} 掃除方部屋^{老間} 炭部屋物置^{老間半} 式間

此坪六拾壹坪五厘、

一、对屋口 切手番所^{三間} 指出^{式間} 湯殿^{四尺} 雪隱^{三尺五寸} 会所^{三間} 指出^{老間半} 雪隱^{三尺五寸} 式个所^{四尺}

此坪式拾六坪四分六厘、

一、修理職部屋^{梁行四間} 縁庇^{五間} 指出^{式間半} 茶所^{老間半} 湯殿 雪隱^{老間} 三尺 湯小屋^{老間半} 物置^{老間} 雪隱^{三尺五寸} 式間

此坪八拾九坪三分八厘、

一、取次部屋^{梁行三間} 押入 庇^{老間半} 茶所^{式尺六寸} 三个所 湯殿 雪隱^{四尺} 雪隱^{三尺五寸} 式間

此坪五拾七坪九厘、

一、洪部屋 御花壇方物置^{老間半} 式間半

此坪拾三坪、

一、御釜殿^{老間} 薪部屋^{老間半} 御釜井^{老間半} 式間半

此坪百貳坪六分六厘、

此坪百貳坪六分六厘、

役人詰所壹間半 物置壹間

此坪拾六坪貳分五厘、

一、御茶蔵三間 間底壹間 二ヶ所

此坪三拾九坪六分九厘、

一、御台所御門番所三間 折廻底五尺貳寸 東

常番壹間半 湯殿雪隠五尺貳寸 物置壹間 貳口

雪隠七尺 供部屋壹間

此坪五拾六坪六分、

一、御末口番所壹間半 雪隠三尺五寸 会所壹間

此坪六坪三分三厘、

一、御使番部屋梁行四間 茶所壹間 南湯殿雪隠

五尺 北湯殿壹間 貳口雪隠壹間

此坪四拾四坪五分六厘、

一、仕丁部屋四間 縁底壹間 湯殿壹間 貳口雪隠

四尺 雪隠三尺五寸

此坪三拾七坪貳分四厘、

一一

一一

一一

右御建物之内、御取解之ヶ所并御建添等

有之、絵図面坪数増減難計奉存候、

右者宝永五子年天明八 正月晦日炎上迄坪数

書付、二日勢多大判事へ相渡入、

七月九日、

一、御勝手向南北御地面間数少々御座候二付、御清間鍵

番所之間数南北拾壹間之処、貳間×寄七、東面四間之

所へ壹間延シ、振替割合候二付、御膳所伝奏詰所絵図
之通北寄二相成候儀二御座候、此段申上候、

七月廿七日、

一、奏者所南長六帖敷御建繼、天明元年丑十月出来、

是迄南之方道筋御座候処、此度高堀へ取付申候

(○後闕、②「安政新造内裡諸備忘」二続久、一二四丁八空)

┌ (123才)

┌ (123ウ)

②「安政新造内裏諸備忘」翻刻

(外題) 安政新造内裏諸備忘 全

(本文)

(○前開、①「安政造内裡坪取御間敷等諸式覚帳」ヨリ続ク)

二付御□七分南之庭掃除口参内殿之庭之方二

土戸付候得者御差支之儀無御座候、尤右御建物

口向建坪二差構之儀無御座候、御有形御建物之儀

御座候得者、増坪二者相成申間敷奉存候、

右勢多大判事へ相渡ス、

一、口向御建坪惣凡坪取并宝永方炎上迄増減等

相計リ書付仕、凡積リ之訳書致、今日中二差出候様

取計呉候様、勢多大判事役所へ入来二而申間、

一、表中清書并此方方差上候六分計共被指出、御

拝道廊下之所二而譲り合等申上候通御治定、早々

清書出来候様被仰渡、但し表囲炉裏之間・

膳部所并御拝道廊下譲り合等懸紙いたし

差上候様被仰渡、

一、供御所・御膳所辺振替メリ内々相成候処、操替之儀

被仰渡承知仕候、尚向々へ掛合、跡方可申上候、

一、御呉服御文庫、参内殿塀重門南之方仕

切之西外へ付、戸前東門方往反在之候様可仕旨、承知

仕候、猶又小絵図二而可申上候、

一、奏者所南之方、近来御建添之長六帖、御在来之

通二取建候図引入并南高塀通南へ間半引寄、

是迄之通二通し、空地可仕承知仕候、

一、御花壇物置新加之儀、御間添承知仕候、

「(1才)

八月三日、

一、御膳所之辺、供御所明り取御メリ能相成候様、振替等

可仕旨被仰渡、彼是操合見候得共、御用弁方不

宜、供御所北之方江振替候而茂、格別御メリ之訳二茂

難相成、却而供御所へ立入候輩奥近ク相成候二付、是

迄之通二而、明り取能付替候計二仕度旨、則向々懸

合、奥江茂申上候処、御間届二御座候二付、別段小絵図

ヲ以不申上候間、此段御間届可被成下候、以上、

右伺之通表相済、

八月 勢多大判事 土山淡路守

八日、

一、参内殿一

一

右之分檜皮葺御座候哉、

一、申口并南取合廊下

同对屋へ折廻廊下

对屋通廊下南御物置式个所

東西对屋上家

参内殿東式筋御廊下

御釜井

御釜殿

男居取合御膳所共

鍵番所囲炉裏之間

武家伺公之間

武家同休息所玄関

对屋入口門

右之分式分木賊葺二御座候哉、

御清所

御台所

右之分棚葺御座候哉、

右之外諸建物・末々部屋々々・湯殿・雪隠・御蔵間庇

并并戸屋形等、

「(1ウ)

右柿葺二御座候哉、
御台所御門

御文庫向并所々御蔵、右之分瓦葺二御座候哉、
右者宝永已来有形御屋根之振合ヲ以御伺申
上候、葺方合印如何、可被仰付哉之事、
塀廻り并并戸屋根共、

屋根 式越

屋根 壹方式越
壹方式越

屋根 布板

右印如何可仕哉、

右之通御伺申上候、

岡嶋上野大掾

九日、

一、対屋通廊下之内、上家方御湯揚所北之方

御物置際迄中敷居戸障子二木格子御座候、

其外御廊下廻り、昨日申上候通り、中敷居戸障子

御座候、此段申上候、

一、御廊下向御絵図二中連子者御書付御座候、惣体宝

永已後御在形、中敷居戸障子二御座候二付、右之通

可仕哉、尤対屋通廊下之内、対屋上家方御湯

揚所北之方御物置迄、中敷居戸障子木格子二

御座候二付、右之通相認可仕哉、

右御伺申上候事、

右伺之通御治定、

八月十三日、

一、参内殿西南之方、宝永之御絵図二者高塀土戸

等御座候、此度御絵図引加可申哉、右両様奉伺候、

右伺之通相濟候旨、土山申聞、

御造營承知帳

七月八日、

一、御台所

対屋之下家并乗物部屋・輿部屋・湯殿・雪隠・薪部屋とも

御末女嬬部屋并乗物部屋・湯殿・雪隠・薪部屋とも

御物仕部屋并乗物部屋・輿部屋・湯殿・雪隠・薪部屋とも

御末口番所并町人溜

御末口会所

修理職部屋并付物

対屋入口番所

対屋会所

御花壇物置

町人溜

御台所御門番所

御使番部屋

仕丁部屋

内玄関前供部屋腰掛とも

右之通、此度瓦葺被仰付候事、

八月三日、

一、取次部屋

右屋根瓦葺御治定旨、御書付被仰渡承知仕候、

廿四日、

┌ (2ウ)

┌ (2才)

一、禁裏、仙洞、大女院、女院御所

御造管个所之内、別紙絵図面之御廊下朱引之

分、御畳敷之積候得共、右之分ハ御勝手向ニテ日々

通路多可有之、左候得者、別而切損も度々出来可致候

之間、此度拭板之積り相成申間敷哉、末向之義二も

有之、敢而御好等有御座間敷候間、拭板ニ相成候得者、

御保も宜候ニ付、則別紙絵図面四枚相添及御相談事、

可為拭板、

右伺書之通、此御所口向大廊下拭板御治定之

旨、為心得被仰渡承知仕候、

十月六日、

一、勘使部屋并束指出・玄関・物置・湯殿・雪隠取合共

取次詰所并医師候所西南取合廊下・茶所・日記部屋・

押入・湯殿・雪隠共

炭部屋・山科物置并雪隠其外取合共

御賄部屋・御膳番部屋・板本部屋・吟味部屋・行事部ヤ・

木具部ヤ并取合雪隠共

右者御台所大屋根統キ見渡末々之个所ニ御座候

間、此度瓦屋根之積ニ可仕候、先達而御台所計瓦

屋根伺相済申候処、右大屋根軒下ニ相成候部屋ニ茂

有之候間、書面之个所ニ旁瓦屋根之積りニ可仕奉存候、

十月

右御普請方方伺之趣御治定ニ付、為心得被仰渡承

知仕候、

御造管窺帳

一、長橋殿御局東之方北へ折廻り、

参内殿御車寄北之方、同南之方女孀御末部屋先

折廻り、

女中蔵東之方北江折廻り、

右高塀之上板見隠出来之事、

北広庭境并对屋東行当修理職部屋対屋境、

同入口対屋口中門南北并御茶蔵西ノ方并御末口奥之

高塀、

参内殿前御服所御文庫之高塀構之上、此度新規

御出来有之間鋪候哉、

右忍返し出来之事、

右御普請方方聞合有之候ニ付、書面之通可申達哉奉

伺候、

五月廿八日

『六月九日、右者口向相糺之上ニ而相違有之間敷候様、相違無之ニおゐてハ
此趣可申達事、』

一、御末口方常御殿へ出候往反下々道

一

右者日々往反繁候上、御修覆等之節者、長木数多

運送仕候故、扣キ土ニ相成候へ者、御保茂無御座、度々御

修覆御座候而者、日々往反之差支ニも相成可申哉奉存候、

右書面之个所、修理職ニ而心付、水原撰津守ニも申間候事

も有之候、下々道之義被仰出之上ニ御座候得共、右个所之分者、

「(3ウ)

「(4才)

此度石壇二相成候様、私共乃水原撰津守へ猶又掛合、御普請方へ返達仕候義不苦候哉奉伺候、

七月廿八日

『八三、伺之通不苦、

右朱書之通二付、即日水原撰州へ申立書、』

- 一、奥ノ口鍵番所囲炉裏之間、御元形内々方仕舞・囃子等御覽之節、舞台二相成候、此度者御能之義不被及御沙汰候旨二付、

一一一

八月

- 一、女孀預物置、御指図通二而者、男居明り不宜、此度者御能舞台手組等も無之候得者、右物置絵図朱書掛紙之通二相成候得者、明り取も宜候間、右之通相成候様、
- 「(4ウ)
- 御普請方へ御達御座候様仕度、絵図朱書掛紙ヲ以奉伺候、

九月十日

『九十二答、可為伺之通勝手可申達、』

- 一、勘使玄閔、御指図二樽張二引立候、書損二御座候二付、式台張二相成候様仕度、則図面ヲ以申上候、

十月廿日

『十廿一答、伺之通武辺へ可相達、尤引損卜申義、得卜間違

無之様可申達事、』

- 一、一昨日御普請方伺有之候惣御殿内翠簾掛ヶ个所修理職扣六分堺御敷図へ写取出来仕候二付、右六分堺并伺図十五通共差上申候、
- 但右伺図面取調候処、御車寄両脇并東西対屋

二ノ間御有形翠簾相掛候様覚悟仕候二付、右之通二掛紙仕、此段申上候、

十二月八日

一、御普請方伺候御台所清間上ヶ塗大サ之義、宝永

- 度御造營二者如何御座候哉、何分御元形上ヶ塗之義者、別紙絵図面二掛図之通二御座候、右式个所囲炉裏二ハ御元形銅覆釣有之候、宝永度出来之有無者難分候得共、右囲炉裏ハ式个所共御用品二寄、竈も築立、平日共大火ヲ焼立申候、先年右場所火之不用心之義も有之候由、旁其時分出来之筋二御座候哉、上塗計二而可相濟哉二候得共、何分二も御元形銅覆釣有之、火之用心之御手当之義二付、銅覆出来之方二可有御座哉、此段申上候、

十二月廿六日

『令承知候、自口向御用掛へ可及掛合候事、』

- 一、御普請方伺候御畳藏廂付方大サ之義、買物使方并畳職人共相糺候処、雨儀之節、御畳撰出シ入等右廂下二而取計候義二付、屋根形子者如何様二而も不苦、御元形之通二間四面ノ廂之下無御座候而者差支候趣申立候、依之御元形廂之図、別紙壹枚入御覽、此段申上候、

正月十日

- 一、御末女孀御物仕部屋其外口向諸役所部屋々々棚数書寄并御場所付衝立数并網張之个所等書付帳面出来二付、水原撰津守へ相達候様可仕哉、此段奉伺候、

正月十日

『正月十日、勝手可相達事、』

「(5ウ)

一、御台所清間上塗之義、御元形之通之大サ朱掛

絵図之通出来可申旨、且右両所銅覆之義、及掛合候処、

上塗厚多塗上ケ候得者、火用心も宜趣ニ候得共、外之

義共違火元之義ニ付、御元形之通銅覆取付候様可取

計段、御造営方ニ返答書水原撰津守差越候義ニ

御座候、依而此段申上置候、

正月十一日

一、参内殿・小御所上段御框之義ニ付、木子播磨相糺書付

差出、如左、

元御殿

参内殿御上段御襖建之所敷居之義、普通敷居

之内、溝内ひばたより框取付申候義ニ御座候、右御普

請方ニ御伺書面之通相違無御座候、尤木地御框木

品之義者覺不申候、

一一一

一一一

戊五月

一、鍵番所囲炉裏間良角御差図ニ仕切書落し

个所、別紙御扣之図ニ付札仕差上ケ、付札之通出来之義

水原撰津守へ可相達哉奉伺候、

七月五日

一、長橋取置絵図壹枚、御釜殿御竈絵図壹枚、為御扣

写出来差上申候、

七月廿三日

「(6才)

一、女孀詰所脇掌燈部屋、此度宝永度之御差図

を以出来之処、御有形ニ致相違候間一一一

一一一

一一一

正月

御屋根御柱御床御天井御門々 个所付

一、参内殿

右御屋根檜皮葺

『御有形式分木賊』

对屋中門

『女式分木賊』

東对屋

西对屋

同御廊下并御物置四个所

御物仕部屋

長橋殿

『女式分木賊』

女中部屋

『女式分木賊』

奏者所

申口

南取合

男居

掌燈部屋

酒部屋

鍵番所囲炉裏之間

并御輿寄

女孀詰所

『女式分木賊』

同御物置

『女式分木賊』

御膳所

物置

女房部屋

同局座敷

台所

『女上種葺』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

『女式分木賊』

「(6ウ)

武家伺公之間
 御膳所
 清間
 御差部屋
 御末女孀部屋
 取次詰所
 日記部屋
 大廊下
 大御台所
 溜り之間
 内玄関
 木具部屋
 御膳番部屋
 吟味部屋
 御献之間并御用場
 御物置
 御冷井
 御釜殿
 同役人詰所
 塩噌部屋
 右御屋根
 上柿葺
 御厨子所
 勘使部屋
 同南廊下
 炭部屋
 御賄部屋
 板元部屋
 御膳部所
 上段御膳所
 御金井
 御金井
 町人溜り

┌ (7才)

修理職役所
 御花壇物置
 御物仕
 下女部屋
 御末口番所町人溜り
 会所
 供部屋
 炭部屋
 右御屋根
 中柿葺
 山科部屋
 勘使蔵
 御茶蔵
 女中蔵
 右御屋根
 瓦葺
 御柱分
 奏者所
 参内殿
 御金井
 勘使部屋
 右檜御柱
 御茶蔵
 御膳所
 御膳所
 御物置
 鍵番所
 同北御膳所
 并御輿寄
 并車寄
 御茶蔵
 同部所

┌ (7ウ)

┌ (8才)

同東御物置^{〔檜〕} 取合之間^{〔檜〕}
 女孀詰所^{〔檜〕}
 男居^{〔檜〕}
 掌燈部屋^{〔檜〕} 物置^{〔檜〕}
 酒部屋^{〔檜〕}
 武家伺公之間^{〔檜〕}
 御差部屋^{〔檜〕}
 御膳所^{〔檜〕}
 御厨子所^{〔檜〕}
 清間^{〔檜〕}
 大廊下^{〔檜〕} 同南廊下^{〔檜〕} 炭部屋^{〔檜〕}
 御清所^{〔檜〕}
 大御台所^{〔檜〕}
 溜り之間^{〔檜〕}
 内玄關廻り^{〔檜〕} 同北并南共^{〔檜〕}
 供部屋^{〔檜〕}
 対屋廊下^{〔檜〕} 同御物置廻り^{〔檜〕}
 長橋殿^{〔檜〕} 同局座敷^{〔檜〕} 台所^{〔檜〕}
 東対屋上家^{〔檜〕}
 西^{〔檜〕}
 御釜殿^{〔檜〕} 同役人部屋^{〔檜〕}
 塩噌部屋西側^{〔檜〕}
 右梅御柱^{〔檜〕}
 御冷井^{〔檜〕}
 行事部屋^{〔檜〕} 吟味部屋^{〔檜〕}

「(8ウ)

板元部屋^{〔檜〕} 御膳番部屋^{〔檜〕}
 御賄部屋^{〔檜〕} 木具部屋^{〔檜〕}
 炭部屋^{〔檜〕} 山科部屋^{〔檜〕}
 塩噌部屋東側^{〔檜〕}
 取次詰所^{〔檜〕} 日記部屋^{〔檜〕}
 勘使部屋^{〔檜〕}
 御未女孀部屋^{〔檜〕} 同会所^{〔檜〕}
 御未番所^{〔檜〕} 町人溜り^{〔檜〕}
 御幸廊下北女房部屋北并西側廻り^{〔檜〕}
 女中部屋^{〔檜〕}
 御物仕部屋^{〔檜〕} 御物取交^{〔檜〕}
 同西共乗物部屋^{〔檜〕}
 下女部屋^{〔檜〕}
 東対屋下家^{〔檜〕}
 同番所并町人溜り^{〔檜〕}
 修理職役所^{〔檜〕}
 御花壇物置^{〔檜〕}
 右杉御柱^{〔檜〕}
 平地ヨリ^{〔檜〕} 板敷上端迄^{〔檜〕} 寸法
 一、申口
 女孀詰所
 男居 三尺
 取合并御物置

「(9才)

御差部屋 但台所式尺七寸六分

御末女孀部屋 三尺

御物仕部屋

台所上家二同様段違無之候歟ト奉存候、

対屋上家 三尺

同御上段 三尺四寸六分

同下家 上家高サト同様歟ト奉存候、

┌ (9ウ)

対屋御廊下

御物置三个所 式尺四寸

御幸御廊下

女房部屋

奏者所

御輿寄

参内殿 三尺

長橋局

鍵番囲炉裏之間

溜り之間

御献之間 同御用場

武家伺公之間

奥表御膳所 御膳部屋

清間供御所

大御廊下 同南御廊下

御清所

大御台所

行事部屋

吟味部屋

板元部屋

御膳番部屋

御賄部屋

木具部屋

仕丁頭部屋

溜り之間

内玄関

武家休息所

日記部屋

取次詰所

勘使部屋

右畳上端迄
板敷上端迄

式尺六寸四分

奥表御膳所

御上段

三尺壹寸

并御厨子所上段共

┌ 公卿之間

御車寄御廊下

非蔵人部屋

外様小番衆所┐

(○右ノ四行、墨抹サル)

┌ (10才)

御天井

一、御清所

御清所 平縁 修『○』上塗

御台所 平縁 中『○』上塗

同所北之方 平縁 修『○』平縁

山科部屋 屋根裏 中『○』平縁

木具部屋 屋根裏 中『○』平縁

内玄関向内玄関溜り間休息所
玄関取合之分 平縁 修『○』猿保

供御所御清間 平縁 修 平縁

御膳所 棹縁 中『○』上ケ塗

御同所廊下 屋根裏 修『○』平縁

御差下女部屋 屋根裏 修『○』平縁

女孀御末部屋十一住居勝手間 屋根裏 中『○』平縁

対屋廊下 棹縁 修『○』猿保

御幸廊下 棹縁 修 平縁

下廊下 平縁 修『○』棹縁

参内殿 中『○』棹縁

上段 格天井小組 修 小組

中『○』折上小組

┌ (10ウ)

中段 格天井板違 修 猿保

下段共 格天井板違 中『○』

西御縁座敷 棹縁 修『○』猿保

東御縁座敷 棹縁 中『○』屋根裏

御輿寄取合御輿寄奏者所共 棹縁 中『○』棹縁

長橋殿御局 棹縁 修『○』猿保

上段 猿保 修『○』猿保

二ノ間 棹縁 中 棹縁

三ノ間 棹縁 中 棹縁

女中部屋 屋根裏直打 中『○』平縁

御物仕五住居 屋根裏直打 修『○』平縁

勝手 屋根裏直打 中『○』平縁

東西対屋 猿保 修『○』猿保

上段式之間 棹縁 修『○』猿保

化粧間 棹縁 中 棹縁

東西対屋 平縁 修『○』猿保

三間 平縁 中 平縁

東西対屋 屋根裏直打 朱書之通、

五帖廊下 屋根裏直打

東西対屋

東西対屋

東西対屋

東西対屋

東西対屋

東西対屋

┌ (11才)

三帖五帖間 屋根裏直打 修『○』 天井

修理職部屋九帖四帖半三帖間

屋根裏直打 中『○』 平縁

対屋御番人居所

拾帖間物置式間

屋根裏直打 中『○』 平縁

清所御門常番居所

四間 屋根裏直打 修 天井

御使番部屋之内

三間 屋根裏直打 修 天井

山之者部屋 屋根裏直打 修 天井

仕丁部屋煮方部屋掃除者部屋共

屋根裏直打 修 天井

中『○』 平縁

┌ (11才)

此坪五拾壹坪、

一、唐御門番所^{三間}東指出^{三間半}西指出^{三間半}折廻廂

^{七間}北走庇縁共^{五間半}雪隠縁共^{三間}湯殿^{間半}

物置^{壹間半}雪隠^{三尺五寸}四方

此坪四拾坪三分九厘、

御造営承知帳

一、下々道御有形石岩破二御座候処、此度扣キ土二而石岩破之通段ヲ付候様仕度候、依之及御懸合候事、

西五月

右書面之趣、御普請方方相伺候由、石岩破之訳并扣キ土二而も御差支なく候筋二御座候哉否、相糺可申上旨

承知仕候、猶從跡可申上候、

一、唐御門外雨舎三个所、日之御門外雨舎壹个所、

右屋根柿葺之処、宝永度瓦葺之由二付、此度棧

瓦葺致度旨、御普請方方伺出候二付、右之義相糺

可申上候旨被仰渡、承知仕候、猶否追而可申上候、

五月廿八日

一、六門近比瓦葺之事、サン瓦二候哉、丸瓦候哉、可糺事、

右之通被仰渡承知仕候、猶相糺、跡方可申上候、

六月九日

一、六門屋根瓦葺之義、近来並棧瓦葺二相成候義

者、何之子細二而相成候哉、年月日何比二候哉、委可申上事、右之通被仰渡承知仕候、猶相糺跡方可申上候、

┌ (18才)

○十二丁裏より十七丁裏マデ、空

雑々

造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳

一、御遣水御文庫^{三間}間庇^{壹間}宛式个所

御文庫^{六間}間庇^{壹間}

六月十一日

一、四ツ脚以上門天井張候得者、何方カ張候哉、且天井張有之候門、吹抜之処ハ板ニ而も張候哉、

東寺慶賀門天井之義、吹抜等之様子、且何方

二而も天井張候門見当り有之候ハ、其趣可申上候、

四ツ脚以上之門ニハ、腰長押者無之、右腰長押之所ニ上之

柱貫同様ニ柱貫有之候事哉、右腰長押之処へ柱貫

入候門、何方ニ而も及見候処有之候哉、右等之義、木子

播磨へ可相尋旨、被仰渡承知仕、則申渡候処、猶跡カ

可申上候旨、申聞候、

閏六月三日

「(18ウ)

但御台所御門見当りハ御妻道廊下辺ニ相当可申

哉と奉存候、

廿四日、

一、勢多カ如左書付伝達、上野掾へ相渡、

南北間數百拾七間ト相見へ候、如何之事、

東西間數百拾壹間ト相見へ候、如何之事、

廿六日、

一、口向御指図表カ御下知之通相改差出、

御春屋糠俵入小屋建足、

日御門内物置建具五間之所、北ノ方へ壹間繼足、

右之通書付御座候、以前之義ハ帳面無御座、相知不申候

間、御尋ニ付此段申上候、

御修理方

一、如左書付差出、

宝永以来御建添之分

『宝曆十三年

天明四年卯五月建増共、』

日御門北ノ方修理職物置 凡三拾坪計

廿七日、

一、御構南北百五拾間

東西 南方 百貳拾五間半

北方 百貳拾三間半

北ノ方 南北 拾三間

東西 七拾九間半 入込有之、

右御地面檢地吟味仕候処、右宝永年中絵図面之通、

相違無御座候、以上、

「(19才)

丈尺坪取等往反拔書

七月十八日、

一、御車寄カ御築地迄 長拾壹間、

参内殿御車寄カ西御築地迄 長五拾壹間余、

御築地根張六尺九寸、

一、南側御築地御台所御門南面迄

百貳拾壹間余程、

此度百貳拾四間半程、

一、御台所御門北面ニ而北御殿境迄

三拾六間程、

此度三拾六間程、

右者此度北御殿へ三間半余程入込候ニ付、同間ニ相成候、

七月 岡嶋上野掾

「(19ウ)

九月廿日、

- 一、御旧地蔵ハ如何程之間数ニ可仕哉之旨、上野掾申聞候
- 二付、御能蔵三間二五間、三間二拾五間、式棟割合ニ而、三間二拾間取建可申、日御門内ニ是迄有之候、三間二拾壹間壹棟并有形出納預リ当役所預リ仕切付壹棟廻り高塀入口式个所付壹个所御屋根取置之積

図面出来候様申渡、

御指図御用坪取間尺丈尺之扣

六月二日、

- 一、御池庭南御文庫三間間底壹間半式个所御文庫八間間底壹間半式个所御文庫式間半間底壹間半六間
- 此坪四拾三坪五分、
- 御遣水御文庫三間間底壹間半式个所御文庫式間半六間
- 間底壹間半壹間半
- 此坪四拾九坪五分、

廿三日、

- 一、御指図六分計ニ而御手本御渡御座候而、口向之所写取、惣而口向諸役所御絵図仕立候様被仰付候ニ付、写取候処、宝永年中出来仕候中井主水方ニ所持仕候
- 絵図六分計ニ而御座候処、引合見候処、御構御築地北角之所、東側ニ而式拾間計北へ間数相延候哉、并右御地面続西江拾三間元御有来入込ヲ引、北御

「(20才)

殿地へ此度式拾間余相延御座候哉ニ奉存候、

右書付大判事へ相渡、尤棟梁上野方指出候事、

七月廿五日、

- 一、南北間数百六拾七間与相見へ候義如何、
- 此儀、南側有来御築地、前二申上候通、御築地内外之間数計リ違ニ而、百六拾七間二相成候儀と奉存候、東西間数百廿壹間半与相見へ候義如何、
- 此儀、南側ニ而百式拾三間半、北側ニ而良方ニ而西へ寄、御有来ニ付百式拾壹間半ニ御座候、
- 右書付棟梁方取之、勢多大判事へ相渡ス、

廿七日、

- 一、日御門内修理職方蔵・御疊蔵等之御構共、北之方御仕切江引寄セ、日御門方正面通ニ相成、土戸江付候様承知仕候、
- 一、樂器蔵西境仕切西外ニ有之候隠所相止メ候様被仰渡承知仕候、
- 一、惣御築地廻りハ是迄御有来之間数之通ニ而引入、尤北御殿地御構御築地迄も引入、北御境之高塀仕切迄も付立可申旨承知仕候、

廿八日、

「(20ウ)

- 一、日御門内御疊蔵并修理職御預蔵北ノ方へ取替御治定、今日被仰渡、
- 八月六日、
- 一、八分計御絵図御築地内法南北間数百六十五間御座候、先達而北御殿地へ四間入込候義御座候故、百六十六間ニ相成候趣引立候儀ニ御座候、御絵図ニ而者、北

御殿地へ三間之入込ニ相成申候、

右先達而御殿被成候通、東側ニ而惣間敷ニ而不足御座候哉ニ奉存候、

十五日、

一、東宮御門跡并御台所御門跡板塀ニ而も取建可仕哉

并御旧殿東西側ニ壹个所宛、北側式个所穴門之儀、

御門形チ引立可申候哉、板塀ニ而も取建可仕候哉、御築地

引立仕候ニ付、此段奉伺候、已上、

八月

修理職

右高丘殿へ相伺候処、後剋日野殿方御築地不残引立、

御門穴門とも塗立候様被命、

「(21才)

御造宮伺帳

一、御築地高石口ヨリ
榑下端迄九尺三寸計、

根張ニテ壞レ有之候得共凡七尺計、上ニテ凡五尺計、

柱内法七尺式寸宛、灰筋五通、但筋幅六分、

筋之間壹尺五寸宛六通、

素柱見付壹尺計
見込六寸六分七寸三分迄

南之方ニテ

石垣高五尺六寸五分、

築地チリ四寸五分、

瓦者見江渡り不申候、

右今日修理職御敷地へ見分ニ罷越候処、書面之通御

座候、

五月廿五日

一、御池庭御遣水庭仕切高塀

一一一

一一一

右高塀之上板見隠出来之事、

一、北広庭境并对屋東行当修理職部屋对屋境

同入口对屋口中門南北并御茶蔵西ノ方并御末口

奥之高塀、

一、参内殿前御服所御文庫之高塀構之上、此度新規

御出来有之間敷候哉、

右忍返し出来之事、

右御普請方方聞合有之候ニ付、書面之通可申達哉

奉存候、

五月廿八日

『六月九日、右者、口向相糺之上ニ而相違有之間敷候、弥相違無之二

おみてハ此趣可申達事、』

一、唐御門前雨舎三个所瓦葺ニ候処、享保十巳年十一月

比御修覆之節柿葺ニ相成候段、小堀・中井方方申越候、

於修理職も相糺候処、右柿葺ニ相成候訳等、書留所見

無御座候、仍此段申上候、

六月五日

一、御殿統之外御築地際ニ有之候役所向部屋之床高

之義、先達而伺図之内ニも無之候ニ付、床高糺ニも相洩候、

御有形御台所向床高ト同様之義ニ付、此度も右同様

之高サ無御座候而ハ差支之筋も御座候間、惣御台所

向床高式尺六寸四分同様ニ相成候様、為念御普請方へ

「(21ウ)

御達し二相成候様仕度候、

六月九日

一、六門屋根瓦葺之義、御有形被成御尋承知仕候、御門之向者本丸瓦葺二而、番人居所之儀者、近来並棧

瓦葺二相成御座候、

一一

一一

「(22才)

六月十一日

一、六門番所并三門番所共瓦葺二相成子細之義

修理職二而難分候付、水原摂津守へ相尋候処、別之子細

も無之、風損・雨洩等二而、度々御修覆御費も有之候二付、

伝奏衆へ伺相済、瓦葺二相成候旨申聞候、尤年月

之義者、天明五巳年十二月廿七日右瓦葺二伺相済候

段、御付方修理職へ申達候旨、修理職方二書留御座候、

御尋二付、此段申上候、

六月十二日

一、四ツ脚以上門天井張候義者、三ツ外組上之軒桁方張立

申候、冠木方上天井張候義者、薬医門二御座候、普通二者

凡天井無之奉存候、尤安井御殿四ツ脚門二八天井張

御座候、尤元御殿四ツ脚門二八天井無御座候、

一、天井張御門東寺慶賀門并大仏釣鐘堂西之方

八ツ脚門二組天井有之候、

一、四ツ脚以上門腰長押入候義者無之候、腰貫入候義者

普通二御座候、尤長押入候義者、御恰好可宜奉存候、

閏六月

木子播磨大掾

一、御普請方方伺二出候御敷地御築地際二取建候

部屋々々巷間通東へ寄度旨、書面之趣相糺候処、

御使番部屋・仕丁部屋・唐御門番所等之義者、伺之

通東へ寄七候テ御差支無之候、取次部屋同様寄七

候而ハ修理職部屋入口先へ出張二相成、長キ木材

運送二差支二相成申候、右入口之付替方も無之候二付、

無抛最初御差図之通二取建二相成可然奉存候二付、

此段申上候、

閏六月廿二日

『伺之通、猶武家へ可及掛合候事、』

一、勘使所預り円座之義二付、豊職方書付二通差

出、勘使方添書仕、右円座之義、宝永度御造宮方

二而出来□有無難相分候得共、何分禁裏御豊

御定高之内二而三个一取替等仕候筋二御座候、右之内二而

御表御用二上ケ来候処、以来右御用者無之旨被仰渡候

得共、右御用之外、口向二而夫々借渡方御入用二付、右御

出来方申立度書付式通、勘使添書等御覽、此段

奉伺候、

『不被及御沙汰、御道具方へ可差出、則書付兩通被返下、』

戊六月廿九日

一、御池庭諸鳥舎取建之義、御敷図御出来之節之御

沙汰も無御座候、尤宝永度之御図面二鶴外屋計り者

御座候処、私共心付不申伺落二相成候、依之定而御庭

向御取繕も可被為在事故、其節相伺可申心得二御座候

処、此節御橋者御有形俣二而御繕二取掛り、御池等

浚御座候趣承知仕候、左候得者、

遷幸之上、右御取繕之俣二而、鳥類御取寄之義も

「(22ウ)

「(23才)

御座候ハ、諸鳥舎無御座候而ハ御差支ニ相成可申、御花壇方方も申立候故、御沙汰も被為在候義ニ御座候哉、又者

屋根裏直打 修 天井
中『○』平縁

「(24才)

口向方申立方并仕法等取極候而相伺之筋ニ御座候哉、此段奉存候、

戊七月十一日

修理職

『即答、

口向ニ而仕方取極メ、以図面可相伺事、』

一、浮道具之義ニ付、別紙書付耆通并宝永度例書

耆通相添、此段申上候、此度御不用之品も御座候ハ、御差略有之、御造営方へ之懸合方御下知御座候様仕

度候、

八月廿八日

「(23ウ)

御屋根御柱御床御天井御門々 个所付

御天井付

一、日之御門番所

三ま

屋根裏直打

修『○』平縁

中『○』

一、清所御門常番居所

四間

屋根裏直打

修 天井

中『○』平縁

一、唐御門常番居所

(○以下、二四丁裏ヨリ三二丁裏マデ空、三三二丁表ヨリ三四丁表マデハ六四六六頁ニ翻字ス、三四丁裏ヨリ四二丁裏(末尾)マデ空、又、切紙ニ紙アルモ、翻刻ヲ略ス)

東京大学史料編纂所研究成果報告 二〇二五―一

内裏造営関係基礎史料集 2

二〇二四年度東京大学史料編纂所一般共同研究

「中井家文書」を用いた大工組織の業務復元に関する基礎的研究」

研究代表者 角田真弓（東京大学大学院工学系研究科）

編集 新井重行（東京大学史料編纂所）

発行 東京大学史料編纂所（東京都文京区本郷七―三―一）

発行日 二〇二五年六月三〇日

印刷 勝美印刷株式会社